
遊戯王GX-並行世界決闘録-

語り屋K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX - 並行世界決闘録 -

【Nコード】

N0646Y

【作者名】

語り屋K

【あらすじ】

ある日わけもわからず転生した主人公天川黒兎。限りなく同一で、しかし異なる世界を、よりよきものへとしていくために、彼はどんな出会いと冒険を経験するのか。

この作品は遊戯王GXの二次創作ですが、作者の原作知識は激しく曖昧です。多少のズレはお見逃し下さい。また、今作品にはシンク口、エクシーズ、オリカは出ません。

処女作のため足りないことが多いと思いますが温かい目で見てください。

オリジナル設定（前書き）

整理に伴い、オリジナル設定をあげます。
以降、増えるたびに書き足していきます。

オリジナル設定

主人公

名前：天川黒兔 テンカワクロト

年齢：転生前 20 15 現在 16

身長 体重：175 63

外見：黒髪赤目

所属：オシリスレッド

所持デッキ：闇風混合以下増

詳細：「遊戯王GX」の世界に転生した青年。何故転生したか、若返りが起きたか等は不明。転生前は重度の遊戯王オタで、二次創作の知識を活かし、原作と異なると割り切り悲しい事件を防ぎに動く仲間思いで面倒見がよく、熱いハートの持ち主。一見冷静だが、一度動けば簡単には止まらない。弱い者を虐げることなによりも嫌い、関係ない人はもとより、仲間に矛先を向ける相手を一切容赦しない。

好きなことはデュエルとバイクで爆走すること。そしてイベントで暴走すること。

デッキは複数所持予定。

精霊を見ること、触れることができ、セームベルとアトモスファイアがいる。基本的にそばにいるのはセームベル。

精霊

召喚師セームベル

愛称：リン

サイズ：130位

外見：OCG参照

詳細：黒兔の精霊の一体。基本的にそばにいて、一緒に行動している。しっかりしているが甘えたがりで、よく黒兔のベットに潜り込

む。抱き着き癖有。黒兔の呼び方は「クロ兄」

THEアトモスファイア

愛称：ファイア

サイズ：3メートル位

外見：OCG参照

詳細：黒兔の精霊の一体。黒兔の最も信頼するエースであり相棒。人語を話すことは出来ないが理解はしており、たまに外でブラッシングしてもらうのが好き。よくリンを乗せて空を飛ぶ。

ヒロイン

名前：種島咲夜

タネシマ サクヤ

年齢：16

身長 体重：168 ???

外見：白髪ポニーテール

所属：オベリスクブルー女子

所持デッキ：植物+時花の魔女

詳細：本作のメインヒロイン。黒兔とは、入学前の1年間に会う。その後、アカデミアの覗き事件時に再会。1年前の事件をきっかけに黒兔に好意をもつ。

小さいものが好きで、よくリンをかまいたがる。

デュエルの実力はブルーに恥じないもので、実力のないままブルーになる女子に疑問がある。精霊は時花の魔女・フルール・ド・ソルシエール

精霊

時花の魔女・フルール・ド・ソルシエール

愛称：ソル

サイズ：170位

外見：OCG参照

詳細：咲夜の精霊。常に咲夜のそばにいる。咲夜の黒兎への恋を応援している。が、たまにからかう。
また、咲夜が暴走した時は止めに入るストッパー！。

オリジナル設定（後書き）

どうでしょうか？

主人公のデッキはいくつか案がありますが、こんなデッキを動かして見てほしいというのがあれば、感想にでも書いて下さい。主人公がモブキャラが使わさせてもらいます。

第一話「転生と出会い」(前書き)

11月02日整理及び増量

整理前の一話と二話です。最初からこうすればよかった。

第一話〜転生と出会い〜

SIDE〜語り屋〜

「出来た！」

とあるアパートの一室、明るい声が響き渡る。

「メインデッキはこれでいいとして、サイドは何を用意するか？」

彼の名前は天川黒兎テンカワ クロトとある大学に通う自称決闘者デュエリストである。

「明日は久しぶりの大会だからな。気合いいれてかねえと。ってこんな時間か。明日のためにももう寝るか。」

ベットに入る前にデッキから2枚のカードを取り出す。

「『アトモスファイア』、『セームベル』、明日は頼んだぜ。」

デッキに戻すと、黒兎は部屋の明かりを消した。

「アニメみたいに精霊が答えてくれるといいんだけど。ま、もうこんな歳だしな。そんなこと言ってられないか。」

そして黒兎は眠りについた。この夜、とあるアパートの一室は光りに包まれ、何事もなかったかのように元に戻る。内部を完全な空き家として。

SIDE〜黒兎〜

「……ター、マスター、起きて下さい。」

誰かの声がする。この部屋は一人暮らしで俺以外はいない。ということ。これは隣室か気のせいかな。大会は午後からだしもう一眠り…

「起きて下さいってば。マスター、マスター。」

おかしい。体が揺れている。こんな朝から地震だろうか。ならば—
先ずベットの下に、

「起きて下さいって言うてるでしょうが！」

ぐっ、一際大きな声と腹部に重みが降ってくる。たいした重さじゃないからいいが、やはり誰かがいたのか。鍵はしたはずだが誰かきたのだろうか。

「あっ、やっと起きてくれた。おはようございますマスター。」

腹の上に可愛い女の子がいる。

「違う！俺は妄想癖はあるがロリコンではない！断じて違う！」

俺はこんな危険な野郎になった覚えはない。そうか、これは夢。もう一度寝るか夢から覚めれば。

「落ち着いて下さい。今からこの状況の説明をしますから。」

早く覚めろ、早く覚めろ、覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ…

ギョッ

「話しを聞いて下さい。」

女の子が泣きそうな顔で抱き着いてきた。うん、状況はわかんないけど女の子泣かせるのは駄目だよな。一旦落ち着こう。

「ってあれ？君の顔どつかで見たことあるような…」
「なんだかいつも見ていたような顔なんだが。」

「あつ、やっと聞いてくれるんですね。コホン、まず私は、マスターの精霊『召喚師セームベル』です。」

そうそう俺のデッキのアイドル、『召喚師セームベル』にそっくりジャマイカ。

「ってセームベルだって！？んな馬鹿な！」

「馬鹿でも阿呆でもありません。ここはマスターの世界でいうアニメ『遊戯王GX』の世界です。」

な、なんだってー！！！？？？

SIDE→セームベル

ああ、またマスターが壊れかけてる。流石にすぐ対応しろは難しいよね。私はカードからいつも見ていたし、マスターとこうして話せるのが嬉しくて順応したけど。

（今作は現実において、物に魂が宿るといふ説を本気で信じています。）

「あ、あの、マスター落ち着いて下さい。確かに簡単に受け入れら

れないとは思いますが…」

「いやったー！！GXの世界ってマジで！？ついに、ついに来ちゃいましたよ、コンチクショーー！！」

……………あれ？

「君が俺の精霊だっけ。いや〜本当にいたんだな。っていうか見えるよ、話せるよ、触れるよ。イヤッホー！！」

きや、マスターがなにやら喜びながら私に触ってきます。嫌じゃないんですがいきなりは恥ずかしいですよ〜はう〜／＼／

「つと、ゴメンゴメン。いきなり触るのは嫌だよな。」

「あ、いえ、嫌じゃないです！！もつと触ってくれても、ゴニョゴニョ…ってそうじゃなくて！えつと受け入れてもらえたんですか？」

「ああもちろん。いや〜夢だったんだよね。んで今はいつ？ここはどっ？」

「あ、はい。今は、マスターの知るGXの世界の始まりから1年前です。遊城十代さんと同期になるので、マスターは今15歳です。ここは入学試験会場に近いアパートです。」

「え？あ、本当だ！懐かしい顔だな。」

マスターは鏡を見ながら御自身の体を調べてます。

「つて目が赤い！？なんで？」

あっ忘れていました。

「それはですね、マスターの現実そのままの顔ではモブキャラになりそうだったので、少しいじられたそうです。」

さらに言うならガン ムSEEDDESTINYの主人公だった人がモデルだったり。

「なんて危険な発言を。まあカツコイイし良しとするか。」

「はい！マスターはとってもカツコイイです／＼／」

私は使いにくいと評価を受け続けてきましたが、そんな私をマスターはとても大事にしてくださいました。そんなマスターがカツコ悪いなんてありえません！

「そういえばさっきからマスターって、なんだか違和感が。敬語もやめてくれ。」

「え、ですけどマスターはマスターですし。」

「ああいって。そんな柄じゃないし。名前で呼んでくれ。」

これは困りました。名前なんて恥ずかしいです／＼／でもせつかくのチャンスなんです、ムー。

「あ、じゃあお兄ちゃんはどうですか？私こんな格好ですし。」

「却下だ。小さな女の子にお兄ちゃんと呼ばせる。なんて危ない奴

なんだ。」

「じゃあ名前と合わせて『クロ兄』で。これ以上引きません。」

「んー、まあいいか。後は敬語なんだけど。」

「流石にすぐは無理ですよ。少しずつやってみます。」

「ん、了解だ。」

なんとかマスター、あ、今からはクロ兄か。クロ兄から譲歩を引き出せました。しかし、私だけというのはどうも……

「そうだ！クロ兄、私に名前つけて下さい！」

「名前？」

「はい。セームベルじゃ他のカードと同じです。私だけの名前をつけて下さい。」

「そうか、わかった。んー……」

やりました！クロ兄から私だけの名前をつけてもらえます。これは私達の特別な名前です。ウットリノノ

「リン。ってのはどうだ？」

「リン？」

「ああ。セームベルの、ベルの部分は日本語にすると鈴で、そのま

まじやなんだからリン。気に入らないか？」

「そんなことありません！すごい嬉しい／＼／」

「そっか。気に入ってよかったよかった。」

『リン』クロ兄が私のためにつけてくれた名前。

「ところでリン。俺のカードはどうなってる？」

「あ、デッキはここに。他のは押し入れにあるよ。」

「お、敬語が消えてきたな。」

名前をもらったからか自然に話せる。クロ兄を押し入れに向けて、赤い顔を隠さなきゃ／＼／

「お、デッキは無事なのか。リンもちゃんというな。こつちの世界でも頼むぜ。」

クロ兄はデッキの1枚1枚に声をかけてます。この優しさは世界じるときじゃ変わらない。

「予備のカードもほとんど持ってたやつのままか。ん、HEROがないいな。チューナーとかも。」

「こつちの世界で特別なカードやルールが出来てないのは無いよ。他は新しいのもあるはず。」

「デッキがそのままだったのはそういう訳か。んじゃちょっと弄っ

たり新しいのも作るか。」

「なんだか考えてる。クロ兄はデッキ作る時、皆が見ないカードも使ってみようとするから、精霊にすごい慕われてるんだよ。」

「後は聞いときたい事ないかな？大体は答えられるけど。」

「あ、じゃあこの世界について。ここは俺の言うアニメ、原作通りの世界なのか？」

「大元はそう。だけど、私達っていうイレギュラーが混じったからまったく一緒じゃない。世界に必要な大きな事件は起きるけど、クロ兄が動き回って世界が壊れるなんてない。ここは似てるけど違う世界だよ。」

「そうか。それなら、少しでもいい世界にするために頑張ってみるかな。幸いこの世界はデュエルでなんとかなるし。」

「そう言うと、またデッキを弄りだした。邪魔しちゃ悪いし、大人しく見ていようかな。ずっとそうだったわけだし。」

「何ぼーっとしてんだ。こっちきて手伝ってくれよ。」

「えっ?」

「この世界じゃリンが俺の相棒なんだろ。だったら俺のそばにいてくれないと心配じゃないか。」

「あっ、えっと、デッキ作るの邪魔じゃない?いて、いいの?」

「いいに決まってるだろ。一人でデッキ作っても退屈だし、実際に闘ってもらうのはリン達なんだから。こっちに来てよ。」

もう見てるだけじゃないんだ。楽しそうにカードを見るあの人のそばにいていいんだ。気がついたら私はクロ兄に抱き着いていた。

「クロ兄、これからよろしくね。ずっと一緒だからね。」

「うお、いきなり飛びつくな。危ないだろ。ま、よろしくな。」

この世界で私はこの人と一緒にいるんだ！

SIDE 語り屋

こうして、一人の決闘者と精霊は出会った。彼らは共に新たな世界を過ごし、強い絆で結ばれていった。

そして、1年後……

第一話〜転生と出会い〜（後書き）

以下、整理が終わり次第アップしていきます。
再び初めからですがお付き合い下さい。

第二話〜HEROとの出会い〜（前書き）

11月02日整理及び増量

整理前の三話と四話です。この調子でどんどんいきます。

第二話〜HEROとの出会い〜

SIDE〜黒兔〜

はい、ただ今こちらはデュエルアカデミア入学試験会場前に来ています。この1年、デュエルばかりやってきました。ついにその成果を試す時。何？展開が早い？気にするな。俺は気にしない。あつもちろん中学は出ましたよ。じゃないと入学出来ないし。まあ元は大学生、余裕の1年だったな。

「クロ兄、危険な回想はほどほどにしてもう入ろうよ。ただでさえ筆記で解答欄をずらすって快挙やったんだし。教師の心の評価は落とさない方が無難だよ。」

「そうだな。リンの言う通りだ。実技は失敗が許されん。」

「じゃあなんで受け付けに見えるかどうかのところで隠れてるの？もうすぐ受け付け終わるよ。」

隣で心配しているのはリン。この世界に来てからの同居人で、『召喚師セームベル』の精霊だ。ちなみに一般人には見えないから小声で会話中。あ、この世界つてのは、俺、転生者っす。ゾンビではありません。

「ねえ、さっきから誰と話してるの？」

「気にするな。ここでスタンバる訳は、この世界の主人公、遊城十代とのフラグを得るためだ。今日は朝から見張っていたが、やはり原作通り遅刻してくるようだしな。」

「それはわかるんだけど。」

「一緒に遅刻ぎりぎり、まず間違いなくクロノスが突っ掛かるから二人揃ってクロノスKO。これ以上のフラグ建設はこれから先では不可能だ。」

そうとも、せつかくGXの世界なのだ。十代フラグを逃がすものかと、噂をすれば走ってきた。

「よし、出発だ。」

「はあ、せめて失敗しないよう願ってるよ。」

待ってる主人公！

SIDE 十代

やっべー、こんな大事な日に電車が遅れるなんて。とにかく今は走るしかない。滑り込みで受けさせてもらえるかも。お、受け付けが見えてきたぞ。よし、ラストスパート。

「遅刻だ遅刻だ、道を空けてくれー！！」

うわ、危ない。横からいきなり飛び出すなよな。って遅刻、もしかして、

「お前もアカデミアの受験なのか？」

「その言葉と様子だとお前もか。早くしないと閉められるぞ。」

やっぱりか！こいつも決闘者だ。くー、こんな状況じゃなければデ

ユエル出来たのに。

「一人じゃ駄目でも二人ならなんとかなるかも。一緒に飛び込むぞ。」

と、今はそれどころじゃなかった。あいつの言う通り二人でなら。

「すみませーん！受験番号109番天川黒兎です！」

「同じく、受験番号110番遊城十代です！」

「受け付けお願いします！！」

「おー、君達早くしなさい。受け付けならやっておくから、今ならぎりぎり間に合つはずだよ。」

おー。なんていい人なんだ、受け付けのおっちゃん。

「ありがとうございます！！」

「助かったぜ！！」

おっちゃんのおかげでなんとかかなりそうだ。会場まで走り抜けるのみ！

「頑張つてきなさい！若い決闘者諸君！」

「はい！」

おっちゃんの声援に応えるためにも今は走る！

SIDE↳受け付けのおっちゃん
今走って行った二人の少年、とてもいい目をしていた。あんな子達となら楽しい学園になりそうだ。それに彼らならアカデミアを変えてくれるかもしれない。

「デュエルアカデミア校長鯨島、君達の入学楽しみだよ。」

さて、会場に行きますかな。

SIDE↳クロノス

「これでとどめだ！ダイレクトアタック！」

「ありがとうございます。」

今年の入学試験も無事に終わりそうナノーネ。まあ、エリートたるオベリスクブルーの受験は終わっている以上、こんなのは時間の無駄なのデスーガ。

「クロノス先生。先程のデュエルで全ての実技試験終了しました。」

やっと終わったノーネ。見所なんて、筆記1位のシニョール三沢位だったノーネ。

「わかりました。それではこれより、結果発表並びに、閉会式を始めるノー…」

「「ちよつと待ったー！！」」

な、なんなノーネ!?

「遅れてすみません。受験番号109番天川黒兎です。」

「同じく受験番号110番遊城十代です。遅くなりました。」

「なんなノーネ、シニョール達は。今さらきても試験は終わりましたーノ。そもそもあなた達の受け付けは受けて…」

「クロノス先生！ただいま連絡がきました。二人とも受け付けを通っています。」

「なんだか私の台詞が切られすぎナノーネ。それはともかく受け付けを通ったとは、校長も余計なことを。かくなる上は。」

「受け付けを通っていようがもう試験は終わりナノーネ。大人しく帰るーノ、ペペロンチーノ。」

「そんなのないぜ！受け付け通ったんだから試験を受けさせてくれよ！」

「うるさいーノ！そもそもあなた達のようなドロップアウトボーイ達はこのアカデミアに相応しくないノーネ。つべこべ言わず帰るノーネ。」

まったく。こんなドロップアウトボーイなど、試験をする価値もないに決まってるノーネ。早く帰るノーネ。

SIDE 〱 黒兎 〱

あー、なんか十代とクロノスが言い合い続けてる。やっぱりこの頃のクロノスは嫌な奴だな。オベリスクブルー以外全て見下してやが

る。っと、そろそろ十代も苦しそうだな。

「ちょっと待って下さい。そこまで言うということは先生は随分偉いようですが。デュエルも自信がありそうだ。」

「その通りナノーネ。私はデュエルアカデミア実技最高責任者、クロノス・デ・メディチ。その私が言うノーネ。さっさと帰るノーネ。ドロップアウトボーイズ。」

「なら、先生に勝つことが出来れば、このアカデミアに入るに相応しい実力だと言えますよね。」

「寝言は寝て言うノーネ。あなた達が私に勝てる訳無いノーネ。やるだけ無駄ですーノ。」

「いいんですか。ドロップアウトボーイごときのデュエルから逃げて。どうせ勝てるというなら受けて下さいよ。結果が変わらなくともチャンスをもたらえた以上は潔く引きますよ。」

「グヌヌ、言わしておけば。いいでしょう。私直々に叩き潰してあげるノーネ。」

よし、釣れた！これで何とかかなりそうだ。

「試験を受けられるのか！それも実技最高責任者の！やったぜ。ありがとうな。えーっと」

「天川黒兎だ。黒兎でいい。それよりどっちからいく？お前が決めていいぞ、遊城。」

「俺も十代でいいぜ。んじゃ先にいかしてくれ。まったくわかんない方がわくわくするぜ。」

「了解だ、十代。んじゃ頑張れよ。二人共決めるぞ。」

「おう！いつてくるぜ！」

ハイタッチを交わすと十代はステージに立った。これでなんとかなつたかな。

「上手くいったね、クロ兄。私もやつと話せるよ。」

「ゴメンな、リン。十代は確かこのデュエルでハネクリボーと出会うけど念のためにな。」

「うん。その辺はわかってるからいいよ。それより、ここまでやつて負けないでね。」

当然だ。お、話してるうちに決着だ。

「スカイスクレイパーシュート！」

「マンマミーヤ！」

おー、クロノスが古代の機械巨人の下敷きに。

「勝ったぞ黒鬼！」

「ナイスデュエル十代！次は俺がキメるぜ。」

さてと、待ちに待った原作介入初デュエルだ。

S I D E 〱 クロノス 〱

ま、まさかこの私が、ドロップアウトボーイに負けるナンーテ。ありえないノーネ。そ、そう、どうせまぐれナーノ。次のデュエルで名誉挽回ナノーネ！

「次はシニョール天川！早く上ってくるノーネ！」

「負けたからって怒鳴るなよ。すぐ行きますよ。」

「うるさいノーネ！」

S I D E 〱 黒兎 〱

おーおー、白い顔が真っ赤になってやがる。ありゃ名誉挽回するために必死だね。ま、負けないけど。

「お待たせしました。それではお願いします。」

「覚悟するノーネ。」

「デュエル！」

先攻 黒兎

手札 6 枚

「先程と同じく、先行はドロップアウトボーイにあげるーノ。」

「んじゃ遠慮なく。ドロー！」

ふむ、まずまずの手札。まずは、

「魔法カード天使の施し。3枚ドロークした後2枚墓地に。『キラートマト』と『ハーピレディーSB』を墓地に送ります。」

「いきなり手札交換。所詮ドロップアウトボーイナノーネ。」

うるせえ。この世界じゃ好まれなくとも、勝つためには必要なんだよ。

「そして俺は『ウインドフレーム』を攻撃表示で召喚。」

ウインドフレーム ATK1800 DEF200

「さらにリバースカードを1枚伏せて、ターンエンド。」

手札4枚

後攻 クロノス

手札6枚

「私のターン、ドローク。」

んー、ありやいい手札っぱいな。すごい笑顔だ。

「まずは『トロイホース』を攻撃表示で召喚。」

トロイホース ATK1600 DEF1200

「さらに魔法カード『二重召喚』発動。このターン、私はもう一度

通常召喚出来るノーネ。」

「ならば、それにチェインして。リバースカード発動。『和睦の使者』。このターン俺のモンスターは戦闘で破壊されず、ダメージを受けません。」

「そんなの無駄ナノーネ。『トロイホース』は地属性モンスターの生け贄とするとき2体分の生け贄となるーノ。『トロイホース』を生け贄に『古代の機械巨人』を召喚ナノーネ。これで終わりデスーノ！」

古代の機械巨人 ATK3000 DEF3000

周りから「終わったな」「可哀相に」とか聞こえるけど、ちょっと待て。さっきそれ出して負けてるじゃん！

「このターンは攻撃しても無駄ナノーデ、リバースカードを1枚伏せてターンエンドナノーネ。(伏せたのは聖なるバリアー・ミラーフオース。これで安心ナノーネ。)」

手札2枚

ターン3 黒兔

手札5枚

「俺のターン、ドロー！」

さて、この手札はあれか。もう終わらせろと。

「俺の場の『ウィンドフレーム』は『トロイホース』と同じく、風

属性の生け贄とする時2体分となる。『ウィンドフレーム』を生け贄に、舞い上がれ！『始祖神鳥シムルグ』！」

始祖神鳥シムルグ ATK2900 DEF2000

「何がくるかと思えば。そんなモンスターじゃ私の『古代の機械巨人』にとどかないノーネ。」

「こいつの力はそんなんじゃない！『始祖神鳥シムルグ』の効果発動。風属性モンスターのみを生け贄として召喚した時、相手の場のカードを2枚手札に戻す。」

「な、なんデースト！？」

「相手の場を吹き飛ばせ！始まりの神風！」

「私の場が！しかし、そのモンスターだけでは私のライフは削り切れませんーノ。」

「そんなことはわかってる。さらに、墓地にある闇属性、風属性モンスターを除外し、手札よりモンスターを特殊召喚！闇纏いし風よ、吹き荒れる！『ダーク・シムルグ』！」

ダーク・シムルグ ATK2700 DEF1000

「1ターンに2体の上級モンスター。スゲーぜ、黒兔！」

「ああ、十代。これが俺の仲間達だ。お前のHEROにも負けないぜ。」

「なんだと！だったら次は俺とデュエルだ！」

「それはこのデュエルを終わらせたらな。さあ、覚悟はいいですか。クロノス先生。」

「ひっ、ま、待ってほしいノーネ！」

「どうせ結果は変わりません。いけ！『始祖神鳥シムルグ』と『ダイク・シムルグ』でダイレクトアタック！ダブルテンペスト！」

「ペペロンチーノ！」

クロノス ライフ4000 - 1300

WIN黒兎

よっしゃ。これで俺もクリアだ。っとその前に、

「クロノス先生、楽しいデュエルでした。ガツチャ！」

「あー！俺の決め台詞！」

いやー、一回言いたかったんだよね。ま、これでガツチャはクロノスのトラウマかな。

「二人とも素晴らしいデュエルでした。合格です。デュエルアカデミア入学を認めます。」

ん、どっかから聞いたことある声が。

「受け付けのおっちゃん！」

十代が指さして叫んでる。見ると確かに受け付けのおっちゃん。しかし、今よく見ると、あれ鮫島校長じゃね！

「ハツハツハ。黙っていてすまなかったね。私はデュエルアカデミア校長の鮫島だ。君達のデュエル見さしてもらいましたよ。本当に素晴らしい。アカデミアで待ってますよ。」

そう言うと、校長はどこかに行ってしまった。

「よくわかんねえけど、やったな黒兎！俺達合格だ！」

「ああ。これで一安心だ。」

原作介入のチャンスGETだぜ！そうだ。こっちのフラグも。

「ところで十代。その肩にある茶色い毛玉はなんだ？」

「黒兎、ハネクリボーが見えるのか!？」

「ハネクリボーってさっきデュエルで出たやつだな。確かにハネクリボーだ。」

「そうじゃなくて、黒兎も精霊見えるのか!？」

「ん、ああ。リン、出てきていいよ。」

すると、俺のデッキから光が走り、止んだ時にはリンがいた。

「はじめまして。召喚師セームベルのリンです。十代さんよろしく
お願いします。」

「おお、可愛い女の子だ！よろしくなリン。」

スゲー。あっさり受け入れたよ。まあ、騒ぎになるよりいいけどさ。
とりあえずやるべきことはこんなものかな。

「よし、んじゃそろそろ帰るか。」

「あ、待てよ。デュエルだって言っただろ。」

「それはアカデミアでの楽しみにしようぜ十代。それに今日は疲れ
た。」

主に介入チャンスを逃さないことが。

「えー、マジかよ。じゃあ黒兎。アカデミアで最初にデュエルだか
らなー！」

「了解だ。十代。それじゃまたな。次はアカデミアで会おう。その
時俺のエースを見せてやる。」

「それでは失礼します。十代さん。」

挨拶を終えるとリンは俺の腕にしがみついていた。この1年間、俺
が唯一触れられる相手だからか、リンはよく俺にしがみついていた。
まあ可愛い女の子に抱き着かれて嫌な気分はしない。好きにさせる
な。

「エースだつて！？んじゃ今回手抜きかよ！俺とのデュエルはそうはいかないからな！待ってるよ黒兔ー！」

十代がまだ叫んでる。その声を背に、俺は会場を後にした。

第二話〜HEROとの出会い〜（後書き）

切れない方が、まとまりとして綺麗ですね。

第三話〜HERO対巨大鳥〜（前書き）

11月02日整理及び増量

整理前の五六七話です。

本来分かれていたものを繋げているので違和感があるかもしれません。

整理前も書きましたが、十代と翔の出会い仕様です。

第三話〜HERO対巨大鳥〜

S I D E〜黒兎〜

はい、ただ今デュエルアカデミア行きの上に来ています。いやはや、流石は天下の海馬コーポレーション。尋常じゃないサイズの船です。こんなに人乗らないだろうに。派手好きな社長らしいよ。

「クロ兄、この船凄い大きいね。なんだかワクワクしてきた。」

隣ではリンがなにやらそわそわしている。初めての船だ、興奮してるんだろ。

「ふむ、フラグGETのためにある程度欲しいけど、まだ出港までの時間はあるな。リン、船内の探検でも行くか？」

「え、行く！行きたい！」

リンの手を握って歩きます。一瞬びつくりしたみただけで笑ってる。やっぱり人の温もりが欲しいんだな。

「さて、どこから行くか。無駄にでかいから迷子にならんようにせねば。」

S I D E〜リン〜

クロ兄が手を握ってくれた。しかも二人で船内探検。これはちょっとしたデートノノノ。そんな浮かれた時期もありました。

「ここはどこだー！？誰かいませんかー？」

はい、ただ今迷子です。船の娯楽スペースをあらかた回った私達は客室の方に来てみました。アカデミアまではしばらくかかるとはいえ、寝ている人もなく、客室には誰もいません。もともとクロ兄しか見えませんが、二人きりだったのは嬉しかったですよ。しかし今は事情が違います。誰かいないでしょうか？

「困ったな。まったく出口の見当もつかん。リン疲れてないか。カードに戻ってもいいぞ。」

「大丈夫だよ。私も一緒に頑張るよ。」

クロ兄が心配してくれます。その優しさは嬉しいけど、原作とかフラグなんて興味のない私にとって、クロ兄との時間はなにより大事だから。緊急にならないならこのままさ迷ってもいい。

「んー大丈夫ならいいけど。何かあれば言っただぞ。」

じゃあその辺の客室に入って一緒に寝て欲しいです／＼ まあ言いませんが。せめて手をギュツと握ります。ん、あの茶色い毛玉は

「クロ兄、あれハネクリボーじゃない？」

「本当だ。ってことは近くに十代も。おーいハネクリボー！」

クロ兄は急いでハネクリボーに向かいます。この時間も終わりかな

「ハネクリボー。十代はどこにいる？」

「クリクリー」

ハネクリボーが飛んでいきます。ついてけばいいんでしょうか？

「行こうか。リン。やっと出られるかも。」

はい、クロ兄もホツとしてますし、よかったです。

SIDE 〽黒兔〽

目の前をハネクリボーが飛んでいく。いやーやっと出られそうだしばらく行くとハネクリボーがあるドアを指す。

「ここから出られるのか!?!」

ガチャ

ドアの向こうは不思議な国でした。なんてこともなく。

「おい、ハネクリボー!どこだー!あつハネクリボー!おお黒兔も一緒に探したんだぜ。」

十代のお出迎え。いやー太陽と潮風が心地いい。

「十代さん。ハネクリボーのおかげで助かりました。ありがとうございます。ございます。」

「リン、いいっていいって。礼はハネクリボーだけに言ってくれ。どっか行ったと思ったたら黒兔を連れてくるなんて、ありがとな。ハネクリボー。」

「クリー」

ハネクリボーも自慢げだな。まあおかげで助かったんだが。

「アニキー！」

お。原作介入のチャンスk t k r。

「おう、翔こつちこつち。」

「アニキ勝手にどっか行かないでよ。あれ、この人は？」

「こいつは黒兎。試験の時に一緒に頑張った俺の友達だ。」

一回会っただけなのに友達と呼んでくれるのか。いかん、涙が出そ
うだ。

「俺は天川黒兎。十代と一緒にぎりぎりの試験でな。その時に知り
合った。お前は？」「僕は丸藤翔つす。とある事情で十代のアニキ
をアニキと呼ばせてもらってるっす。」

なんだったかな。いかん、思い出せん。まあ呼び方なんて些細なこ
と。気にしない気にしない。

「おや、今年度オシリスレッドの有名人が二人とも。やあ、一番君、
あー、シムルグ君。」

誰がシムルグか。

「おう、二番じゃないか。」

「二番じゃない。三沢大地だ。一番君。」

「俺も一番じゃない、遊城十代だ。よろしくな、三沢。」

「そして俺もシムルグじゃない。天川黒兎だ。よろしく。」

シムルグは俺の仲間だ馬鹿にするな。

「よろしくな、十代、黒兎。」

まあいい。それよりも。

「ところで三沢。有名人二人ってどういうことだ？」

「ああ、それは君達二人が、揃ってクロノス実技最高責任者に喧嘩を売り、しかも勝ってしまったからだ。」

喧嘩売った覚えはないだろ。十代には。

「だから君達二人は入学早々オベリスクブルーのターゲットだ。しばらくは様子を見るべきだ。」

「気にいらねえな。」

「えっ？」

「今のオベリスクブルーの噂は聞いている。エリート気取りでレッドやイエローを虐げる腐った連中だ。向かってくるなら容赦なく叩き潰す。」

「俺はよくわかんねえけど、強いやつが自分から来てくれるんだろ。そんなのワクワクするぜ。」

ふう、十代は十代か。カツコイイぜ。

「君達二人にはいらぬ心配か。まあ頑張ってくれ。それじゃあな。アカデミアでもよろしく。」

そう言うと三沢は去っていった。今はこんなに立派なキャラなのにいずれはエアーマン。どうにか出来ないだろうか。

「黒兎、オベリスクブルーのことは忘れようぜ。どうせいつか闘うんだ。そんなことより楽しいデュエルをしようぜ。」

「十代。ふ、そうだな。」

そうとも。いずれは闘うのだ。だったら思いきり楽しもう。それでも狙われたらしょうがない。

「それより黒兎。約束忘れてないよな。アカデミア着いたら早速デュエルだ。」

「ああ。負けないからな。」

まずは楽しもう。それから一つずつ解決だ。

「クロ兄。島が見えたよ!」

やっと着いたか。あの島で俺はどこまで出来るだろうか。あの学校の膿、この世界の悲しみは俺が潰す。

移動中

はい、ただ今デュエルアカデミア講堂内で、鮫島校長のありがたい話を聞いています。かれこれ30分、いやー長いですね。十代は開始30秒で立つたまま寝たし、他の連中も苦しそうだな。

「皆辛そうだね。クロ兄は大丈夫？」

リンが心配してくれる。もちろん眠いが俺が寝ては、この長時間リンは一人で淋しいじゃないか。眠気覚ましも兼ねて、今までずっとリンと戯れていた。

「ん、大丈夫だぞ。眠気よりもリンとこうしてる方がいい。」

そう言っつてリンの頭を撫でる。くすぐったそうだが、可愛い笑顔を向けてくれる。やっぱり起きてる方が正解だな。幸い周りはほとんど苦行に耐えている。多少の動きは気付かれないし。

しばらくお待ち下さい

「というわけで、このアカデミアでの生活が皆にとって幸多いものになることを願っています。静聴ありがとうございます。」

やっと終わったか。

「あーあ、終わっちゃった。」

リンはなんだか淋しそうだ。まあ、こんな時間にリンをかまえることはなかったからな。せつかくの時間終わりたくなかったんだろな。

「おい、十代、翔。しつかりしろ。終わったぞ。」

「んー、黒兎君ありがとう。よく耐えたね。」

よし、翔は起きたな。後は十代だがまったく起きんな。こつなつたら。

「十代。起きないと今日デュエルしてやらないぞ。」

「そりゃないぜ！」

お、起きた起きた。やっぱり十代にはデュエルだよな。

「さ、行こうぜ。歓迎会までの時間はどうしようか。」

「ちゃんと起きただろ。黒兎デュエルだ！」

わかってますよ。

移動中

はい、ただ今レッド寮前です。向かいあうは天性のHERO使い。どこまで闘えるか。

「やっと出来るな。黒兎、楽しいデュエルにしような！」

「ああ、十代。俺のエースに飛ばされないようにな。」

「デュエル！」

先攻 黒兎
手札 6枚

「俺の先行、ドロー！」

さてと、まずは準備を整えますか。

「俺はモンスターをセット、カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

モンスター、魔法罫に1枚ずつ裏向きのカードが現れる。さあこい十代！

手札 4枚

後攻 十代

手札 6枚

「俺のターン、ドロー！」

何からくるかな。

「俺は手札から『融合』を発動！手札の『フェザーマン』と『バーストレディ』を融合！現れる、マイファイバリットヒーロー！『フレイム・ウィングマン』！」

フレイム・ウィングマン ATK2100 DEF1200

いきなりかよ！

「さらに『スパークマン』を攻撃表示で召喚。」

スパークマン ATK1600 DEF1400

「いくぜ黒兎！『フレイム・ウイングマン』でセットモンスターを攻撃！フレイムシュート！」

セットされていたモンスターが表になり姿を現す。

マッドリローダー ATK0 DEF0

「戦闘破壊された『マッドリローダー』の効果発動！手札を2枚墓地に送り2枚ドロ！『異次元の偵察機』と『ハーピィレディSB』を墓地に送る。」

「『マッドリローダー』の攻撃力は0。『フレイム・ウイングマン』のダメージは発生しないぜ。」

「それなら『スパークマン』でダイレクトアタック！スパークフラッシュ！」

「リバーズカードオープン！『くず鉄のかかし』！相手モンスター1体の攻撃を無効にする。このカードは発動後再びセットされる。」

「じゃあ毎ターン1体の攻撃は防がれるのかよ！？んー俺はカードを1枚伏せてターンエンド。」

手札1枚

3ターン目 黒兎

手札5枚

なんとか初撃は防げたか。しかも十代の手札は1枚、臆せず攻める。

「俺のターン、ドロー！」

よし、いくぜ。

「墓地の『異次元の偵察機』と『ハーピィレディSB』を除外。闇纏いし風よ、吹き荒れる！『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！」

ダーク・シムルグ ATK2700 DEF1000

「そいつは試験の時の！」

「俺の頼れる仲間だ。さらに俺は『霧の谷のファルコン』を攻撃表示で召喚。」

霧の谷のファルコン ATK2000 DEF1200

「いくぞ十代！まずは『ダーク・シムルグ』で『フレイム・ウィングマン』に攻撃！ダークテンペスト！」

「リバーズカードオープン！『ヒーローバリア』！自分の場にE・HEROが存在する時、相手の攻撃を1度だけ無効にする！」

通らないか。ならば。

「『霧の谷のファルコン』で『スパークマン』に攻撃！霧の谷の剣技！この時ファルコンの効果で自分の場のカードを1枚手札に戻す。伏せてある『くず鉄のかかし』を手札に戻す。」

「スパークマン！」十代 ライフ4000 3600

「俺はリバーズカードを2枚セット、エンドフェイズに除外された『異次元の偵察機』を特殊召喚。これでターンエンド。」

よし先制できた。だが『フレイム・ウィングマン』が残ったか。油断は出来ないな。

手札2枚

4ターン目 十代

手札2枚

「俺のターン、ドロー！まずは魔法カード『強欲な壺』を発動。カードを2枚ドロー！さらに魔法カード『戦士の生還』を発動。墓地から『スパークマン』を手札に加える。」

一気に手札が整いやがった！？

「まずは『スパークマン』を攻撃表示で召喚。そして魔法カード『R・ライトジャステイス』発動！自分の場のE・HEROの数だけ魔法罫を破壊する。黒兎の場のカードを破壊！」

俺のかかし先生とサイクロンが！？

「さらに手札から2枚目の『融合』を発動！場の『スパークマン』と『フレイム・ウィングマン』を融合。輝け、『E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン』！」

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン ATK250
0DEF2100

「『シャイニング・フレア・ウィングマン』の攻撃力は自分の墓地のE・HERO1枚につき300アップ！」

シャイニングフレアウィングマン ATK2500 3700

攻撃力3700!?もうやめてー!

「バトル!『シャイニング・フレア・ウィングマン』で、『ダーク・シムルグ』に攻撃!シャイニング・シュート!」

『シャイニング・フレア・ウィングマン』の発する光が、闇色の風を貫く。

黒兎 ライフ4000 3000

「ぐっうっ。」

「さらに、『シャイニング・フレア・ウィングマン』の効果発動!戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える!」

黒兎 ライフ3000 300

「うあああああ!」

「どうだ、黒兎!俺はこれでターンエンドだ!」

なんとか残ったか。だが次でどうにかしないと…

手札0枚

5ターン目 黒兎

手札3枚

「俺のターン、ドロー！」

！きてくれたか。

「十代！こつから俺の反撃だ。俺のエースを見せてやる！」

「エースだって！試験の帰りに言ったやつか。何が出てくるんだ！？」

頼むぜ相棒！

「場の『異次元の偵察機』『霧の谷のファルコン』、墓地の『マッシュドリローダー』を除外！」

「3枚も除外だって！？」

「この場を取り囲み制圧しろ！『Theアトモスフィア』！」

Theアトモスフィア ATK1000DEF800

風を支配する巨大な鳥がその雄々しい翼を広げる。

「クオオオオ！」

アトモスファイアが俺に応えるように声をあげる。今日も頼むぜ。

「おお！これが黒兎のエースか！しかもこいつも精霊か？」

その通り。俺の相棒にしてエースであるアトモスファイアも精霊である。初めてあつた時はそのサイズに驚いたもんだ。

「いくぞ十代！アトモスファイアの効果発動。1ターンに1度相手の表側表示のモンスターを装備し、その攻守を得る。『シャイニング・フレア・ウィングマン』を吸収しろ。サクリファイスファイア！」

Theアトモスファイア ATK1000 3500

「ああ！シャイニング・フレア・ウィングマンが！」

「バトル！『Theアトモスファイア』でダイレクトアタック！テンペストサンクションズ！」

強い光を放ちながら、アトモスファイアのスファイアが十代を襲つ。

十代 ライフ3600 1000

「うわああああ！」

削りきれなかったか。だが俺が有利にかわりない。まあ俺のライフもわずか、手をうつか。

「俺は速攻魔法『異次元からの埋葬』を発動。除外されている『異次元の偵察機』『霧の谷のファルコン』『マッドリローダー』を墓

地に戻す。」

これで偵察機の蘇生は無くなった。

「さらにカードを1枚セットしてターンエンド。」

伏せたのは『スケープゴート』。アトモスフィアがやられてもまだなんとかなる。

「さあ、逆転してみる十代！」

手札0枚

6ターン目 十代

手札1枚

十代はドローしても手札1枚、場もからっぽ、俺の有利は間違いなし。なのになんであいつはあんなに笑顔なんだ。

「黒兎、状況は完全に不利、手札も1枚、こっから勝つのはほとんど無理だよな。」

「ああ、そうだな。俺には勝つ方法がわからん。」

「でもよ、こっから逆転したら、すっげえカッコイイよな！」

「それは……最っ高にカッコイイな！」

まったく。やっぱりあいつは主人公に相應しい！

「いくぜ黒兎！俺のターン、ドロー！！」

見せてみる。お前の力を！

「このカードは手札がこのカード1枚の時特殊召喚出来る！『E・HEROバブルマン』を特殊召喚！」

やっぱり来たな、壺男！

「『バブルマン』は、場と手札にカードが無い時に召喚した場合カードを2枚ドロー出来る！さらに手札から魔法カード『天使の施し』！カードを3枚ドローし2枚墓地に！まだまだ！魔法カード『ホープ・オブ・ファイフ』発動！墓地のE・HERO5枚をデッキに戻し2枚ドロー！俺が戻すのは、『フェザーマン』、『バーストレディ』、『フレーム・ウィングマン』、『シャイニング・フレア・ウィングマン』、『クレイマン』だ！」

「『クレイマン』なんていつの間に墓地に！？」

「さっきの『天使の施し』さ。そしてさらに魔法カード『融合回収』発動！墓地にある『融合』と融合素材にしたモンスター、『スパークマン』を手札に加える！」

なんとということでしょう。匠の手により0枚だった手札が4枚になったではありませんか。

「見せてやるぜ！新たなHEROを！『融合』を発動！場の『バブルマン』、手札の『スパークマン』、『フェザーマン』を融合！現れる、『E・HEROテンペスター』！」

E・HEROテンペスター ATK2800 DEF2800

出てきたか。だが、

「あの状況から融合したのは凄いが、十代。『テンペスター』じゃアトモスフィアには勝てないぜ。」

「焦るなよ、黒兎。HEROには相応しい戦いの舞台があるのさ。手札からフィールド魔法『摩天楼スカイ・スクレイパー』発動！」
いきなり地面から高層ビルがいくつも立ち上る。摩天楼の中最も高いビルの上にテンペスターが降り立つ。

「ここはHERO本来の力を発揮するフィールド。E・HEROが自身を上回る攻撃力を持つモンスターと戦う時、攻撃力が1000アップするのさ！」

くっそー、今回は負けたか。悔しいけど、カツコイイぜ、十代。

「これでとどめだ黒兎！『テンペスター』でアトモスフィアに攻撃！カオス・テンペスト！」

アトモスフィアが再びスフィアを放つが、テンペスターは見事にかわすと、スフィアが無くなりむき出しの腹部を攻撃した。

黒兎 ライフ3000

WIN十代

「楽しいデュエルだったぜ！ガッチャー！」

SIDE〜リン〜

クロ兄と十代さんのデュエルは十代さんが勝ちました。クロ兄負けちゃった。でも二人とも勝敗なんて気にしてないみたい。凄い楽しそう。

「クロ兄、負けちゃったね。アトモスファイアも頑張ったのに。」

「リン。ああ、やっぱり強いな十代は。」

「何言ってるんだよ。俺も負けを覚悟したぜ。最後にあんなにドロ―出来て運がよかったただけだって。」

「馬鹿言え。負ける気なんて最初からなかっただろうに。」

クロ兄と十代さんがさっきのデュエルの言い合いを始めてしまいました。楽しかったのはわかるけど、私もかまって欲しいな。

「リンも、ゴメンな。」

へ？

「またリンを出すことなく終わっちゃった。一緒に闘えたら結果変わったかも知れない。」

そういうとクロ兄が頭を撫でてくれます。気持ちいいノノ

「そ、そうだね。そう言えばアカデミア関係のデュエルじゃ出してもらってないよ。」

まあアカデミア関係のデュエルは2回だけですが。でもやっぱり使ってもらいたいですし、せっかくなんで拗ねたふりでクロ兄に、

ギョツ

「ゴメンな。1人だけ出てなくて淋しいよな。次は頑張るから機嫌なおしてくれ。」

クロ兄が私を抱きしめて頭を撫でてくれます。や、やりました。予想以上の戦果ですノノノ

「と、そうだ。せっかくだしちゃんと紹介するか。出てきてくれアトモスファイア！」

クロ兄の呼びかけに応え、アトモスファイアが姿を現します。

「クオオオオ。」

「アトモスファイアお疲れ様。」

「すまなかつたな。アトモスファイア。お前が闘ってくれたのに負けちまって。」

「クルルル。」

私とクロ兄で撫でてあげるとアトモスファイアは喉を鳴らして応えてくれます。あんまり落ち込んではいないみたい。

「お前も黒兎の精霊なのか！でかいなあ。俺は遊城十代。よろしくな、アトモスファイア。いやーお前の攻撃は強かったぜ。」

十代さんが話しかけるとアトモスフィアが自分の頭を差し出します。

「あ、めずらしい。」

「なんだなんだ？」

「十代。アトモスフィアがお前を認めただ。頭でも撫でてやってくれ。」

本当めずらしい。アトモスフィアに認められたのはクロ兄以外ではあの人位だ。

「そうなのか！？アトモスフィア楽しいデュエルだったぜ。またやるうな！」

十代さんも普通にアトモスフィアと接しています。ハネクリボーといい十代さんは精霊に好かれやすいのかな？

「クリクリー！」

噂をすれば。

「お、ハネクリボー。お前もアトモスフィアに挨拶するか？」

「クリー。」

ハネクリボーがアトモスフィアに近づいてなにやら会話？しています。すぐに仲良くなりそうです。

「リン。せっかくだし、精霊達で交流してきたらどうだ？」
クロ兄が私に提案します。クロ兄から離れたくないのですがせっか
くですしね。たまには精霊同士仲良くしようかな。

「うん、行ってくるね。」

久しぶりにアトモスフィアに乗せてもらおうかな。

S I D E 〱 黒兎〱

リンがアトモスフィア達と合流して精霊達の交流も盛り上がりそう
だ。

「精霊も仲良くなって。何と言うか、家族ぐるみの付き合い？」

「まだそんな歳じゃないだろ黒兎。まあ皆仲良しなのはいいことだ
よな。」

そういつて互いに笑い合う。フラグがどうこうじゃなく、もうすっ
かり友達だな。

「いやー黒兎と友達になれてよかったぜ。こんなに楽しかったデユ
エルは久しぶりだ。」

「それはこっちの台詞だ。これからよろしくな十代。」

握手を交わしてまた笑い合う。やはりここは原作なんかじゃなく1
つの世界だ。俺に出来ることは何でもやるっ。

「おーい！クロ兄ー！」

リンが俺を呼んでる。見るとハネクリボーと一緒にアトモスフィアのスフィアに入って空を飛んでやがる。

「なんだあれ！？黒兔、リン達凄く楽しそうなことしてるぞ！俺も乗せろー！」

「落ち着け十代。機会があれば乗せてやる。」

「本当か！約束だぜ、黒兔。」

それから二人で空を見上げていた。

「アニキ、黒兔君。空見て何話してるんすか？」

「おう、翔。部屋の片付けは終わったのか？」

「一通りね。ところでデュエルはどうなったんすか？」

いつの間に来てたのか、翔がそばにいた。デュエル中に部屋の掃除や片付けを済ましたらしいが、アカデミア生としてデュエルを優先しないのはいかがなものか。まあデュエルしてたから俺の部屋は荷物が散乱してるが。ちなみに部屋は十代と翔が同じで、俺はその隣に一人だ。人数の都合とはいえ三人部屋を一人で使えるのは精霊もいる身としてはありがたい。

「アニキが勝ったんだ！さすがアニキ！」

「いや、黒兔も強かったぜ。負けそうだったしな。」

話こんでる内にリン達を手招き。戻ってきてもらう。礼もこめて頭を撫でるとアトモスフィアはカードに戻っていった。

「クロ兄、まだ歓迎会まで時間あるよ。何するの？」

「んー、原作を試してみようかな。」

十代達に近寄り提案する。

「十代、翔。歓迎会までまだあるし、アカデミアの探険でも行かないか？」

「お、いいなそれ！確かでかいデュエル場があったはずだ。見に行こうぜ！」

「あ、待ってよアニキー！」

言うのが早いか走りだす十代。まったく周りを忘れるなよ。

「んじゃ行くか。リン。」

手を差し出すと嬉しそうに握ってくる。さて、行きますか。

移動中

さて、いったいどこだけ先に行ったんだ。まったく姿が見えんではないか。まあリンと散歩気分で歩いてきたけどさ。

「クロ兄、もうすぐデュエル場に着くよ。」

お、やっと到着か。思ったより遠かったな。

「ん？」

なにやら口論の声。こりゃ乗り遅れたか？

「帰れ帰れ。ここは落ちこぼれのオシリスレッドが来ていい場所じゃない。」

「なんでだよ！レッドとかブルーとか関係無いだろ！見る位いいじゃないか！」

「アニキ、ここは一先ず帰ろうよ。また来よう。」

案の定十代と二人のオベリスクブルー生徒が喧嘩してやがる。あんな顔は見たことないしモブだろう。おそらく万丈目の取り巻き。

「やっと着いてみれば。何やってるんだ十代。」

「黒兎！遅かったな。」

お前が早過ぎなんだ。

「おい、そのブルー生。デュエル場は別に利用制限とかはなかったはずだが。」

「なんだ貴様、レッドのくせに生意気な口を利きやがって。」

同じ1年生で生意気も何もあるか。

「知らないのなら教えてやる。このデュエル場はブルー専用なのだ。これを見る！」

見れば確かにオベリスクブルーのシンボルがあるが、後付け感ありまくりだな。

「見るからに後付けじゃないか。それにPDAの校則にはそんなことは書かれていないぞ。」

「うるさい！いいからさっさと立ち去れ。」

何でこうも言われにやなんのだ。こうなりや多少の実力行使でも…

「ビー、クワイエット！」

あ、あの特徴的な鳥頭は！

「万丈目さん！」

「少し騒がしいぞ取り巻き、古場。レッドに対してそんなに取り乱してどうする。俺達はエリートなんだぞ。」

「すみません。万丈目さん。」

うわー、サンダーじゃない万丈目準だ！自分でエリートとか言っ
て恥ずかしくないのか？

「貴様らは、入学試験でクロノス先生の油断のおかげでまぐれにも入学出来たドロップアウトボーイ達じゃないか。」

「まぐれじゃない。実力だ。」

「勝てば官軍ってね。」

油断もなにも思いきり古代の機械巨人出して勝ちにいったじゃん。

「貴様らのようなドロップアウトボーイはアカデミアに相応しくない。俺様が直々に叩き潰して追い出してやろう。」

そういつと万丈目はデュエルディスクを構える。1生徒がどうやれば他の生徒を追い出せるのだろうか？

「やれるもんならな。デュエルなら受けてたつ！」

「ア、アニキ！負けたら退学なんだよ！」

いや、だからどうやるんだよ。まあそれを差し引いても受ける意味はないのだが。

「あなた達、何やってるの！」

どうしようか悩んでいると後ろから声が響き渡る。

「て、天上院君！」

おー、明日香だ。天上院明日香。儀式と融合混ぜた使い難いデッキ使う。にしても万丈目、顔赤過ぎないか。

「いやなに、彼らにアカデミアの厳しさを教えてやろうと思ってね。」

「

「もうすぐ歓迎会が始まるわ。早く行った方がいいんじゃないかしら。」

会話の流れガン無視ですか。万丈目もよくあれで好意もたれると思えるな。

「ちっ、行くぞお前達。」

言うが早いか、万丈目は立ち去って行く。

「あなたたちも。彼らとは関わらない方がいいわよ。」

「売られたデュエルを買っただけだ。」

「アニキ、そんな言い方は。」

「あいつらがからんでこなけりゃな。まあ礼は言っておくよ天上院さん。」

「明日香でいいわ。遊城十代君、丸藤翔君、天川黒兎君。」

「十代でいいぜ、よろしくな明日香。」

「翔でいいすよ。よろしくね明日香さん。」

「俺も黒兎でいい。よろしく頼むぜ、明日香。」

「わかったわ。十代、翔君、黒兎。縁があればまた会いましょう。」

そういつと明日香も歩いていった。なんか動作がいちいち男前な奴だ。

「さ、俺達も行こう。入学最初の行事に遅刻はマズイ。」

「ああ。でもデュエルしたかったなー。」

十代。そんな唸らんでもすぐにできるさ。今夜にでもな。

第三話〜HERO対巨大鳥〜（後書き）

次回で整理も終了です。

まとめたことで読みやすくなってると思いますが。

第四話 大切な人々（前書き）

やっと整理前に追いつきました。ここは整理前と変わってませんが。

第四話〜大切な人〜

SIDE〜黒兎〜

レッド寮の歓迎会も終わって自室にて、ただ今デスクの調整中。それにしても歓迎会の食事はひどかったな。メザシと漬物つて。こりやなにか手をうたんと。後、大徳寺先生。マジでニヤーニヤー言つてたな。

「クロ兄、まだ寝ないの？」

ベッドの上にはパジャマに着替えたリンが枕を抱えてスタンバイしている。時刻はもうすぐ日付もかわるところ。

「ああ、今日は多分そろそろお誘いがあるからな。」

「お誘い？」

今日あれだけやったんだ。今夜間違いなくくるはず。

ブーブーブー

噂をすればPDAにメールが。

『ドロップアウトボーイの諸君。怖くなければ今日のデュエル場まで来るがいい。互いのベストカードを賭けてデュエルだ。』

来た来た。しっかしアンティは校則で禁止だろうが。とりあえず十代と合流せねば…

ドバン！

「黒兎！起きてるか！挑戦状が送られて…って何つづくまってるんだ？」

十代。ノックは人類最大の発明だぞ。

しばらくお待ち下さい

「んで、どうする十代？」

「ゴメンな黒兎。とりあえず売られたデュエルは買うだけだ。」

まあ予想通り。

「えー、やめようよアニキ。アンティは校則違反だよ。」

「大丈夫だって。勝っても人のカードを取りはしない。」

まあその時は俺が止めるがな。

「ま、売られた俺と十代はやる気満々。止まらねえよ翔。」

「黒兎君まで。」

さて、エリート様の実力拌みにいきますか。

移動中

「遅かったな。貴様達。」

「レッド寮からここまででは遠くてね。とりあえず今夜はお招きありがとう。」

「さあ、誰がデュエルしてくれるんだ！」

十代もうちよつと落ち着け。

「遊城十代。貴様は俺様が直々に潰してやる。取巻。お前は天川黒兎をやれ。」

「はい、万丈目さん。」

ふむ。十代と万丈目は原作通りになったか。

「ちょっとあなたたち！こんな時間にこんな場所で何してるの！時間外の無断使用は禁止されてるわ！」

見ると明日香が立っていやがる。こんな時間にこんな場所ではお前もだろつに。

「おう、明日香。お前も呼ばれたのか？」

「な、十代貴様。天上院君を呼び捨てのうえにお前だと！」

「よう明日香。こんな所で奇遇だな。」

「天川！貴様もか！」

万丈目がなんか叫んでるが無視だな。

「俺達は売られたデュエルを買っただけだ。なんでこんな状況なのかはあいつらに聞け。」

「まったく。一体なんなのこれは。」

「こいつらにアカデミアの厳しさを思いしらせるためさ。」

さ、明日香と万丈目が言い合ってる内に始めるか。

「おい、どっちが厳しさとやらを教えてくれるんだ。」

「貴様の相手は俺様だ。エリートと落ちこぼれの差を教えてやる。」

「やってみろ。強者の下で群れるしか能のない下っ端。」

「貴様！覚悟しろ！」

「「デュエル！」」

「ちよっと！やめなさい！」

無視無視。

先攻 取巻

手札 6枚

「俺様のターン、ドロー！」

さて、どんなデッキだ？

「まずは魔法カード『盗つ人ゴブリン』を発動。」

な、何ー！

「自分のライフを500回復、相手に500ダメージ与える！どうだ、もう1000の差が出来てしまったぞ！」

取巻 ライフ4000 4500

黒兎 ライフ4000 3500

確かにデメリットはないけど1枚じゃ効果薄いぞ。

「俺様は『ゴブリンエリート部隊』を攻撃表示で召喚！」

ゴブリンエリート部隊 ATK2200DEF1500

甲冑をつけたゴブリンがわらわらと。

「どうだ！この攻撃力。まさにエリートに相応しいと思わんか。」

あいつには効果が読めないのだろうか。

「さらにリバースカードを2枚伏せてターンエンド！」

ふむ、まあ1ターン目にしては悪くないな。

「さあ。何が出来るドロップアウト！」

いちいちうるさいな。

手札2枚

後攻 黒兎

手札6枚

「俺のターン、ドロー！」

ふむ。攻めれる手札じゃないな。なら。

「モンスターをセット、リバーズカードを2枚伏せてターンエンド
！」

こんなもんだろ。

手札3枚

3ターン目 取巻

手札3枚

「何も出来ないとはやはり落ちこぼれのオシリスレッドか。俺様の
ターン、ドロー！」

いちいち馬鹿にしないとデュエル出来ないのか？

「俺様は『ゴブリンドバーク』を攻撃表示で召喚。効果で手札から
『ゴ布林突撃部隊』を特殊召喚！この効果を使った時、『ゴブリ
ンドバーク』は守備表示になる。」

ゴブリンドバーク ATK1400DEF0

ゴブリン突撃部隊 ATK2300DEF0

うわー。ゴブリンばっか。しかも部隊が2つあるから尋常じゃない数になってやがる。あいつのデッキ、ゴブリンファンデッキ？

「さあ、エリートが攻撃というものを教えてやろう。『ゴブリンエリート部隊』でセットモンスターを攻撃！さらにこの瞬間リバースオープン！『最終突撃命令』！場のモンスターは全て攻撃表示になる！」

俺のセットモンスターが表になる。

シールドウィング ATK0DEF900

「攻撃力0とは、やはり落ちこぼれか！いけ、エリート部隊。その雑魚をぶち殺せ！」

「人の仲間を雑魚呼ばわりすんじゃねえ！リバースオープン！『ゴツドバードアタック』！場の鳥獣族、『シールドウィング』を生け贄にカードを2枚破壊する！エリート部隊と突撃部隊を破壊！」

シールドウィングが炎に包まれ二つの部隊に突っ込んでいく。

「攻撃力0にやられたぜ。お前の方が雑魚じゃないのか。」

「うるさいレッドが！『ゴブリンドバーク』でダイレクトアタック！この時リバースオープン『追いはぎゴブリン』！自分のモンスターが相手にダメージを与えた時、相手の手札をランダムに1枚捨て

る！」

ドバークの飛行機から爆弾投下って危なっ！

黒兎 ライフ3500 2100

俺にダメージが入った瞬間、がらの悪いゴブリンが手札を1枚盗っていった。ああ！ダーク・シムルグが！

「思いしつたか。メインフェイズ2に魔法カード『死者蘇生』発動。『ゴブリンエリート部隊』蘇生！」

なんで！？突撃部隊の方が攻撃力高いよ！エリート意識しすぎじゃない！？

「これで俺はターンエンド！」

手札0枚

4ターン目 黒兎

手札3枚

「貴様のフェイバリット『ダーク・シムルグ』は墓地にいった。もうサレンダーしたらどうだ！」

あいつは何を言ってるんだ？

「シムルグは確かに頼れる仲間だがフェイバリットじゃないぜ。それに勝てるデュエルを捨てれるか！」

「何言つて…」

「俺のターン、ドロー！」

さつきから呼んでたな。頼りにしてるぜ！

「まずは魔法カード『天使の施し』発動！カードを3枚ドロー！」

「クロ兄、お待たせ！」

よし、これで揃った！

「カードを2枚捨て、リバースオープン！『リビングゲデッドの呼び声』！墓地より舞い上がれ、『ダーク・シムルグ』！」

墓地より闇色の風が吹き、中から黒き怪鳥が姿を見せる。

ダーク・シムルグ ATK2700DEF1000

「頼むぞリン！『召喚師セームベル』を攻撃表示で召喚！」

「リン登場！」

決めポーズに可愛いウインク。やっとの登場でこ機嫌だな。

召喚師セームベル ATK600DEF400

「『召喚師セームベル』の効果発動！手札からセームベルと同じレベルのモンスターを特殊召喚出来る。現れる、『異次元の偵察機』」

異次元の偵察機 ATK800DEF1200

「何が来るかと思えば、『ダーク・シムルグ』はともかく、後は雑魚じゃないか。」

イマナンテイッタ？リンガザコダツテ？

「雑魚？私雑魚じゃないよ！クロ兄が選んでくれたんだもん！」

リン大丈夫だ。すぐに片付ける。だから力を貸してくれ。

「俺の仲間を！雑魚呼ばわりするなと言ったはずだ！リン達はその身を持って俺のエースを呼んでくれる！場の『召喚師セームベル』『異次元の偵察機』、墓地の『シールドウィング』を除外！」

「あいつを懲らしめて！アトモスファイア！」

「この場を取り囲み制圧しろ！現れる、『Theアトモスファイア』！」

「クオオオオオオ！」

俺達の思いをのせて、アトモスファイアの咆哮があがる。

Theアトモスファイア ATK1000DEF800

「8星で攻撃力1000？やっぱり雑魚じゃないか！」「何度も言わせるな！アトモスファイアの効果発動！相手モンスターを吸収し、その攻守を得る！エリートを飲み込め、サクリファイアスファイア！」

スフィアの中にゴ布林達が飲み込まれる。

Theアトモスフィア ATK1000 3200

「な、なん、」

「お前が雑魚と呼んだ奴にやられる。お前こそ雑魚じゃないか。」

さて、弁解時間はいらさないか。

「ひっ！」

「『ダーク・シムルグ』で『ゴ布林ドバグ』に攻撃！ダークテンペスト！」

ゴ布林ドバグの飛行機が、ダーク・シムルグの起こした風に飲まれ爆発した。

取巻 ライフ4500 3200

「あ、ああ。」

「これでとどめだ！俺達の怒りを思い知れ！『Theアトモスフィア』でダイレクトアタック！テンペストサンクシヨonz！」

ゴブリンの詰まったスフィアが取巻を押し潰す。

「うわあああああ！」

さて十代は、もう少しかかりそうだな。まあ原作通りだと途中で終わるから手っ取り早くすませるか。

「さて。」

「ひっ」

へたりこんでやがった取巻の胸倉を掴んで引き上げる。

「俺の仲間に雑魚と言ったこと、謝罪してもらおうか。」

「は、離して、」

「あーん。聞こえんな。何を言った？何を言うべきだ？」

「お、おい。止める。取巻を離せ！」

もう一人の取り巻き、古場と言ったか？が止めに入るが、貴様は関係ない。

「さあ、早くしろ。俺はそんなに気が長くない。」

締め上げる力を増していく。

「す、すまなかった。俺が悪かった。許してくれ。」

リン、アトモスフィア、許していいか？言われたのは皆だけど。

「クロ兄、もういいよ。クロ兄が怒ってくれたからどうでもよくなっちゃった。」

「クオ。」

「アトモスフィアもいってさ。」

そうか。ならば解放してやる。

「もう二度と言うな。そして全ブルー生に伝える。人を雑魚呼ばわりするやつは全て天川黒兎が叩き潰すとな。」

もうこいつに用はない。さて、十代はどうなったか。

「黒兎、あなたは勝手に。」

しょうがないだろ。人の仲間をけなすやつが悪い。

「あ、黒兎君。さっきは凄かったっすね。」

「ああ、久しぶりにきたからな。それより十代は？」

「アニキはやバイっすよ。次のドロ―次第で決まるっす。」

ということはそろそろ、

「まだまだ万丈目。俺のターン、ドロ―！」

「！いけない。ガードマンが来るわ。早く離れないと。」

「ふん、勝ちを預けてやる。やはり試験はまぐれだったようだな。いくぞお前ら！」

おー見事な撤退。こっちも急がないと。

「ほら、早く行こうよアニキ。ガードマンが来る。」

「嫌だ！俺はデュエルをするんだ！帰ってこい万丈目！」

「うるさい。駄々をこねるな。退学になったらデュエルどころじゃないぞ。」

「離せー！」

なんとか翔と二人がかりで十代を連れだし安全な所に。

「なんとか逃げ切れたわね。二人ともどうだった、ブルーの洗礼は。」

「拍子抜けもいとこだな。」

「まあ黒兎は勝ったしね。十代は危なかったんじゃない。」

「いや、あのまま続けたら俺の勝ちだぜ。」

そう言つと最後のドローを見せてくる。そのカードは…死者蘇生

「うそ、じゃあ二人とも勝ってたの。」

「まあそういう訳だ。レッドだからって馬鹿にするな。」

「馬鹿にはしないけど。本当驚きよ。万丈目君の実力は本物だしね。」

あの地獄ファンデッキが？

「ま、せっかく逃げ切ったんだし、見つからないように帰ることね。」

「おう、明日香も気をつけろよ。」

「とりあえず礼を言う。また会おう。」

「明日香さん、ありがとう。」

やっと帰れる。そういえば勢いで色んな奴に宣戦布告したけどどうしよう。…まいつか。向かって来るなら叩き潰す。見つけたなら懲らしめる。とりあえず今日はもう眠い。

「まあ十代、楽しいデュエルだったな。」

「俺は物足りないぜ。黒兎、帰ったらデュエルだ！」

もう勘弁してくれ。

SIDE〜リン〜

やっとレッド寮に帰ってきました。道中何もなくてよかったです。

ただ十代さんは物足りないうってクロ兄にデュエルをせがんでいました。だが流石にクロ兄も拒否。疲れたよね。そういえばさっきのデュエル、クロ兄があんなに怒ってくれて嬉しかったな。そういえばちゃんとお礼してないや。

「クロ兄。」

「ん、どうした？リン。」

「今日のデュエル、私達のためにあんなに怒ってくれてありがとう。」

精霊が見えない人にとって、私達はただのカードでしかありません。だから、あの取巻さんが言うように、自分が使わなくて、能力の低いカードを雑魚と呼ぶのも理解はしています。

「なんだ、そんなことか。いいんだよ。俺がむかついたんだから。」

「ただ、やっぱりカード1枚1枚気持ちがあるし、使われないだけでなく、あんなに言われるのは悲しい。だから。」

「ううん。ちゃんとお礼を言わせて。私達は確かに使いやすいカードじゃないかもしれない。でも、使ってくれる人がいて、こんなにも思ってくれる人がいるっていうのはやっぱり幸せだから。」

「クロ兄があんな風に言ってくれて凄く、嬉しかった。」

「だからね。私達は平気なの。クロ兄がそばにいてくれるから。私達と、一緒に、いて、くれるから。」

「リン。もういい。泣いていいよ。やっぱり嫌だったよね。」

クロ兄はそう言うと、私を優しく抱きしめてくれた。

「人の都合でこの世界に生まれて、その人の都合でけなされる。辛くない筈がない。」

「クロ兄…」

「俺はリン達と出会って、確かに生きてるんだって知った。だから、あんな風に言う奴らが許せない。それが例え、まだ精霊が宿っていないカードでも。」

クロ兄が頭を撫でながら、自分の気持ちを伝えてくれる。

「だから、せめて自分の手が届く限りは助けたい。傲慢かもしれないけど、リンみたいに泣いてるカードはあるはずだから。」

「クロ兄。」

「リン。俺はずっとリンというよ。俺が絶対に君を守る。」

そう言うとクロ兄は強く私を抱きしめてくれた。私は泣きながら思ったんだ。私は幸せだった。

SIDE 黒兎

あの言葉を言われてから、リンが何か堪えていたのはわかっていて、リンは泣いて、少しはすっきりできたかな。

「さ、リンもう寝よう。嫌なことは寝て忘れよう。」

胸に顔を埋めてるリンの頭を撫でながら提案する。

「幸いベッド空いてるし、リンもカードに戻らなくても…」

「クロ兄。」

ん？リンが上目使いでこっちを見てる。可愛い／＼／

「あのね。今日一緒に寝て欲しいの。」

「え？」

いやいやいや。落ち着け、冷静に考える。いくら精霊とはいえリンは可愛い女の子。もしも精霊の見える十代にでも見つかったら…
ロリコン確定！

「いや、リン。流石にそれはマズ…」

「ダメ？」

「今日だけだよ。」

うん、今日だけ今日だけ。色々言われてリンも参ってるんだ。俺がいれば安心できるようだし、俺がしっかりしてれば問題ない。なにより泣いてる女の子を放っておけるか！

「ありがとうクロ兄！」

嬉しそうだなあ。そんなに一人になりたくなかったか。

「じゃあ寝るか。リン、こっちおいで。」

布団に入って手招き。

「はい！」

すぐに入ってきた。流石にまだ小さいな。布団に余裕がある。

「じゃあおやすみ。リン。」

「おやすみなさーい。」

目を閉じるとすぐに眠気が。流石に疲れてたか。そういえばさっきのリンの言葉。新しいデツキ作るのかな…

SIDE〜リン〜

クロ兄すぐに寝ちゃった。今日は校長先生の話に耐えて、デュエルも2回。うん、すぐ寝るね。

「でも、もう少しだけ、かまってほしかったな。」

寝てる間に色々しちゃお。とりあえずもっとくっついてみたり。エヘッなんだか嬉しいな／＼／

「そういえばさっきの言葉。」

『ずっとスズというよ。』

あれってプロポーズ？／＼／

第四話 大切な人 (後書き)

整理終了です。

前の後書きでも書いたことですが、ブルーはレッドのカードを使い
たくなかったため、エリート部隊を蘇生しました。

第五話〜新たな仲間〜（前書き）

整理のお詫びと、祝日前ということでも、さらなる投稿です。
今回オリジナルヒロインと精霊登場です。

第五話 新たな仲間

SIDE 黒兎

どうも、オシリスレッド1年天川黒兎です。アカデミアに来てから数日が経過しました。十代や翔とデュエルしたり、島内を探索したり楽しくやらせてもらってます。えっ、時間が跳んだ？いいじゃない。これといって何かあった訳でもない。えっ、あの夜はどうなったって。普通に朝を迎えましたよ。リンが俺にしがみついていたけど、随分辛かったんだな。そうそうあれからリンがしょっちゅう俺の布団に潜り込むんですがどうしましょう。

「黒兎、何一人で話してるんだ？ていうか誰と話してるんだ？」

「気にするな十代。俺は気にしない。」

「すみません、十代さん。クロ兄にはよくあることなので。」

何やら失礼なことを言われたような。まあいい。ちなみにただ今体育の授業中です。リンと十代と一緒にランニング中。

「そつえば黒兎。翔の様子がおかしいんだけど、何か知らないか？」

「翔が？」

そつえばさっきの授業は散々だったからな。まだおちこんでるのか？

回想

それは体育の前のデュエル理論の時間。ちなみに席は、俺の左に翔、その左に十代だ。

「えー、それデーハ、フィールド魔法について、シニョール翔。説明して下さいーノ。」

「は、はい。え、えと、フィールド魔法はその、」

「もういいノーネ。所詮落ちこぼれのオシリスレッド。この程度も答えられないノーネ。」

クロノスの野郎。いくら気にいらなからって公開処刑とは。周りの連中も助けるどころかさらにけなしやがって。許さん！

「では僭越ながら同じく落ちこぼれのオシリスレッド、天川黒兎が答えさせていただきます！フィールド魔法とは簡潔に言うならばお互いに影響を及ぼす永続魔法であり、自分と相手の双方に効果を及ぼすのが最大の特徴で、専用のフィールドカードゾーンに置かれます。発動後もフィールドに残り続けますが、新たなフィールド魔法が発動された場合、古いフィールド魔法は破壊されます。そのため除去カードだけでなく、フィールドカードに破壊される危険性を含んでいます。ただし、フィールド魔法は他のカードのようにフィールドカードゾーンにセットできませんが、発動しない場合古いフィールドカードは破壊されないため、セットしただけでは破壊できません。また自分と相手を問わずフィールド魔法はフィールド全体に1枚しか存在できなく…」

「も、もういいノーネ。あなたが理解していることはよくわかったーノ。」

「オシリスレッドだからと言って理解してないわけではないことがわかっていただけなのなら満足です。」

お、結構効いたか。歯ぎしりが聞こえそうだけ。

「それにクロノス先生。オシリスレッドとか知識がないとかとデュエルの実力は関係ないぜ。現に俺や黒兎は先生に勝ってるし。」

十代！ナイス追い打ち！

「うるさいノーネ！今日の授業はここまで！復習を忘れないようにノーネ！」

回想終了。

うまいことクロノスを叩けたからよかったんだが。えーっと、どこにいる？あ、いたいた。ありや完全にトリップしてやがるな。てことは今日が偽ラブレターの日か。

「落ち込んでるわけじゃなさそうだな。だがそうになると俺も心あたりがない。」

「そっか、なら直接聞くか。」

言うが早いか翔に向かってかけていく十代。どれどれ、俺も行きますかね。

「クロ兄。今の翔さん、ちょっと気持ち悪い。」

リンの精神衛生のためにも。

「どうしたんだ、翔。さっきからなんだかおかしいぞ。」

「あ、アニキ。僕はいたって普通つすよ。エへへ。」

リン、見ちゃいけません。

「クロ兄？前が見えないよ。」

「普通じゃないだろ。体育でそんな状態じゃ怪我するぞ。」

「大丈夫つすよ。」

走りだしたはいいけどふらふらしてんな。完全に舞い上がってやがる。

「あれ、大丈夫じゃないよな。黒兔。」

「ああ。だが十代、本人が否定する以上見守るしかない。」

まあ夜にはわかるんだ。今だけいい夢見るよ。そういえば俺は巻き込まれるのか？

そんな疑問を持ってた時もありました。

「大変だ、黒兔！翔が掠われた！」

当然のように俺の部屋にくる十代。俺を仲間の一人と思ってくれていると思うと嬉しいな。

「十代、掠われたって誰に？てかどうやって知った？」

「今メールで、翔は預かった。助けなければブルー女子寮に来いて。」

原作通りだな。俺が混じるから少しは変わるかな？

「よし、とりあえず行ってみよう。情報はそれだけなんだ。」

「ああ、待ってるよ。翔！」

移動中

ただ今ブルー女子寮を囲む湖前です。誰だよ湖の中の城を寮にしたやつは。

「やっと着いた。後はボートか。行こうぜ黒兎。」

十代がさっさと乗り込みオールを握る。あ、漕いでくれる。ありがとう。みるみる近づいてく。すごいな十代。あ、人影が、1、2、…5人！？おかしい。明日香と取り巻きのももえとジュンコ、翔を入れて4人のはず。やっぱり原作とずれてるな。

「よし、着いたぞ。おい、翔を返せ！」

「待ってたわよ。十代。あら、黒兎もきたの。」

「成り行きでな。ところでなんでこんなことに？」

「それは、この眼鏡が女子寮の風呂を覗いたからよ！」

え」と、どっちがどっちだったか。とりあえず取り巻きの一人が、
翔を指差す。

「だからそれは誤解っすてば。僕は手紙で呼び出されただけっすよ。」

「と、言ってるが。」

「そんなの嘘に決まってますわ！」

「翔がそんなことするわけないだろ！」

「どうか。大人しそうな顔して、結局男は獣よ。」

ひどい言われようだ。

「なあ、翔。とりあえずその手紙とやらを見せてくれ。持ってるだ
ろ。」

「うん。ポケットに入ってるっす。」

「明日香、確認してくれ。」

「明日香さんになんて口の聞き方！」

腰ぎんちゃくは黙ってる。

「別にいいわよ。どれどれ。これね。私の名前があるけど私じゃな

いわ。こんなに字汚くない。」

「どうせこいつが作った偽物ですわ。」

「そんなことしないっすよ。」

んー、俺は偽物の出所を知ってるからいいけど、それをどう伝えるか。

「あー、なんだ。手紙があるならむやみに触らないで警察に指紋やら筆跡鑑定でもしてもらえばいい。」

「け、警察っすか!」

「何言ってるんだ翔。お前はやってないんだろ。だったら胸張って構えてろ。」

「そ、そっつすね。警察でもどこでも連れてけっす!」

さて、どうでる?

「そんな大事にはしたくないでしょ。お互いに。だから、デュエルで決めましょ。」

キター!デュエル脳!

「私と十代でデュエルして、十代が勝てば翔君を返してあげる。負けたら職員に突き出す。」

「よっしや、明日香。そのデュエル受けてたっぜ!」

なんとか原作通りになりそうだ。後は彼女か。長い白髪をポニーテールにしているな。身長は俺より少し低いかな。

「ねえ、そのあなた。」

おっと、じろじろ見すぎたか。いったい誰だ？

「もしかして、天川黒兔？」

え、俺を知ってる？最近の俺はブルー男子のブラックリストだけど女子まで広まったか？

「そうだが君は？」

「覚えてない？種島咲夜。」

種島…咲夜。

「あー！去年の冬に会った咲夜さん！？」

「咲夜でいいよ。よかった、覚えててくれて。」

「いや、髪型変わってるし、全然気付かなかった。受験会場にいたっけ？」

「私は中等部からの進学だから。あなたが遅刻してきたのは見てた。」

「何、咲夜。知り合いだったの？」

「うん、明日香。前にちょっと縁があつて。」

「ふーん、そう。なら旧交を温めたら。さあ十代いくわよ。」

「ああ、負けないぜ明日香！」

「「デュエル！」」

お、始まった。

「本当懐かしい。あの数日はまだ覚えてる。」

「俺だつて。どう？あの後変な奴に絡まれてないか？」

「大丈夫。それよりリンちゃんは？元気？」

なるほど。いつの間にかカードに戻ってたのはこれが。

「リンはもう寝たよ。今日は勘弁してやってくれ。」

「そう、残念。久しぶりのリンちゃんでもふもふしたかったのに。」

この咲夜という女は、子供とか仔犬といった小動物をこよなく愛しそのうえ精霊が見えるもんだから、リンはそのハートを射止めてしまったのだ。

「ところで黒兎。あなたここに何をしに？」

「翔の救出のつもりだったが、メールが十代だけだったことや、今

の状況を見るに、明日香が十代の実力が知りたくて翔を利用しただけだな。」

「うん、そう思う。まあ私はあなたが十代と一緒にいることが多いからもしかしたらって思っただけ。会えてよかった。」

ふむ。嬉しいことを言ってくれ。

「ねえ、やることないなら私とデュエルしない。せめてソリッドビジョンのリンちゃんに会いたいな。」

「動機がおかしくないか？まあデュエルなら受けるけどさ。」

「じゃあ決まりね。あの頃の私とは大違いだから。」

「そりゃ楽しみだ。」

「デュエル！」

先攻 黒兎
手札6枚

「俺のターン、ドロー！」

どれどれ手札は…ヤベ、デッキこっちしてたんだ。咲夜のやつ怒るかもな。

「俺はモンスターをセット、魔法罫に2枚セットして、ターンエンド。」

頼むから怒るなよ。

手札3枚

後攻 咲夜

手札6枚

「私のターン、ドロー！」

確か1年前の咲夜のデッキは、

「『コアキメイル・グラヴィローズ』を攻撃表示で召喚。」

コアキメイル・グラヴィローズ ATK1900 DEF1300

変わらないの植物デッキですか。

「そして、手札から魔法カード『大嵐』を発動！」

ナニー！？

「場の魔法罫を全て破壊！」

「ならばチェーンして、リバーズ発動。『岩投げアタック』。デッキから岩石族モンスターを1枚墓地に送り、相手に500ダメージを与える。俺は『メデューサ・ワーム』を墓地に送る。」

片方はなんとかあったが、ミラフォは破壊か。

咲夜 ライフ4000 3500

「『岩投げアタック』！？ちょっとそのデッキ！」

「悪いな。新しく作ったデッキをセットしてた。」

「じゃあこのデュエル、リンちゃんに会えないじゃない！どうしてくれるの！」

そんなこと言われても。

「そんなデッキに用はない。すぐに片付けてあげる。『グラヴィローズ』でセットモンスターに攻撃！茨の鞭！」

裏側表示だったカードが表になり、骸骨を持ったネズミが鞭に打たれ砕けた。

「戦闘破壊された『巨大ネズミ』の効果発動！デッキから攻撃力1500以下の地属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚する。現れる、『激昂のムカムカ』！」

激昂のムカムカ ATK1200 DEF600

「さらに『激昂のムカムカ』は自分の手札1枚につき400攻撃力を上げる。」

激昂のムカムカ ATK1200 2400

「私はカードを1枚セットして、グラヴィローズのコストで『魔天使ローズ・ソーサラー』を見せてターンエンド。リンちゃんを隠した罪、思い知らせてあげる。」

手札3枚

「コエーよ！てかリンは俺のものだ！お前に渡してたまるか！」

うちのリンは絶対に渡さん！

SIDE↳咲夜↳

なんてこと。リンちゃんに会うことを楽しみに黒兎を捜し続けたというのに、見つけたと思ったらデッキが違っただなんて。

3ターン目 黒兎

手札4枚

「俺のターン、ドロー！」

それにデッキが1年前のじゃないなんて情報アドバンテージがないじゃない。

「手札が増えたことでムカムカの攻撃力が上がる。」

激昂のムカムカ ATK2400 ATK2800

「このままいくぜ！ムカムカでグラヴィローズに攻撃！クラブハンマー！」

ムカムカが巨大な鋏を振り上げ襲い掛かる。

「リンちゃん以外はお断りよ！リバース発動、『棘の壁』！自分の場に表側表示で植物族モンスターが存在するとき、相手が攻撃を行

った場合、相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

でかいカニみたいなモンスターが無数の棘に貫かれる。

「くそ。ならばメインフェイズ2に永続魔法『未来融合・フューチャー・フュージョン』発動。エクストラデッキから『マルチ・ピース・ゴーレム』を選択。融合素材、『ビッグ・ピース・ゴーレム』と、『ミッド・ピース・ゴーレム』を墓地に送り、2ターン後のスタンバイフェイズに『マルチ・ピース・ゴーレム』を特殊召喚できる。」デッキから2枚のカードを墓地に送られる。私の手札に防ぐ手段はない。

「さらにモンスターをセットしてターンエンド。」

また守備表示。岩石族じゃ生半可な攻撃力は通用しないね。

手札2枚

4ターン目 咲夜

手札4枚

「私のターン、ドロー！」

まずは私のパートナーを呼ぶ準備をしないと。

「スタンバイフェイズ、グラヴィローズの効果発動。デッキから、レベル3以下のモンスター1枚を墓地へ送る。私はデッキから『死の花ネクロ・フルール』を墓地に送る。」

グラヴィローズの蔓が、デッキから1枚引っ張り出し墓地に送る。

手札は上々。ここは攻める時！

「『イービル・ソーン』を召喚し、効果発動。このカードを生け贄に捧げ、相手に300ダメージ与える。さらにデッキから同名カードを2枚特殊召喚！」

黒兔 ライフ4000 3700

イービル・ソーン ATK100 DEF300

イービル・ソーン ATK100 DEF300

「さらに場の『イービル・ソーン』1枚を手札に戻し、手札から『魔天使ローズ・ソーサラー』を特殊召喚する！」

魔天使ローズ・ソーサラー ATK2400 DEF1300

「さらに魔法カード『フレグランス・ストーム』発動。場の『イービル・ソーン』を破壊して、カードを1枚ドロロー！」

ラッキー！ツイてる。

「今引いたカードは『ロードポイズン』。『フレグランス・ストーム』はドロローしたカードが植物族モンスターだった場合、もう1枚ドロローできる。カードドロロー！」

よし、場も手札も十分！

「覚悟しなさい。まずはローズ・ソーサラーで、セットモンスタートを攻撃！ローゼス・ストリーム！」

薔薇の花弁が渦を巻き、セットモンスターに襲いかかる。

「セットモンスターは『メタモルポット』。破壊されたメタモルポットのリバーズ効果発動！互いのプレイヤーは手札を全て墓地に送り、カードを5枚ドロー。」

む、私の捨てるカードが多い。

私が墓地に送ったのは『イービル・ソーン』『ロードポイズン』『バイオレットウィッチ』『強制転移』の4枚。黒兎が墓地に送ったのは『コアキメイル・サンドマン』と『融合』。いいカードが墓地にいった。

「さらに、グラヴィローズでダイレクトアタック！茨の鞭！」

グラヴィローズの両手の鞭が黒兎を打つ。

黒兎 ライフ3700 1800

よし、ライフは私がリードできた！

「魔法罫にカードを2枚セット、グラヴィローズのコストに『キラ・トマト』を見せて、ターンエンド。」

一気に押し切らせてもらおう！

手札3枚

5ターン目 黒兎

手札6枚

未来融合1ターン目

「俺のターン、ドロー！まずは手札から魔法カード『ブラック・ホール』発動！場のモンスターを全て破壊する！」

対策済みだよ！

「甘い！リバーズ発動！カウンター罠『ポリノシス』！場の植物族モンスター1枚を生け贄に、魔法、罠、モンスターの召喚、特殊召喚を無効にし破壊する！私はグラヴィローズを生け贄に『ブラック・ホール』を無効にする！」

「そんな!?!」

さあ、次はどうくるの。

「なら俺はモンスターをセット、カードを1枚セットしてターンエンド。」

またセット。攻める気がないのかな。

手札3枚

6ターン目 咲夜

手札4枚

「私のターン、ドロー！」

動かないなら、遠慮なくいかしてもらおう！

「『ローンファイア・ブロッサム』を召喚し効果発動。このカードを生け贄に、デッキから『ギガプラント』を攻撃表示で特殊召喚！」

ギガプラント ATK2400 DEF1200

これで全ての攻撃が通れば私の勝ち！

「バトル！ローズ・ソーサラーでセットモンスターに攻撃！ローゼス・ストリーム！」

青い花卉の渦がセットカードを巻き上げる。

アステカの石像 ATK300 DEF2000

よし！

「ダメージステップにリバーズ発動！」

嘘！

「『収縮』！場のモンスター1体の攻撃力をエンドフェイズまで半分にする！ローズ・ソーサラーの攻撃力を半分に！」

ローズ・ソーサラー ATK2400 1200

「さらに『アステカの石像』の効果発動！このモンスターが攻撃を受けて相手にダメージが発生した時、そのダメージは倍になる！」

「そんな！キヤアアア！」

咲夜 ライフ3500 1900

くー、油断したなー。

「なら、ギガプラントでアステカの石像に攻撃！」

ギガプラントが大口開けて石像をかみ砕く。怖！

「私はこれでターンエンド。」

キメれなかった。次のターンに未来融合が発動しちゃう。

手札3枚

7ターン目 黒兎

手札5枚

未来融合2ターン目

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズ、『マルチ・ピース・ゴーレム』を融合召喚！」

マルチ・ピース・ゴーレム ATK2600 DEF1300

くっ攻撃力が上回れた。

「すかさずバトル！マルチ・ピース・ゴーレムでギガプラントに攻撃！ゴーレムプレス！」

マルチ・ピース・ゴーレムがこっちに倒れてくる！

「キャッ！」

目の前でギガプラントがマルチ・ピース・ゴーレムの体に押し潰された。

咲夜 ライフ1900 1700

「そして、俺はモンスターをセット、カードを2枚セットしてターンエンド！」

手札2枚

8ターン目 咲夜

手札4枚

「私のターン、ドロー！」

さつきは油断したけど、もう出し惜しみはなし。力を貸して！

「まずはリバーズ発動！『リミット・リバーズ』。墓地から攻撃力1000以下のモンスターを蘇生する。『死の花ネクロ・フルール』を特殊召喚！」

死の花ネクロ・フルール ATKODEFO

地面から怪しげな植物が生えてきた。

「ネクロ・フルールを守備表示にしてリミット・リバーズの効果発

動。ネクロ・フルールは破壊される。」

ネクロ・フルールが弾けとび、辺りが怪しげな霧に包まれる。

「さらに、破壊されたネクロ・フルールの効果発動。このカードがカードの効果で破壊された時、デッキからあるモンスターを特殊召喚できる。」

霧の中に影が揺れる。彼女こそ1年前にいなかった、私の精霊にしてパートナー。

「お願い！『時花の魔女フルール・ド・ソルシエール』特殊召喚！」

「やっと私の出番ね。」

時花の魔女フルール・ド・ソルシエール ATK2900 DEF0

「お待たせソル！」

「咲夜、まさかそいつ。」

「そう、私の精霊、ソルよ！」

「よろしくね。」

ソルが黒兔に手を振って挨拶してる。でも紹介はデュエルの後にして！

「ソルの効果発動！召喚、特殊召喚に成功した時、相手の墓地のモンスターを私の場に特殊召喚できる。私は『コアキメイル・サンド

マン』を選択。」

「さあ来なさい！」

コアキメイル・サンドマン ATK1900 DEF1200

ソルの生み出した紋章の中から、大きな泥人形が立ち上がる。

「さらに魔法カード『死者蘇生』発動。墓地からモンスターを特殊召喚する。『ギガプラント』を特殊召喚！」

地面から、ギガプラントが再び姿を現す。

「そしてギガプラントを再度召喚！効果で手札から『椿姫ティタニアル』を特殊召喚！」

巨大な椿の花が開き、中から椿の姫が姿を現す。

椿姫ティタニアル ATK2800 DEF2600

「まだまだ！手札から速攻魔法『サイクロン』発動！右のリバーズカードを破壊！」

「そつちは当たりだ！リバーズ発動『和睦の使者』！このターン俺のモンスターは破壊されずダメージも受けない！」

「ならあなたのモンスターを借りるわ！サンドマンを生け贄に和睦の使者を無効にし破壊！」

サンドマンが砂となり、黒兔のカードを埋める。

「さあいくわよ！まずはソルでマルチ・ピース・ゴーレムに攻撃！
時花の魔術！」

「はいはい。」

マルチ・ピース・ゴーレムがソルの霧に包まれ朽ちていく。

黒兎 ライフ1800 1500

「次は椿姫ティタニアルでセットモンスターに攻撃！」

「セットモンスターは『伝説の柔術家』だ！効果発動！このカード
を攻撃したモンスターをデッキの1番上に戻す。」

ティタニアルがデッキのてっぺんに投げ飛ばされた。

「まだまだローズ・ソーサラーでダイレクトアタック！ローゼス・
ストリーム！」

青い花弁が黒兎に襲い掛かる。私の勝ちだ！

「負けてたまるか！リバーズ発動！『リビングゲッドの呼び声』！
自分の墓地からモンスターを1体攻撃表示で特殊召喚する。まだ頼
む、マルチ・ピース・ゴーレム！」

地面から巨大な壁のようなゴーレムが再び立ち上がる。

「そんな！攻撃中止！カードを1枚セットしてターンエンド。」

大丈夫、場は圧倒的に私に有利。次のターンで今度こそ決めてあげる。

手札0枚

9ターン目 黒兎

手札3枚

「俺のターン、ドロー！」

なんなのかしら。こんな状況なのにあんなに楽しそうにドローしてる。

「やっぱり咲夜は強いな。1年前に闘った時よりまた強くなってるよ。」

「言ったでしょ。あの時とは違うの。」

それを言ったら黒兎も随分変わったよ。あの時よりも吹っ切れたよ。うな、いい顔してる。

「だが、リンのためにも負けられない！このカードに賭ける！魔法カード『手札抹殺』！」

そつえばそうだった。リンちゃんを出させるためにデュエル始めたんだった。

「させない！リバーズ発動『ポリノシス』！ローズ・ソーサラーを生け贄に手札抹殺を無効に！」

よし、手札交換を阻止できた。これで大丈夫のはず。

「……………」

「あれ、声も出ないほど悔しいの?」

肩まで震わせて、そんなに悔しいのかな。

「……………っは。」

「何?」

「はーっはっはっは！俺は賭に勝ったぞ咲夜！」

「何を言ってるの!?!」

「手札抹殺は囷。リバースカードを使わせるために発動したのさ。」

そんな!?

「こいつが俺の切り札だ！墓地の岩石族8体を除外し、今こそその咆哮を上げる！『メガロック・ドラゴン』！」

メガロック・ドラゴン ATK? DEF?

地面の岩や砂が集まり、巨大な竜の形に固まっていく。

「メガロック・ドラゴンの攻守は除外した岩石族1体につき700アップ。除外したのは8体。よって攻撃力守備力は5600!」

メガロック・ドラゴン ATK5600 DEF5600

なんだかメガロック・ドラゴンの纏うオーラが見える。

「メガロック・ドラゴンでギガプラントに攻撃！家の娘は渡さん！
アース・カノン・インフェルノ！」

メガロック・ドラゴンの口から極太の熱戦が、ギガプラントを貫通し私にむかってくる！

「キヤアアアアア！」

咲夜 ライフ1700 - 1500

WIN 黒兎

「楽しいデュエルだったな咲夜。満足したぜ！」

そんな笑顔しちゃって。悔しがれないじゃない。

「ええ、楽しかった。」

SIDE 黒兎

なんとか勝ったか。あのまま負けてたらリンがどうなったかわからんからな。よかったよかった。

「黒兎、強くなったね。なんだか差が開いちゃった。」

「そんなことないだろ。咲夜のプレイが違ったら負けたのは俺だ。」

「差なんてないよ。」

ソルの召喚タイミングによっては防ぎきれなかったからな。

「じゃあそういうことにさせてもらおうかな。」

「そうしとけ。」

さて、十代達は…っってもう終わってる。原作イベント見逃した！

「黒兎、種島。二人とも凄いデュエルだったな！」

「咲夜でいいよ遊城。あなたたちの方は終わってたのね。」

「俺も十代でいいぜ。デュエルは俺が勝って、翔も無事だ。」

「助かったよアニキ。黒兎君もありがとうっす。」

笑って礼を言ってるが言うべきことは伝えるか。

「翔、礼はいいが、彼女達にちゃんと謝罪したのか？」

「え？」

「誤解だったにしろ、彼女達に嫌な思いをさせたのは事実なんだ。疑われるようなことをしたのはお前だしな。」

「う、うん。」

「おおかた、自分はやってないの一点張りでまともに謝ってないん

だろ。人としてやらなきゃいけないことは弁える。」

「そうだね。僕、ちゃんと謝罪してくるよ。」

そうとうと翔は明日香達のところにむかっていった。ももえやジュンコには何か言われるだろうが、ちゃんと謝れば伝わるはずだ。

「意外と厳しいね。友達には甘いと思ったんだけど。」

「咲夜。そんなことはないさ。ただ相手の気分のいいことばかりするやつは友達じゃない。親しき仲にも礼儀あり。多少の厳しさはいるさ。」

特に翔みたいなのは。

「そう。じゃあこれからはもっとしつかりしなきゃ。」

「へ？」

「1年前はまた会えると思わなかったけど、ちゃんと会えたんだもん。コホン、私と友達になって下さい。」

「ああ、喜んで。改めてよろしくな。」

咲夜と握手。意外と手ちつちやいな。

「ねえ、そろそろ私の紹介してくれない？」

咲夜の後ろからソルが姿を見せる。背は咲夜よりちょっと高いかな。

「そうね。デュエルで見せたけど改めて、私の精霊でパートナー、時花の魔術・フルール・ド・ソルシエールことソルよ。」

「咲夜のパートナーをやらせてもらってます。ソルよ。これからよろしくね、黒兎君。」

「ああ、こちらこそよろしく。黒兎だ。精霊は2体いるんだが紹介は後日かな。」

「いいよ、クロ兄。」

リンがその姿を見せる。

「よろしく、ソルさん。クロ兄の精霊、召喚師セームベルのリンです。」

「あらかわいい。私はソル。よろしくねリンちゃん。」

「リンちゃん！私よ、咲夜よ！なでなでさせて、抱きしめさせて、もふもふさせてー！」

ヤバイ！案の定咲夜が暴走しやがった！

「だー、落ち着け！だから今日リンを出したくなかったんだ！」

「リンちゃん、リンちゃん、リンちゃんー！」

「クロ兄、助けて！」

「ほーら、咲夜落ち着きなさい。愛しいリンちゃんが怯えてるわよ。」

「
ソルが咲夜を抑えてる隙にリンを避難。」

「ソル。俺のもう一体の精霊にしてエースがこいつだ。アトモスファイア！」

アトモスファイアが翼を広げ飛び立つ。

「クオオオオ！」

「大きいわね。私ソル。よろしくね、アトモスファイア。」

ふむ。あの2体も仲良くできそうだ。

「あれ、アトモスファイアじゃない。久しぶり。」

お、咲夜も正気に戻った。

「クオ。」

「あは。相変わらず人懐っこいわね。」

そういう訳ではないのだが。何故かわからんがアトモスファイアは咲夜に懐いている。1年前からの謎だ。リンには歩く危険人物なんだが。

「お、なんだなんだ。精霊大集合だな。俺達も混ぜてくれよ。」

「クリクリー。」

十代とハネクリボーも混じって精霊とその所有者大集合だ。互いに自己紹介して交流が行われる。

「そついえば黒鬼。アトモスフィアに名前つけてあげないの？」

「へ？」

「リンちゃんだけじゃ不公平じゃない？どっちもあなたの精霊なのに。」

ふむ、言われてみればそうだ。

「どうだ、アトモスフィア。名前欲しいか？」

「クオ。」

首肯。やはり名前とは特別なものなのだろう。

「よし、わかった。うーん……………安直かな？フィアってのはどうだ？」

「いいんじゃない。わかりやすいし。私もソルって気に入ってるわよ。」

「どうだ、アトモスフィア。」

「クオツクオツ。」

「嬉しいって、クロ兄。」

全身で喜んでるのが伝わるな。

「んじゃ改めて、よろしくな。ファイア。」

「クオー。」

「ファイア、よろしくな!」

「クリクリー。」

「さっきも言ったけど改めて、よろしくねファイア。」

「安置な名前同士仲良くしましょう、ファイア。」

ソルのやつ俺と咲夜を責めてる?そんなことを思ってるぞ。

「アニキ、黒兎君。なんとか許してもらえたよ。」

「仕方なくですわ。」

「そつよそつよ。」

「まあいいじゃない。見られてないんだし。」

「あれ、今日のところはお開きかな?」

「咲夜、すっかり仲良くなったみたいね。」

「うん。」

皆が合流。今日はここまでかな。せつかくだが。

「さて、んじゃ十代、翔。そろそろレッド寮に戻ろっぜ。」

「そうだな。」

「そうだね。皆今日は本当にごめんなさいっす。」

舟に乗り込んで帰る準備。

「もういいわよ。これからもよろしくね。おやすみなさい。」

「今度何か奢りなさいね。それでちやらよ。」

「次は無いですわよ。」

「それじゃ黒兎、皆。またね。これからよろしく。」

帰りは償いをこめて翔が漕ぐ。俺と十代は手を振って別れる。明日からまた楽しくなりそうだ。

S I D E 咲夜

まだ手を振ってる。見えなくなるまで振る気なのかな。

「よかったわね、咲夜。」

「明日香?」

「黒兎でしょ。1年前にあなたを助けてくれた王子様は。」

「そ、そんなんじゃないよ！ただあの時に色々してもらって嬉しかったから、もう一度会えたらちゃんとお礼と、今度はちゃんとお付き合いたいなって！」

「お付き合いって咲夜、積極的なんだから。」

「と、友達としてだよ！」

明日香が変な事を言うから頭が混乱してきた。確かにあの時助けてもらったのは、助かったし嬉しかったしこよかったし。だ、だけれどあれは吊橋効果みたいなもので、今会ったら楽しそうにデュエルして綺麗な笑顔で、でもそれなりに厳しくて頼りになりそうです。ってそうじゃなくて！もう、次に会う時どんな顔すればいいの！

第五話〜新たな仲間〜（後書き）

書き溜めを修正しながらあげてますが、そろそろ無くなりそうです。というわけで、本作のヒロイン登場です。名前はデックテーマに合いそうな名前を好きなアニメから持ってきました。パクリじゃないですよ。

第六話　縮まる距離と不穏な影　（前書き）

やっと調整が終わって投稿できました。

今回は月一試験前のお話です。

デュエルはありません。

第六話 縮まる距離と不穏な影

SIDE 黒兎

翔の偽ラブレター及び覗き事件もまだ記憶に新しい今日この頃。

「つい一週間前の事っすからね。後覗きはしてないっす。」

いい加減授業に面倒臭い気持ちを抱き、サボりを考える頃ですよ。

「ああ、わかるわかる。デュエルは強けりゃそれでいいと思うんだよな。」

どのみち出席日数が関係ないオシリスレッド。そっだ、授業をサボるっ！

「おお！それいいな黒兎！」

「ダメっすよアニキ。ちゃんと出席しないと昇格させてもらえないっす。」

「ええー。昇格なんていいよ。俺はここが気に入ったし、赤は好きな色だし。」

「皆がクロ兄の独り言に反応するようになったね。後、クロ兄、サボりはダメだよ。」

む、リンが言うなら出てやるっ。リンを悲しませるのはよくない。しかし面倒だ。

「あーあ。授業が全部実技だったらな。」

「わかるぜ黒兎。それならワクワクするよな。」

「えー、強い人と当たったらどうするのさ。」

「大丈夫だろ。基本的に同じ寮通しでやるんだし。」

おかげで実技はほとんど十代と。え、友達が少ないわけじゃないよ。本当だよ。ただ十代より強いやつがないからだよ。

「むしろそっちの方がいいぜ。その方が面白そうじゃん。」

「アニキや黒兎君は強いからそう言えるんすよ。」

そんなことを言うが翔。たまにレッドやイエローに絡んでるブルー生とデュエルしても、あんまり強くないぞ。

「だったら翔も強くなるためにも実技をやるしかないって。」

「そうだな。差し当たって大事なのは実技以外をどうするかだが。」

「話題のずらし方がおかしいっすよ!？」

「そつだ黒兎! 瞼に目を描いてくれよ!」

よしてきた十代!

「クロ兄はちゃんと起きててよー。」

俺はどうしよう。

ただ今授業中です。十代は瞼の目を活かして座ったまま眠っている。翔は真面目にノートをとってるね。俺？膝の上にリンを乗せて遊んでますよ。

「クロ兄、授業聞かなきゃダメだよ。エへへへ／／／」

ナデナデナデナデ

うん。リンもご機嫌、俺も幸せ。最高の状態だね。ちなみに授業科目は錬金術。転生前にはなかった科目だから面白いんだが意味あるのか？そんなことを考えながら、リンと戯れること数十分。

「は！クロ兄、撫でてごまかしちゃダメだよ。授業は聞いてたの？」

君のマスターをなめるなよ、リン。クロノスの授業ならともかく、面白そうな授業はちゃんとノートをとっているとも。

「あ、ちゃんと書いてある。よかった。」

リンも安心したところで、授業終了の鐘がなる。

「では今日の授業はここまでなのニヤ。来週は月1試験だからちゃんと準備しておくのニヤ。」

それを告げると大徳寺先生は教室を出ていく。そうか、来週は月1試験か。

「ああ、ついにこの日が。黒兎君どうしよう。」

「まあなんとかなるだろ。それより十代は本当に寝っぱなしだな。」

「昨日は夜遅くまでデッキをいじってたからね。僕は寝ちゃったけど何度も調整しては回してみたらいいよ。」

相変わらずのデュエル馬鹿。それで授業寝てたらダメだろう。

「しょうがない。放課後にでも十代に俺が呼んでたと伝えてくれ。ノートくらいは貸してやる。」

「うん、伝えるよ。そういえば黒兎君って、結構面倒見がいいよね。」

そうだろうか。自分で意識したことはないが。

「ま、せっかく出来た友達だ。学校のシステムなんかで失いたくないだけだ。」

さて。購買でも行くか。

移動中

うーむ、やはりレッド寮の食事量では腹がへるな。ドローパンでも買うか。

「リンは何か欲しいか？」

「ドローパンが美味しそうならそれを分けて。そうじゃなかったらいいよ。」

ならば非ともうまそうなのを引き当てなくてわ。

「よし、任しとけ。トメさん、ドローパン1つ!」

「はいはい。好きなのを引いてちょうだい。」

よし、行くぜ!

「俺のターン、ドロー!」

手をパンの山に突っ込み、1つ掴んで引き抜く。なーにかな、なーにかな。今回はコレ!

具無しパン(カード付き)

「む。カードは嬉しいが。リン、食べるか?」

「うん。分けて分けて。」

パンを2つに分けて片方をリンに渡す。嬉しそうに食べてもらえて俺も嬉しいよ。さて、当たったカードはつと。うん?使いづらいかもしれないけど俺のデッキと相性よくないか?

「何をパン持ちながら難しい顔してるの?」

「ん、咲夜か。いやなに、ドローパン買ったらカードが付いててな。使い道を考えてたんだ。」

「ふーんどれどれ。何コレ?使えるの?」

この世界に使えないカードなんてないんだ。それより咲夜さん。カードを見るためにはいえ近すぎませんか？何やらしい香りが。

「ま、私には合わないかな。それ、よ、り、リンちゃん！美味しそうな食べてるわね。私にも分けて！」

「ダメ！これはクロ兄に分けてもらったパンだもん！」

そんなに焦って食べるのどに詰まるぞ。

「あー咲夜。パンが食いたいなら俺のをやる。だからリンにたかな。」

咲夜に俺のパンを差し出す。するとみるみる咲夜が赤くなる。どうしたんだ？

「だ、男子の食べかけを女子に渡すなんて何考えてるの！」

ああ、そういうことか。

「それなら大丈夫だ。リンにあげるために半分にしただけで口はつけてない。」

「ま、まあせつかくだからもらってあげても…って食べかけじゃないの！？」

「ああ、だから安心して食べばいい。」

「そ、そう。ありがとう。」

なんだか少しがっかりしてるような。リンと同じものだし喜ぶと思っただが。

「咲夜。せつかくのチャンスだったのにね。」

「ソル！何言ってるの！」

「おう。ソル。元気か？」

「どうも。おかげさまで元気よ、黒兎。」

咲夜のそばにソルが姿を現す。

「ところでチャンスって何がだ？」

「なんでもない！ソルが適当に言っただけ！」

「そういうことにしといて。」

何だか気になるな。まあ追求はしないけど。

「ところで、俺に何か用があつたんじゃないのか？」

「そうだった。もうすぐ月1試験だけど、勉強とかどうなの？」

さすがオベリスクブルー。もう試験のことを考えてるのか。

「どつって言っても特に何も。昇格に興味はないし、前日にちょっとやる位か。知識でもブルー生に負ける気はしないしな。」

実力は言うに及ばずだ。

「まあこの間のクロノス先生の授業では随分やってたわね。」

「筆記の解答欄ミスと遅刻がなければ学年トップだろうな。」

胸を張って言い切る。

「すごい自信ね。」

「差し当たって考えるのは実技をどうするかだな。」

「それこそ大丈夫でしょう。ブルーで有名よ。天川黒兎っていうレツドがブルーの邪魔をするって。正義の味方気取り？」

名乗った覚えも気取った覚えもねーよ。

「まあせっかく色んなやつが見るんだ。エンターテイメントとして利用してやる。」

「真面目にやりなさいよ。でも、それじゃあ一緒に勉強なんて無理かな。」

「へ？」

「この間の授業で知識があるのは知ってたし、せっかくだから一緒に勉強したかったの。」

「明日香達は？」

「明日香達は、明日香がももえとジユンコに教えてばかりで混ぜりづらいのよ。」

確かにあの3人はまた別種の仲のよさだな。

「せっかく1年ぶりに再会出来たんだし、もっと仲良くなりたかったんだけどな。」

「なら一緒にやるか？まあ十代達の勉強見ないといけないからレックス寮に来てもらうけど。」

というかあの2人の世話は1人じゃ辛いものがある。

「いいの？じゃあ今日の放課後からいい？」

「ああ。かまわないぞ。じゃあ放課後に準備出来たら俺の部屋に来てくれ。1人で3人部屋を使ってるからスペースはあるから。部屋の位置は2階の1番奥だ。」

「OK。それじゃあお邪魔させてもらうわね。じゃあ放課後にね。」

そういうと咲夜は歩いていった。なんだか嬉しそうだな。そんなに勉強相手が欲しかったのか？

「あの人が部屋に。私とクロ兄を守りぬかないと。」

リンはなにやらぶつぶつ言ってる。咲夜が部屋に来るから怯えるのかな。ソルに応援を頼むか。それにしても咲夜、いい匂いだったな／＼／

S I D E ㄱ 咲夜 ㄱ

「やったわね、咲夜。」

「ソル。ええ、これで1つ前進よ。」

なんとか黒兎の部屋に行く口実を得た。あの日明日香に言われてから、黒兎を捜しちゃう自分に気付いた。やっぱり好きなんだ。あの1年前からずっと。それを自覚してからはとにかく悶えたものだわでも今日見つけて、気がついたら声をかけてた。変なところなかったよね。

「まあ私からすると、普段よりリンちゃんに声をかけるのが遅かったし、テンションもあんまりだったから、咲夜の中で順位が変わったのは丸わかりよ。」

「ソルにだけならかまわないわ。それよりこれからよ。」

このテスト期間に私が黒兎といるのを自然な事にしないと。後、黒兎の部屋に出入りすることも。

「頑張りなさい。咲夜。」

絶対逃がさないからね！黒兎。

S I D E ㄱ ㄱ ㄱ ㄱ

な、なんなんだ！？あのオシリスレッド、咲夜君と親しげに話すばかりか一緒に勉強の約束まで！？くそ、なんとかしなければ。まずはクロノス先生に相談だ。試験では覚悟しろよ、天川黒兎！

一週間後

SIDE 咲夜

ただ今黒兎の部屋にきています。月1試験を明日に控え、部屋は喧騒に包まれています。

「黒兎君、ここを教えてほしいっす。」

「どれどれ。ああここはこのページを参考にすれば、って十代！ペン持ったまま寝るな！」

「こんなのやったら眠くなるぜ。黒兎デュエルしようぜ。」

「ダメだ！ここ一週間そればかりじゃないか！」「えー。いつもは相手してくれたじゃないか。」

「さすがに明日だぞ。勉強しないとダメだ。」

いつもは十代とデュエルを始めてしまふ黒兎も今日ばかりは真面目です。

「いいって。俺は筆記は捨ててるんだ。実技をミスしないように手伝ってくれ。」

「翔はそうはいかないって言うてるんだ。ちょっとは筆記もやるんだ。」

今、遠回しに自分も筆記はどうでもいいみたいに言わなかった？

「相変わらず、ムードのかけらもないわね。」

「ソル。」

「せつかくのチャンスだったのにな。」

そうなのだ。この一週間、黒兎は十代と翔にかかりきりで、来た意味があまりない気がする。

「こんなはずじゃなかったのにな。」

もうちょっと、私にもかまってほしい。

「まったく。咲夜スマンな。」

「へ?」

しまった！考え事してて聞いてない。

「十代に俺も悪ノリしてたからな。勉強出来てないだろ。」

「そ、そうよ。せつかく来たのに意味がないわ。」

「本当にスマン。お詫びとってはなんだが、今日はお前が満足するまで付き合わせてくれ。」

へ！？付き合わせて！

「咲夜、落ち着いて。」

あ、そうよね。えっとまだ学校が終わったばかり。夜まではまだ時

間がある。いずれは十代や翔は帰るだろうから、黒兎の部屋に夜中に二人きり…

「だ、ダメよ黒兎。まだ私達学生だし、そういうのは早いっていうか。で、でも黒兎がどうしても言うなら、恥ずかしいけど私も嫌じゃないけど…」

「おーい。咲夜ー。なんだって？嫌なのか？」

「へ！？あ、違う違う！今の無し！無しったら無し！」

き、聞かれた！？

「んじゃどつち何だ？咲夜が嫌じゃなきゃ勉強とことん付き合っぞ。」

「そ、そうね。じゃあお願いしようかしら。」

「了解だ。なら十代と翔を先に片付けるから待っててくれ。」

そういうと黒兎は戻っていく。やった！二人きりの約束ゲット！

「やったじゃない咲夜。」

「ええ。思いがけない収穫。」

これを絶対モノにしないと！

「ほら。十代ももう少しだ。頑張れ！」

「俺はもういいって。」

「アニキ、もう少し頑張ろうよ。」

「あ、翔また間違えてるぞ。ここ見てみる。」

「あ、本当だ！ありがとう。」

黒鬼が中心になって勉強が進んでる。あ、十代がまた倒れた。

コンコンコン

「あ、はい。どうぞ。」

「失礼するんだな。」

「えっと、誰？」

誰だろう？レッドの生徒なんだろうけど。何て言つか大きなコアラみたい。

「あ、隼人君。」

「翔。知り合いか？」

「うん。僕達のルームメイトの前田隼人君。」

「よろしくなんだな。」

「ああ。俺は天川黒鬼。黒鬼でいいぜ。よろしくな。隼人でいいか

な。」

「かまわないんだな。十代、翔、そろそろ飯の時間なんだな。」

「待ってました！勉強したら腹へったぜ。」

「アニキはほとんど寝てたじゃないっすか。」

「十代、翔。範囲は全部やったから、飯食ったら自分でやってみるよ。」

「サンキューな、黒兎！」

「黒兎君、ありがとうっす。」

十代と翔が帰っていく。私の本番はこれからね！

「さて、咲夜も夕飯のために一回戻るか？」

「そうね。一回戻って色々済ませてから来ようかな。」

せつかく二人きりになるのだ。準備を欠かしたくない。

「んじゃそれぞれ準備が済んだら再開ってことで。男の俺の方が準備早いだろうけど焦らなくていいからな。」

「わかった。じゃあ後で。」

なるべく長く一緒にいたいもの。早く準備してこよう！

SIDE 黒兎

さて、飯も食ったし風呂も入ったし。後は咲夜が来るのを待つばかり。そういえば筆記は置いておくとして、実技をどうしようか。アカデミアは、実技最高責任者のクロノスが古代の機械デッキだからか、パワーデッキが強いみたいないメージがある。強いイメージは脅迫概念となつて周りも従わせるもんだから、だいたいの相手は同じ対策でいい。だがそれゆえに、ほとんどそれだとする決めつけは違った時のリスクがでかい。

「結局、いつも通りがいつてことかね。」

結果論だが、自分のデッキってのをしっかり確立している十代は強いし、いくつものデッキに流れていく今の万条目や、複数を使い分ける三沢はいまひとつだ。

「クロ兄。私もファイアも頑張るから、あんまり浮気をしないでくれる?」

「浮気つて。俺のメインはリンやファイア達だぞ。」

「でもこないだは違うデッキ使った!」

「あれは、作つたばかりでディスクに入れっぱなしだったのと、咲夜の前にリンを出さない方がいいと思っただけさ。」

ふむ。どうやらリンは違うデッキを使ったことがお気に召さなかったらしいな。

「心配するな。友達とのデュエルならまだしも、試験みたいな大事なデュエルはリン達って決めてるから。」

「出来ればいつでも私を選んでほしいの。」

「うーん。でも、この間リンにも言ったたる。泣いてるカードを助けたいって。全てのカードの声は聞こえないけど、使われてこそ喜ぶと思っただけど。」

「そう言われると返す言葉もないけど。」

「大丈夫。リン達をほかって別のデッキばかり使うことは無い。だから、そばにいてくれよ。」

落ち着かせるためにリンの頭をナデナデ。

「ん／＼わかった。そばにいる。絶対に離さない。」

そついうとリンは俺の体に抱き着き、胸に頭を預けてくる。

「俺はどこにもいかないよ。」

安心してくれたかな？

コンコンコン

「お待たせ。って、リンちゃんどうかしたの！？黒兔に何かされたとか？」

「おお、咲夜。いきなりご挨拶だな。まあ何かしたっちゃしたのかな。」

「そんな。リンちゃん、そんな奴ほっておいて私のところに！」

「いや。絶対離れない。」

リンがますます抱き着いてくる。む、少し苦しい。

「まあなんだ。この間のデュエルでリン達を使わなかったのがお気に召さなかったらしい。」

「そうよ！なんであの時あんな可愛いげのないデッキを使ったのよ！？」

「そうやってお前が暴走するからだ！」

リンは絶対に守ってみせる！

「ひどい。いいじゃない少しくらい。」

「はいはいあんた達。目的忘れてないでしょうね？」

「そうだ。ソルの言う通りだ。咲夜。筆記か？実技か？どっちも手伝うぜ。」

危ない。すっかり忘れてた。

「あ、そうだった。んー黒鬼もあたしもなんだかんだ筆記いいじゃない。」

「まあ、そうだな。」

「で、実技でもいいけどこんな時間だし、試験前に手のうちとらずのもどつかと思つた。」

「ふむ。じゃあ何をする？」

「試験前に緊張したくないし、雑談でもしない？」

いい笑顔で提案してきた。まあ俺の答は決まっている。

「いいなそれ！」

「この二人、なんのために集まったのかな？」

「まあ、こつこつ二人だし。」

精霊・Sが何か言っている。あーあー聞こえないな。

「それで、さつきから気になってたんだけど。」

「ん？」

「なんでリンちゃんに、黒鬼はそこまで想われてるの？」

咲夜がリンを指差し尋ねる。人を指差すな。

「違うデツキー一度使っただけでヤキモチだなんて、羨ましい！」

「別に普通じゃないのか？咲夜とソルだって随分信頼しあってるだろつ。」

「まあ私達はね。互いに求めあったみたいなものだし。」

気になる言い方だが追求してほしくない空気だな。

「リン。確か俺と出会った時から好意的だったよな。精霊とマスタ
ーだからだけか？」

「それだけで人一倍想うなんて無理だよ。クロ兄は覚えてないかな
？私を見つけてくれた日。」

それは転生前か？それなら咲夜に悟られないようにしないと。

「確かリンを見つけたのは、中古カードショップだよな。」

「え!？」

「うん。私は一度売られて、その後クロ兄に見つけてもらったんだ。
」

いい思い出じゃないよな。リン大丈夫か？

「ん。クロ兄、心配しないで。クロ兄のおかげでそんなに辛くない
よ。」

リンが俺の腰に抱き着いて笑ってくれる。俺の方が心配されたかな？

「そっか。えっと、さっきも言ったけどリンは中古で見つけてな。
あの時はデッキに使えるようなカードをぼんやり探しててな。」

「私はレア度も低いカードだから、1枚でいくらじゃなくて、たく

さんのカードの中から一束いくらってなってるね。しかもなかなか手に取ってもらえなくて、どんだんカードの山の下に入っちゃって」

「んで、使えそうなカードがないかその山を探してて。あの頃から人が使わないカードを使おうって考えだったから、全部見てたんだよな。2時間位だったか？」

「よくそんな時間までねばれたわね。」

え？普通それくらい探さない？

「初めて手に取ってくれたのがクロ兄で。しかもそのまま買ってくれたからすごく嬉しかった。」

「なにか使えそうだと思っただし、下の方にあつたから、俺を待っていてくれたのかなってな。」

リンの頭をナデナデ。

「エへへ／／／私は自分の姿を自覚してるから、鑑賞用も覚悟してたんだ。でもクロ兄は私をデッキに入れて、しかも戦略の一角を任せってくれて。」

「ファイアとの相性もよかったしな。効果も色々出来そうで絶対使いたかったんだ。」

リンを膝の上で抱きしめる。頭の上に顎ものせちゃったり。

「クロ兄／／／え、えっと、それでね。クロ兄が私を大切に使って

くれて、相棒って言うてくれたのが嬉しくて。精霊になってクロ兄の前に出れた時はもうなんて言えばいいか／＼」

リンは恥ずかしくなったのか俺の胸に顔を埋める。

「リン。俺のところに来てくれてありがとう。」

「クロ兄／＼／＼」

ナデナデナデナデナデナデナデナデナデ

「咲夜、まあそんな感じだ。」

「ふん。」

あれ？なんか機嫌悪くない？

「なるほどね。リンちゃんの運命の相手なわけね。黒兎は。」

「あの、咲夜さん？」

「あら。もういい時間。そろそろ帰るね。明日はお互い頑張りましよう。おやすみ。」

ガチャ。

バタン！

な、なんだっただ？

SIDE 咲夜

「思った以上に二人の絆は強いわね。」

「ええ。今の黒兎はリンちゃんが1番大事。私が黒兎の隣になるのは難しいわ。」

「なんで雑談にあんな話題を選んじゃったのかな。距離を縮めるところか差を感じた。」

「あーあ。明日からの試験どうしよう。」

「こんなんでもとも出来るのかな。」

「タッタッタ」

「咲夜！」

「!?!」

「今の声!?!」

「よかった。そんな遠くに行ってなかったか。」

「黒兎。なんで?」

「いや、なんか怒らせたみたいだし、せめて寮まで送ろうかと。」

「リンちゃんは?」

「もう寝るようになってきた。今は一人で帰る咲夜が心配だ。」

「ソルもいるじゃない。」

「見えない人には意味ない。いいから送らせてくれ。」

「か、勝手にすれば。」

どうしよう。嬉しくて頬が緩む。ブルー寮までどうしよう!?

SIDE(???)

よし。これで明日の試験は問題ないだろう。クロノス先生に頼んで生気な天川にあててもらったからな。万が一がないようにしないと
な。

「!?!」

あれは咲夜君!隣に誰か…天川!?!こんな時間に何故?しかもなにやら楽しそうではないか!?

「おのれ天川。君は咲夜君の隣は相応しくない。」

明日の試験は覚悟しておけ!

第六話　縮まる距離と不穏な影　（後書き）

次回はデュエルがありますよ。

???は次回明らかになります。

第七話　ストーリーカー退治（前書き）

今回は月1試験デュエル回です。

作中に少しだけ試験問題を作ったので、考えてみてください。

解答は後書きで

第七話　ストーリーカー退治

SIDE　黒兎

今日は月1試験当日。この日のために十代とデュエルしたり、翔に教えたり、咲夜と雑談したり。

「特に何もしてないよね。」

元の世界では病的なまでの遊戯王オタ。多少の問題なら解いてみせる。かつてTFではオリカ以外は完璧に解いてきた實力を見せてやる！

「クロ兄ってあのゲームやたら女の子の好感度上げてたよね。」

さて、ただ今の時刻は試験開始1時間前。朝食も取って準備は完了。余裕を持って教室に入ろうと思うと、レッド寮は30分前位がぎりぎりだろうか。

「入試もそうだったけど、またフラグのために遅刻する気だよね。もう何も言わないよ。」

「偉いぞリン。その通りだ。よくわかってるな。」

「素直に喜びたくないよ。」

今回も十代の遅刻イベントがあるからな。ブルーに目をつけてもらうためにも上手いことやらないと。

「とりあえずデッキの確認でもするか。」

「私達だよね？」

「当たり前だろ。」

こないだ言ったけどまだ不安なのかな？

しばらくお待ち下さい

「うーん。こないだドロップンで当てたカードやっぱり抜くか？でも一回使ってみたいな。」

「クロ兄。そろそろじゃないかな？」

どれどれ。お、試験開始直前か。十代も飛び出す頃だな。

「よし。じゃあ準備してスタンバイだ。」

ドアのぶを握り、隣室の壁に耳をあてる。

「うわー！？寝坊した！翔のやつ起こしてくれよ！」

キタ！

「鞆よし。デッキよし。行くぜ相棒！」

うっし俺も！

「「急げー！」」

タイミングバツチリ！

「おう。十代おはよう。」

「おはようございます。十代さん。」

「黒兎、リン！黒兎も寝坊したのか！？」

「見ての通りだ！」

「入試以来だな。また二人で走ろうぜ！」

確かにあの日以来だな。あの時は合格出来たわけだし、二人で遅刻はげんがいいか。

「あ！？」

「どうした十代？」

「俺ああいうの弱いんだよ。」

十代の目線を追うと、トメさんが坂道でトラックを押し上げられず困っている。

「俺、助けてくる！」

「十代！俺も手伝うぜ！」

進路をずらしてトメさんのところに。

「あんたたち。もう試験始まつてるでしょう。大丈夫だから行きな。」

「困ってる人はほっとけないってば。」

「それに俺達なら筆記は心配いらないうて。」

「実技以外やる気ないだけだよな。」

その通り！

「ありがとうね。じゃあ一気にいくよ。」

「『『『セーの！』『』『』」

少しずつトラックが坂をのぼる。よし、いいペースだ。もう少し着いた！

「ふう。もう大丈夫だよ。二人ともありがとう。」

「礼なんていいって。」

「人として当然ですよ。」

トメさんは律義にも俺達二人に頭を下げる。

「さ、早くいきな。試験は遅刻でも受けられるはずだよ。」

「はい。行くぞ十代。」

「あ。待ってくれよ。」

「頑張るんだよー。」

トメさんの声を背にアカデミアを目指す。トメさんのためにも筆記
ボイコットはやめよう。

「もともと駄目だよ!?!」

最近リンはツツコミが多いな。

「黒兎!アカデミア見えてきた!」

やっとか。十代と二人で玄関に走り込む。教室の扉、見えた!

「やっと着いたぜ。」

「すみません。天川黒兎、遅くなりました。」

十代と用紙を受け取り席にむかう。さて、やりますか。

以下の問いに答えよ。

問1: モンスター『科学特殊兵』の属性・種族を答えよ

問2: 特定の組み合わせでしか融合召喚出来ないモンスターを、
『融合呪印生物』の効果で特殊召喚可能か

問4: 「ワーム」と名のついた爬虫類族モンスターを4種類以上
融合素材にすることで『ワームゼロ』が得られる効果は何か

以下略

ふむ。以外と難しいか？どれ、十代は…もう寝てる！？嘘！？着いてから3分位しか経ってないぞ！

「筆記捨ててるってマジだったのか。」

「クロ兄はちゃんとやるんだよ。」

わかってますよ。

試験終了

終わったー。入試より難しかったな。さすがになめすぎたか？

「大丈夫なの？クロ兄。」

「まあ大丈夫さ。思ったより凝った問題だったから驚いただけ。ちやんと出来てるよ。」

てか、入試問題は社長の嫁関連がほとんどだったし。

「やっと終わったよ。黒兎君は出来たっすか？」

「翔。まあぼちぼちだ。そついうお前こそどうなんだ？随分頑張っていたじゃないか。」

「黒兎君のおかげでいつもより出来たっす。」

それはなにより。

「それよりも十代だ。」

「もうアニキってば。起きるっすよ。」

「んあ。筆記は終わったか？」

とっの昔にな。

「十代。遅刻しておいて寝るだなんて何考えてるの。」

「明日香さんの言う通りよ。やる気あるの？」

「少しは真面目になった方がいいですわよ。」

「黒兎も遅刻だなんて何をしてるの。」

おお。綺麗どころがお揃いで。

「十代。そんな状態で大丈夫なの？」

「心配ないぜ明日香。俺の実技も見てから言ったくれ。」

「翔さん。筆記はどうでしたか？上手くいきましたか？」

「ももえさん。黒兎君のおかげで何とか出来たっす。」

「あんたの調子が悪いとこの前の償いをさせ辛いしね。」

「ジュンコさん。償いはちゃんとやるっすよ。」

「黒兎は試験どうだったの？昨日付き合わせた身としては心苦しいんだけど。」

「大丈夫だつて。今回の遅刻に咲夜は関係ないよ。試験も遅刻したなりにできたしな。」

「そうですよ。クロ兄の遅刻は確信犯なので心配するだけ無駄です。」

全員試験の息抜きも兼ねてか、会話も弾む。

「ナゼミンナオンナノコトナカヨシナンダ？」

「うお！？誰だ！？」

「やあ、お揃いで。皆は新しいパックを買いに行かないのか？」

「お前は！？…誰だっけ？」

「あ、三沢君。」

「そうだ三沢だ。何話ぶりに登場したんだ？すっかり忘れてたぜ。空気が早いな！？」

「おう、三沢。新しいパックがなんだつて？」

「なんでも新しいパックが入荷したらしいぞ。」

「なんだって！なら早く行かないと売切れちゃう！行くぞ翔！」

「待つてよアニキ！」

十代が翔を連れて走っていく。あ、翔がこけた。

「君達は行かないのか？」

「いきなり新しいカード加えるのもな。それに他の奴らも買うだろうから満足いくのは手に入らないさ。」

「右に同じく。それに試験で新しいカードを入れるのは危険だし、一緒に闘ってきたデッキにも悪い。」

「私も似たような理由だけど。あなたたちはいいの？」

「明日香さんが行かないのでしたら。」

「でも行って翔君に何か奢らせるのはいいかも。」「ももえ、私は気にしないでいいわ。ジュンコ、ほどほどにしておきなさい。」

「どうせお前も同じだろう。三沢。」

「黒兎。まあな。俺の方程式は完成している。」
「方程式ね。」

「それよりも黒兎。」

「ん？」

「十代や翔といい、お前達いつの間に関女達と知り合いになっただ？」

突然何を言いだすんだこいつ？

「俺と咲夜はもともと知り合いだ。入学前にちよつとな。明日香達とは、まあ色々あつてな。」

「そうか。いや、変なことを聞いてすまなかつた。」

「いったいどうしたんだ？」

「お。十代達も帰つてきたみたいだぞ。」

三沢が指差す方からは我らが十代と翔。

「おーい。手に入ったのか？」

「黒兎君。それが誰かが買い占めていったみたいで売切れだったんすよ。」

「そつえば原作でクロノスが買い占めてたな。」

「だけどな。俺と黒兎のためにトメさんが2パック取つておいてくれたぜ。今日のお礼だつて。ほい、黒兎。」

「なんと俺にまで。今度お礼しに行こう。」

「ねえ黒兎。せつかくなんだし開けなさいよ。」

咲夜さん。目が狩人ですよ。咲夜に相性よさそうだったらあげるって！

「んじゃ開けるぞ。」

幻獣ロックリザード
幻獣ワイルドホーン
幻獣クロスウイング
幻獣サンダーペガス
幻獣の角

.....なあにこれえ。

「組めと!?!」

「ん、私に使えるのではないか。でもよかったじゃない。まとまって手に入って。せっかくだしそれでデッキ組んで試験受けたら。」

まあ組むけどさ。でも。

「クロ兄。」

やっぱりリンが涙目！

「大丈夫。せっかく出会えたからデッキは組むけど、試験じゃ使わないよ。約束だもんな。」

頭をナデナデ。

「うん。大事な時は私達だよね。」

安心してくれたかな。

「黒兔。いいの当たったのか？俺は凄いのが手に入ったぜ。」

十代は確か進化する翼を手に入れたんだっけ。

「俺も面白いのが当たったぜ。トメさんに感謝だな。」

さて、実技に備えて飯にしますか。

昼食時の会話

「黒兔君、手作り弁当っすか！？凄いつす！」

「すげー！黒兔、唐揚げもらうぜ！」

「こら！勝手に取るな！」

「うめー！」

「本当に美味しそう。私ももらうね。黒兔。」

「咲夜まで！？」

「あ、じゃあ私も。」

「私ももらい。」

「私もいただきますわ。」

「お前ら！俺の昼飯ー！」

さて、ただ今実技会場です。え？何があった？ただの楽しい昼食会だよ。

「で、なんで俺と十代の前にブルー生徒を連れて立ってるんですか。クロノス先生。」

確か月1試験も授業と同じで、同じ寮同士じゃなかったか。

「シニョール達は、レッド寮の生徒でありながら、ブルー生とのデュエルに勝つ程の実力を持っていますーノ。」

「あ、やっぱり。」

「十代、話は終わってない。」

「そんな二人がレッド生とデュエルするのは実力差から平等じゃないノーネ。」

「それじゃあ俺と十代でデュエルすればいいんじゃない。」

「黒兎も口挟んでるじゃん。」

「そして、ブルー生の中から、あなたたちに負けた生徒の雪辱を晴らすために、あなたたちとのデュエルを望む生徒がいるノーネ。こ

んな仲間思いな生徒の願いを、聞いてあげるのが教師の勤めナノネ。」

ただあんたが、俺達がブルーに負ける姿を見たいだけだろ。

「そこで、シニョール十代には、シニョール万丈目が、シニョール天川には、シニョール炎上が相手をするノーネ。」

「お。今度こそ決着をつけようぜ。万丈目。」

「さんだ！ふん。あの時預けた勝ちを回収させてもらう。」

「はあ。まあよろしく。」

「……」

何故だろう。相手の視線に殺意を感じる。

「えっと。あんたと何かありましたっけ？」

「……んだ。」

「は？」

「君と咲夜君はどういう関係なんだ！」

何この人。

「二人で夜出歩いて、さっきは一緒にお昼を取っていたではないか！ いったい貴様は咲夜君のなんなんだ！」

「何って、ただの友達だよ。」

グサツ！

おや？どこから何か刺さる音がしたな。

「咲夜！しっかりして！」

「大丈夫。わかっていた。」

咲夜、どうかしたのか？あ、そうだ！

「咲夜！」

「ふえ。あ、な、何？」

「こいつにお前との関係聞かれたんだけど、こいつ何？」

「何とはなんだ！」

「わかんない！知らない人！」

「な！？知らないなんてことはないだろう！炎上海里！共に中等部から学び合ったじゃないか！」

「だから知らないって！」

ふむ。どうやら親しい間柄ってわけでもなさそうだ。

「んで、用件はなんだ。知らない人。」

「うるさい！とにかく俺が言いたいのは、貴様のような落ちこぼれは咲夜君に相応しくないということだ！」

「相応しいも何も付き合う相手くらい咲夜の自由だろう。」

「っ、付き合う／＼／」

「貴様まだ言うか！ならばデュエルで身の程を教えてやる。俺が勝ったら咲夜君に近付くのをやめてもらう！咲夜君に相応しいのは俺のようなエリートだ！」

なんだ。結局ストーカーの逆恨みか。

「いいぜ。やってみろよ。俺から友達を奪おうってなら容赦はしない。」

「ふん。ならばやってやる。」

「デュエル！」

さて、俺から友達を奪おうっていうストーカーを叩き潰すか。

先攻 炎上

手札 6枚

「先攻は俺だ！ドロー！」どんなデッキかな？

「まずは永続魔法『不死式冥界砲』を発動。そして手札から、『ス

カル・コンダクター』の効果発動。」

「ってことはアンデットか。」

「手札からこのカードを墓地へ送り、攻撃力の合計が2000になるように手札からアンデット族モンスターを2体まで特殊召喚する。『バーニング・スカルヘッド』を2体特殊召喚だ！」

骸骨の火の玉が2個、指揮者のような亡霊の後ろから飛び出してくる。

バーニング・スカルヘッド ATK1000

バーニング・スカルヘッド ATK1000

「この瞬間、不死式冥界砲の効果発動！自分の場にアンデット族モンスターが特殊召喚された時、相手のライフに800ダメージを与える。不死式冥界砲、てー！」

巨大な青白い骸骨が俺に向かって飛んでくる！怖！

黒兎 ライフ4000 3200

「さらに、バーニング・スカルヘッドは手札から特殊召喚に成功した時、相手ライフに1000ダメージを与える。バーニング・スカルヘッド、てー！」

燃える骸骨2体まで、俺に突っ込んでくる！

黒兎 ライフ3200 2200 1200

「まだまだ！自分の場に炎属性モンスターが表側表示で存在する時、このカードは手札から特殊召喚できる。燃え上がれ、我が嫉妬の炎。」
『怨念の魂 業火』！」

壺から噴き上がる巨大な炎。背後に嫉妬の文字が見える。ストーカ
ーめ。

怨念の魂 業火 ATK2200

「この方法で業火を特殊召喚した時、自分の場に表側表示で存在する炎属性モンスターを1体破壊する。俺はバーニング・スカルヘッドを破壊。」

バーニング・スカルヘッドが業火の壺に飛び込み、炎の勢いが増していく。

「最後に我が嫉妬の炎を操り、貴様に引導を渡すモンスターを召喚する。業火とスカルヘッドを生け贄に、『スカル・フレイム』を召喚！」

2体目のスカルヘッドが業火の中に飛び込み、炎の勢いが増す。その炎を纏いながら、ローブに身を包んだ骸骨が姿を表す。

スカル・フレイム ATK2600

「俺はこれでターンを終了する。そして教えてやろう。スカル・フレイムはドローの代わりに墓地のスカルヘッドを手札に加えさせてくれる。さらに、1ターンに1度手札からスカルヘッドを特殊召喚することができる。次のターン、貴様は終わりだ！」

手札0枚

後攻 黒兎

手札6枚

たいした火力だったぜ。だが、決めきれなかったことを悔やめ！

「俺のターン、ドロー！」

今日の俺は最強だ。誰にも負ける気がしねえ。見るよこの手札、私の勝ちじゃないか！

「自慢の炎も俺にとっては焚火と変わんねえよ。」

「なんだと！」

「いくぞ。まずは自分の場に、トーチトークンを2体、攻撃表示で特殊召喚し、相手の場に『トーチ・ゴーレム』を特殊召喚。」

相手の場に巨大なゴーレムが、俺の場にそれを小さくしたゴーレムが2体現れる。

黒兎

トーチトークン ATK0DEF0

トーチトークン ATK0DEF0

炎上

トーチ・ゴーレム ATK3000DEF300

「おいおい。俺の場に攻撃力3000をくれて、自分の場には攻撃力0が2体!?しかも通常召喚出来なくなるから生け贄にも出来ない。そんなカードよく使うな。オシリスレッドのやることはわからんぜ。」

周りからも「あいつ何がしたいんだ?」だの、「勝負を捨てたのか?」だの好き勝手言ってくれる。こいつがドロパンで当たったカード。確かに単体なら使いようがないが。

「結果を見てから言うんだな。通常召喚はダメでも特殊召喚はできる。相手の場のモンスター2体を生け贄に、『溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム』を特殊召喚。」

スカル・フレイムとトーチ・ゴーレムを飲み込むように、溶岩の塊が湧いてくる。そして中から現れた檻に相手は捕われる。

溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム ATK3000

「なんだこりゃ!?おい、出しやがれ!」

「心配しなくてもすぐに出してやる。俺は場のトーチトークン2体と、墓地のトーチ・ゴーレムを除外し、こいつを特殊召喚する。この場を取り囲み、制圧しろ!THEアトモスファイア!」

ファイアがその両翼を広げ舞い上がる。

THE アトモスファイア ATK1000

「クオオオオオ!」

ファイア。あいつが俺達の友達を奪おうとしている。一緒に吹き飛ばすぞ！

「やっと自分の場に出したと思ったら、次は8星で攻撃力1000。やる気あんのか！」

「殺る気MAXですが。アトモスファイアの効果発動！1ターンに1度相手の場の表側表示モンスター1体を装備し、その攻守を得る。ラヴァ・ゴーレムを吸収しら。サクリファイスファイア！」

ファイアの持つスファイアが、ラヴァ・ゴーレムを吸収したことで赤く燃えている。

THE アトモスファイア ATK1000 4000

「さて、檻から出られたわけだが、覚悟はいいな？」

「そ、そんな。俺の場が。」

「俺から友達を奪おうとするとは、死にたい奴だと理解した。」

「す、すまん。悪かった。この通りだ！」

「咲夜に相応しいのはお前だと？不利になった途端平伏すような負け犬根性に相応しいわけねえだろう！」

「ひ、ひい！」

「あいつはな、最高にいい女なんだ！お前なんかに渡すもんか！俺

の怒りの炎だ！アトモスファイアでダイレクトアタック！テンペスト
サンクシヨonz！」

ファイアのスファイアが巨大な火の玉となり炎上を襲う。

「うわあああああ！」

炎上 ライフ4000 0

WIN黒兎

倒れている炎上のもとへ向かう。こいつ、完全に怯えてやがる。

「デュエルに勝ったんだ。文句はないな。俺はこれからも咲夜とい
るぜ。」

「あ、ああ。俺はもう口出ししない。」

さて、制裁は終わったところで十代は。

「さすがだな黒兎。俺も続くぜ。」

「馬鹿な！？炎上が負けただと。ええい、せめて貴様は倒すぞ。十
代！」

「でも万丈目。ここで俺が攻撃力1000以上のモンスターを引け
ば俺の勝ちだぜ。」

「そう都合よく引けるか！」

「でもこの状況で引けるかって、すっげーワクワクするよな。俺のターン、ドロー！」

決着か。

「きたぜ万丈目。フェザーマンを召喚！」

「そんな!?!」

「楽しいデュエルだったぜ。フェザーマンでダイレクトアタック！」

「うあああああ！」

万丈目 ライフ0

「ガツチャ！」

原作通りか。

「やったな。十代。」

「黒兔こそ。」

ステージ上でハイタッチ。会場から割れんばかりの拍手。あ、クロノスの野郎こっそり逃げてやがる！

「素晴らしいデュエルでしたよ。遊城十代君、天川黒兔君。」

おお。久しぶりの鮫島校長。

「デュエルの腕前、諦めない心、そしてデッキを信じる姿勢。全て文句なしです。二人のライエロー昇格を認めます。」

なんと一発昇格とわ。太っ腹だな。でも、俺達の答えは。

「お断りします。」

「黒兎。」

「十代。」

二人、笑い合う。

「何故ですか？」

「俺はレッド寮が気に入ったしね。今更他の寮に行きたくないよ。」

「それに他の寮には友達いないしね。なにより、自分をエリートだと、他人を見下すブルーに近づきたくない。」

「どこでだってデュエルは出来る。だったらここがいいんだ。」

「下から空気を変えてやる。俺が吹き飛ばす。」

十代と頷きあい、会場を出る。特に何も言われないなら大丈夫だろう。

「クロ兄、十代さん。」

「リン。」

「どうした？」

「二人ともかつこよかったですよ。」

なんとまあ。

「「あははははは！」「」

「そつか。かつこよかったか。そりゃよかった。」

「それじゃあかつこよかった二人のデュエルを見せてやるよ。黒兔。帰ってデュエルだ！」

「よっしや！」

SIDE ㄱ 咲夜

「咲夜。しつかり。」

ソルが呼んでる。もうすぐ女子の試験も始まる。いけない。しつかりしないと。

「それにしても黒兔。凄かったわね。」

「あいつは最高にいい女なんだ！でしたっけ。」

「そして、俺はこれからも咲夜というぜ。ですわ。」

「完全に告白よね。」

「誤解だつていう方が難しいですわ。」

「咲夜さんいいな。あんなに素敵なお人がいて。」

もうやめて！私のライフはもう0よ！

「咲夜、大丈夫かしら？」

大丈夫じゃないよ！ああもう、どうすればいいのよ！

SIDE→炎上→

負けた。咲夜君にも情けない姿を晒してしまった。それだけじゃない。全ての女子から軽蔑の視線を受けるだろう。

「何故だ。何故女の子に近づくことすらできない。」

残る学園生活は灰色確定だ。

「炎上海里君だね。先のデュエル見させてもらった。色んな意味で残念だったな。」

「お前は！？」

「だが、そのおかげと言うのもおかしいが、君は我々の同志となる資格を得た。」

「同志？我々？いつたいどういうことだ！？」

「悔しくないか？自分に親しい女子がいないことが。妬ましくないか？一握りの男子は女子と過ごしていることが。」

そつだ。俺はもう望めない青春を謳歌できる奴らが恨めしい。

「悔しいさ。妬ましいさ。恨めしいさ。羨ましいさ！」

「ならば我等の手をとれ。我等は異端審問会。真の平等を目指すもの。他人の幸せを壊すもの。」

そつか。俺はこつすればよかつたのか。もう俺は一人じゃない！

第七話「ストーカー退治」(後書き)

いかがでしたか？

最後にバカテスの某組織が出ましたが、彼らの出番はまだ先です。
以下解答です。

試験解答

- 1 闇属性・戦士族
- 2 1 効果による特殊召喚のため可能
- 4 8 自分の墓地の爬虫類族モンスター1体をゲームから除外する
事で、フィールド上のモンスター1体を墓地へ送る

第八話くそれぞれの思いく（前書き）

月1試験第二弾。今回は咲夜編です。

後半は会話ばかりとなっております。ご了承ください。

第八話　それぞれの思い

SIDE　咲夜

「黒兎と十代は帰った!？」

「うん。試験が終わってすぐに、「デュエルだ!」ってレッド寮に帰ったす。」

先のセリフの真偽を確かめるため明日香達と黒兎を捜しにきたのだが、翔君が言うにはもう帰ったらしい。

「もう。逃げ足が速いわね。」

「私達の試験もありますから、すぐに確かめるのは無理ですわね。残念ですわ。」

明日香達は悔しいのだろうが、無理矢理聞きにこさせられた私は安堵のため息をこぼす。

「残念だったわね。咲夜。」

「べ、別にどうでもいいわよ。それより明日香、そろそろ試験よ。準備しないと。」

「まあね。でもまだ大丈夫よ。黒兎がいらないなら、咲夜。ずばり答えて。あの言葉を聞いてどう思った?」

「へ!?!ど、どっつてそんな。」

「んー？」

まずい。目が語ってる。逃がさないって。私も人事ならそうなるけど。

「種島咲夜さん。試験を始めます。ステージに来て下さい。繰り返しします。種島咲夜さん。試験を始めます。ステージに来て下さい。」

「あ！行かないと！じゃあ頑張ってくるね！」

返事も聞かずに走りだす。帰った時のことも考えないと。

移動中

「種島咲夜です。お願いします。」

ステージに着いて挨拶すると、先生に呼ばれた対戦相手がやってくる。

「ヤマナキキョウ闇凧響よ。さっきは凄かったわね。」

闇凧さんが笑いながら話しかけてくる。さっきの事は忘れて！

「でも彼もひどいわね。」

「え？」

ひどい？黒兎が？

「だってあれだけ言っておいてあなたのデュエル見てないんだもの。」

見回してみたけど、今いないでしょう。」

そうだった。黒兎は私のデュエルを、私を見てくれないんだっ
た。

「いったい何がしたいのかしらね？」

黒兎は、私のことをどう思ってるのかな。

「ま、今は関係ないわね。始めましょうか。」

「あ、はい。」

いけない。集中しないと。

「デュエル！」

先攻 闇風

手札6枚

「私の先攻ね。ドロ！」

集中、集中。

「まずは魔法カード『闇の誘惑』発動。デッキから2枚ドロして、
手札から闇属性モンスター『A・O・Jリーサル・ウェポン』を除
外。」

A・O・J。確か光属性に対して絶大な力を発揮するカテゴリー。

「そして、フィールド魔法『ダークゾーン』発動。闇属性モンスター
の攻撃力を500上げて、守備力を400下げる。」

フィールドが闇の渦に包まれる。遠くで稲光も走る。

「『A・O・Jガラドホルグ』を攻撃表示で召喚。」

A・O・Jガラドホルグ ATK1600 DEF400

「ダークゾーンの効果で攻撃力が上がるわ。」

A・O・Jガラドホルグ ATK1600 ATK2100

「さらにリバーズカードを2枚セットしてターンエンド。」

手札2枚

後攻 咲夜

手札6枚

「私のターン、ドロー！」

まずは相手のモンスターに力を与えるフィールドを壊す！

「速攻魔法『サイクロン』発動。ダークゾーンを破壊。」

ガラドホルグから闇のエネルギーが抜けていく。

A・O・Jガラドホルグ ATK2100 ATK1600

「私は『ジェリービーンズマン』を攻撃表示で召喚。」

小さな剣と盾を構えて豆戦士が飛び出す。ちっちゃくて可愛い。

ジェリービーンズマン ATK1750DEF0

「ジェリービーンズマンで、ガラドホルグに攻撃。」

ビーンズマンが小さな剣で切り掛かる。

「リバースカード発動『DNA移植手術』。私は光属性を選択。このカードが場にある限り、表側表示モンスターは選択した属性になる。」

まずい！あのカードは！

「そして、光属性に対し、A・O・Jは本来の力を発揮するわ。ガラドホルグの効果発動。光属性モンスターと戦闘する時、ダメージステップの間は攻撃力は200上がるのよ。ガラドホルグ、反撃よ。闇の剣。」

A・O・Jガラドホルグ ATK1600 1800

ビーンズマンが逆に切られちゃった。

咲夜 ライフ4000 3950

しまった。あのカードを警戒しないだなんて。

「メインフェイズ2で、速攻魔法『偽りの種』を発動。手札から、

レベル2以下の植物族モンスター『イービル・ソーン』を特殊召喚。
」

イービル・ソーン ATK1000 DEF300

「イービル・ソーンの効果発動。このカードを生け贄に相手に300ダメージを与える。」

イービル・ソーンが弾けて相手に向かう。

闇風 ライフ4000 3700

「さらに、イービル・ソーンを2体デッキから特殊召喚。」

イービル・ソーン ATK1000 DEF300

イービル・ソーン ATK1000 DEF300

「さらに魔法カード『フレグランス・ストーム』発動。場の植物族モンスター、イービル・ソーンを1体破壊し、カードを1枚ドロウ。さらに、引いたカードは植物族モンスター『ローンファイア・ブロッサム』。よってもう1枚ドロウする。」

これならまだ耐えられる。

「リバースカードを1枚セット。ターンエンド。」

手札2枚

3ターン目 闇風

手札3枚

「厄介なカードを引かれたわね。私のターン、ドロー。」

場は私の方が不利。場合によっては一気にもっていかれる。

「まずは『A・O・ジャンヌン・クラッシャー』召喚。」

A・O・ジャンヌン・クラッシャー ATK1200 DEF800

「その召喚に対して、リバーズカード発動『激流葬』！」

場全体が激流にのまれ、モンスターが流される。

「よし。これなら。」

「甘いわね。リバーズカード発動『闇次元の解放』。除外された闇属性モンスター『A・O・ジャンヌン・ウェポン』を特殊召喚。」

A・O・ジャンヌン・ウェポン ATK2200 DEF800

そんな!?

「いくわよ。リバーズ・ウェポンでダイレクトアタック。」

リバーズ・ウェポンの名に恥じない怒涛の攻撃が襲ってくる!

「きゃあああああ!」

咲夜 ライフ3950 1750

「メインフェイズ2に魔法カード『マジック・プランター』発動。場の永續罠カード、移植手術を墓地に送り、2枚ドロウ。」

私を悩ませたカードが消えた。

「さらにリバースカードを2枚セットして、ターンエンド。」

手札1枚

4ターン目 咲夜

手札3枚

属性が戻っているうちに攻めないと！

「私のターン、ドロウ！」

さつき引けてよかった。

「『ローンファイア・ブロッサム』を召喚し、効果発動。」

「その召喚に対してリバースカード発動。」

な、何！？

「『隠れ兵』。相手がモンスターの召喚、反転召喚に成功した時、手札からレベル4以下の闇属性モンスターを特殊召喚できる。私は『A・O・Jコアデストロイ』を特殊召喚するわ。」

あれは光属性に対して無敵のモンスター。

A・O・Jコアデストロイ ATK1200 DEF200

「くう、ローンファイア・ブロッサムの効果で自身を生け贄に、デツキから『椿姫ティタニアル』を特殊召喚。」

ローンファイア・ブロッサムのいた地面からティタニアルが姿を現す。

椿姫ティタニアル ATK2800 DEF2600

「さらに魔法カード『貪欲な壺』を発動するわ。墓地のモンスター5体、イービル・ソーン3体と、ジェリービーンズマン、ローンファイア・ブロッサムをデツキに戻してシャッフル。そして2枚ドロ。」

これならいける！

「魔法カード『ワンダークローバー』発動。ティタニアルを選択し、手札からレベル4の植物族モンスター『ポタニカル・ライオ』を墓地に送り効果発動。このターンティタニアルは2回攻撃できる。」

これで逆転よ！

「まずはティタニアルで、リーサル・ウェポンに攻撃！椿の舞第一陣！」

椿の嵐がリーサル・ウェポンを吹き飛ばす。

闇風 ライフ3700 3100

「続けてティタニアルで、コアデストロイに攻撃！椿の舞第二陣！」
椿の嵐が次はコアデストロイを襲う。これが通れば！

「まだよ。リバーズカード発動『DNA移植手術』。当然光属性を選択するわ。」

2枚目！？

「コアデストロイの効果発動。光属性モンスターと戦闘する場合、ダメージ計算なしでそのモンスターを破壊する。残念だったわね。」

コアデストロイの目？からレーザーが走りティタニアルを貫く。

「なら私は、リバーズカードを1枚セットして、ターンエンドよ。」

ティタニアルまでやられちゃった。どうしよう。

手札0枚

5ターン目 闇風

手札2枚

「私のターンね。ドロ。」

場合によっては負けちゃう。

「そのリバーズカード、戦闘反応型なら厄介ね。私は『A・O・J
ブラインド・サッカード』を召喚。」

A・O・Jブラインド・サッカー ATK1600 DEF1200

「覚悟はいい？バトルフェイズ。ブラインド・サッカーでダイレクトアタック。」

赤い手から波動が襲ってくる。これなら！

「まだよ。リバーズカード発動。『リビングゲデッドの呼び声』！もう一度お願い。墓地から椿姫ティタニアルを特殊召喚！」

ティタニアルが両手を広げ、私を守ってくれる。

「あら間違えちゃった。ブラインド・サッカーの攻撃を中止。コアデストロイで再びティタニアルに攻撃。」

再びティタニアルが貫かれる。ごめんね。

「私はこれでターンエンドよ。次で終わりね。」

手札1枚

6ターン目 咲夜

手札1枚

どうしよう。ライフも相手の方が上。おまけに手札はこれから引く1枚だけ。勝てるわけない。無理よ。そういえば黒兎も見てないんだし、もうやめようかな。

「私は……」

「何やってるんだよ咲夜！」

え！？この声は。あの日も私を追って、呼びかけてくれたこの声の主は。

「黒兎！」

黒兎が観客席最上段から呼んでいる。

「さつき負けてたかもしれないのに手に入ったチャンスだぜ。楽しむんだ。そうすれば、きつと応えてくれる。俺に見せてくれよ。咲夜のデュエル。」

見に来てくれた。私のところに来てくれた！

「あら、彼来たんだ。でも残念ね。彼が見るのは貴女の負け姿なんだもの。」

なら、みつともないことはしたくない！

「それはどうかしら？」

「何？」

「まだ私のドロが残ってる。私のターン、ドロー！」

お願い。デッキよ応えて！

「何を引けたの？」

「私は…『強欲な壺』を発動！」

「なんですって!?!」

「2枚ドロ。さらに魔法カード『天使の施し』発動。3枚ドロし、2枚墓地に。」

今ならわかる。デッキは私に伝えてくれる。

「あの場面から連続ドロですって!?!」

「さあ、きめるわよ！」

「お願いね、ソル。魔法カード『死者蘇生』発動！墓地より蘇れ」
時花の魔女・フルール・ド・ソルシエール！」

光の中から姿を見せるのは、私の信頼するパートナー、ソル。

時花の魔女・フルール・ド・ソルシエール ATK2900 DEF0

「特殊召喚に成功した事で効果発動。相手の墓地からリーサル・ウエポンを特殊召喚！」

「バトルよ。リーサル・ウエポンでブラインド・サッカーに攻撃！」
リーサル・ウエポンの攻撃により、ブラインド・サッカーが爆散した。

闇風 ライフ3100 2500

「くっう。」

「リーサル・ウェポンの効果発動。光属性モンスターを戦闘で破壊した時、1枚ドロ。」

「このままじゃ手が足りないわよ。闇属性モンスターは引けたのかしら?」

「引いたのは…『バイオレット・ウィッチ』!闇属性よ!よって特殊召喚!」

バイオレット・ウィッチ ATK1100 DEF1200

「そんな!?!でもコアデストロイは光属性に対しては無敵よ。私の勝ちだわ!」

「いいえ、勝つのは私よ。手札から速攻魔法『サイクロン』発動!」

「2枚目ですって!?!」

移植手術も2枚目じゃない。

「移植手術を破壊。これで属性は元に戻るわ。フルール・ド・ソルシエールでコアデストロイに攻撃!時花の魔術!」

「勝つのは私達よ!」

ソルの魔術がコアデストロイに炸裂した。

闇風 ライフ2500 800

「あああああ！」

「これでとどめ！バイオレット・ウィッチでダイレクトアタック！
リーフサイクロン！」

「きゃあああああ！」

闇風 ライフ800 - 300

WIN 咲夜

「楽しいデュエルだったわ。」

「勝ったと思ったんだけどな。彼によろしくね。」

「か、彼氏じゃないわよ！」

「咲夜！いいデュエルだったぜ！」

黒兎が手を振ってる。私も振り返し、彼の元に向かっていく。

SIDE〜リン〜

皆試験が終わり、集まって打ち上げです！とはならず、クロ兄と十代さんは、それぞれ咲夜さんと明日香さんの説教タイムです。

「さて二人共。どうして私達の応援をすることなく、レッド寮にデュエルしに行ったのかしら？」

「これだけ友人として付き合ってきたのに、放置されるだなんて。」

さすがに傷つくな。」

クロ兄も十代さんも正座です。二人の眼力に完全に飲まれています。

「いや、その、あの時は色々テンションが上がって。」

「すっかり忘れちゃったんだよ。」

「馬鹿、十代！なんでも正直ならいってわけじゃ…」

あ。二人の目の色が。

「忘れてたね。つまり、あなたたちにとって、私達はその程度の存在だったということね。」

「しかも黒兎。今の発言。黒兎はごまかすつもりだったんだ。」

「違う。咲夜、違うんだ。ごまかそうとかじゃなくて、余計に怒らせるようなことを言うな。ってことで。」

「つまり黒兎は私達に隠し事をするつもりだったと。」

クロ兄の顔が青みを増していく。あ、土下座した。

「まだ咲夜はいいじゃない。最後見に来てもらえたんだから。私なんて、咲夜より後のスタートだったのに来てもらえなかったのよ。」

「翔は、咲夜の試合だから黒兎は戻れ。しか言わなかったんだよ。明日香のことだからもう終わらせたと思ってたし。」

「それでも走ってくるぐらいはしてほしかったわ。」

ああ。かつこよかった二人が惨めな姿に。

「翔君は私達の応援してくれたね。ありがとう。」

「翔さんの応援、聞こえましたわ。」

「二人とも僕の応援なんていらなくらいだったじゃないっすか。」

「そんなことないわ。」

「応援していただけると、頑張ろうと思えますし。」

あっちでは翔さんが、ももえさんとジュンコさん相手に楽しそう。余計に二人が惨めに見える。

「咲夜さん。クロ兄を許してあげて。」

「リン。」

「リンちゃん。」

「クロ兄、翔さんから事情を聞いて、すぐに走っていったんだよ。それで息切らしちゃって登場が遅れて、最後に来たみたいになってたけど、本当はもっと前から見てたんだよ。」

「リン！？言わなくていい！」

「黒兎は黙って。リンちゃん、それ本当？」

「本当だよ。小さい声だったけど、頑張れ。頑張れ。って。」

あ、クロ兄の顔が赤い。でも、伝えなかったから。

「なんで言わなかったの？」

「こづいうのって自己申告無しじゃない？」

「馬鹿。でも、見てくれてたんだ。」

「まあな。」

よかった。誤解は解けたかな。

「あ、そうだ！咲夜。」

「何？言い訳？」

「そうじゃなくて。デュエルの最後。最高に楽しそうだったじゃないか。やっぱああじゃないとな。」

「何が言いたいの？」

「つまり、咲夜にはあの時みたいな笑顔が似合っつてことさ。」

クロ兄が笑顔で言い切った。そんなこと平気な顔で言うから咲夜さんが。

「な、何言ってるの。恥ずかしいじゃない。で、でも最後の応援、

嬉しかった。おかげで諦めなかったし、勝てたわ。」

「何言ってるんだ。あれが咲夜の実力だよ。」

「ありがとう／＼／」

あー！？また咲夜さんのクロ兄への好意が増したよ！クロ兄無自覚でやっちゃダメ！

「あら？そっちは解決なの？」

「ええ。明日香もその辺にしといたら。」

「しょうがないわね。十代、今回はもういいわ。」

「本当か！」

「今度はちゃんと見ててよ。」

「ああ！明日香は大切な友達だからな。」

これで一安心かな。

「明日香さん。終わったんですか？」

「もうよろしいんですの？」

「ええ。今回はね。」

「アニキ、黒兎君。お疲れ様です。」

「翔。お前だけずるいぞ。」

「アニキ達と違って応援してたからね。」

「翔君は、私以外の全員分ちゃんと見てたわ。」

「咲夜の時は呼びに来させちまったしな。よし。皆、今から打ち上げしようぜ！お詫びもこめて俺が料理を振る舞うぜ！」

クロ兄が立ち上がると皆に呼びかける。

「本当か！黒兔！」

「ちょっと待て！十代はこっちサイドだろう！？」

「だって俺料理出来ないし。」

「じゃあ十代には何か芸でもしてもらおうかしら。」

「ええ！？そりゃないぜ！」

「アニキだけお咎め無しじゃ不公平っすよ。」

「そうよ。何かやりなさい！」

「じ、じゃあ黒兔！料理手伝わしてくれ！」

「いや。必要ない。」

「そんなー！？」

皆のボルテージは一気に上がり、今夜のイベントが決まりました。クロ兄、こういうの好きだからな。今夜は楽しくなりそう。

オシリスレッド寮食堂にて

「さあ、料理出来たぞ！」

「待ってました！」

「今日のお昼でわかったけど、本当においしそうね。」

「天川君にこんな特技があつたなんて驚きなニヤァ。」

「まだまだこんなものじゃないですよ。大徳寺先生。」

「いったいいくつ特技があるんすか。」

「それより早く始めましょうよ！」

「もう待ちきれませんわ！」

「黒兔、よろしく。」

「よっしゃ！初試験、我等が仲間内では大きな失敗もなく、また、十代と俺はブルー生を倒したことを祝して、乾杯！」

「」「」「乾杯！」」「」

「さあ、食つぞー！」

「その前に十代。隠し芸やらないのか？」

「あれマジだったのか!？」

「当たり前じゃない。さ、何をしてくれるの？」

「そんなの考えてないって!」

「ダメだな十代。芸の一つや二つできないだなんて。」

「なら黒兎。やって。」

「さあ食べ十代!」

「切り替え早過ぎっす!」

「あ、これおいしい!」

「翔さん。そちらの料理をとってもらえますか。」

「はい。どうぞ。」

「ありがとうございます。」

「二人とも逃げない!」

「どつする黒兎。」

「仕方ない。十代、ここは…土下座だ!」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

「いやー。レッド寮も賑やかになったニヤー。」

「やってますかな。大徳寺先生。」

「鮫島校長。トメさんも。」

「黒兎ちゃんがいっぱい食材を買っていくもんだから事情を聞いたんだよ。」

「そしたら何やら楽しそうなことを計画してるじゃないですか。なのでね。」

「あ、二人共入って下さい。」

「おじやまするよ。天川君。」

「黒兎ちゃん。凄い料理だねえ。食材足りてる？一応持ってきたけど。」

「トメさん。ありがとうございます！なんとかなると思い…。」

「「「天川！俺達も参加させる！」「」」」

「おやおや。レッド生が大集合じゃないですか。」

「普段の食事がアレですからニヤー。」

「お前ら。よっしゃー！何人でも呼びやがれ！レッド寮、大宴会だ

「！」

「「「「イエーイ！」」」」

.....

「片付け一人で大丈夫？」

「ああ。咲夜も大丈夫か？なんなら送るぞ。」

「大丈夫よ。明日香達と帰るから。」

「そっか。それじゃあ気をつけてな。おやすみ。」

「おやすみなさい。」

大宴会も終わって、皆帰っていきます。他のレッド生は先生のお酒を飲んじやって、食堂で寝ちゃってます。

「さて、毛布くらいは持ってきてやるか。」

「クロ兄、お疲れ様。」

「リンも楽しかったか？」

「うん。フィアとソルとハネクリボーと、あんなにはしゃいだの初めて。」

「そっか。よかった。」

クロ兄も満足したんだ。撫でられるのが気持ちいい。

「天川君。少しいいかね。」

あ、校長先生。

「どうしました？」

「まずは楽しいイベントをありがとう。」

「いえいえ。自分がやりたかっただけですよ。」

「もう一度確認したいが、本当に昇格はいいのだね？」

「はい。一言はありません。」

これも本題じゃなさそう。

「そうか。ならば本題なのだが。それだけの实力を持つ君や十代君に頼みたい。このアカデミアを変えてもらいたい。」

「変えるとは？」

「君も知ってる通り、今のアカデミアはブルーのエリート意識が悪い方向に向いている。」

「そうですね。ブルーになっただけで随分偉そうだ。」

「強者であるという自覚をもつことはいいことなのだ。だが彼らは弱者を虐げることしかしなくなってしまった。そしてあるうことが

教師さえも。」

「苦勞されてるんですね。」

「そして、デュエルとは本来、相手を思いやり、互いに楽しむものなのだ。」

「同感です。」

「君や十代君は、実力を持ちながら、慢心することなく、デュエルを楽しんでいる。そんな生徒を育む場にしたいのだよ。」

「しかし、どうやって？俺達が動いても、今のブルーは反発するだけでは？」

「なに。君達はいつも通り過ごしてくればいい。その姿は少しずつ周りを変えるだろう。君も言ったじゃないか。下から変えてやると。」

「そうですね。わかりました。俺が少しでも役に立つなら存分に働きますよ。」

「ありがとう。期待しているよ。それではまた。そうそう。次があればまた呼んで下さい。」

フットワークの軽い校長先生だな。

「さて、んじゃ改めて今できること、毛布運びをやるか。」

じゃあ私も今できること、クロ兄のお手伝いをしようかな！

第八話くそれぞれの思いく（後書き）

打ち上げに関しては完全オリジナルです。

会話誰が誰だか伝わってるかな？

今後もこの作品は会話がメインとなりますが、お付き合いいただけたら幸いです。

次回は若本回。作者初のタッグデュエルです。

第九話〜廃寮探険〜（前書き）

今回はタイタン戦です。

作者初のタッグデュエルです。

上手く纏まっているとよいのですが。

あと、今回はデュエル描写が長くなってしまったので2つにわけました。

ではごっご。

第九話 廃寮探険

SIDE 黒兎

月1試験からしばらく。今俺達はレッド寮の食堂で怪談大会中である。どうしてこうなった？

「黒兎君、どうしたんすか？」

「次は黒兎の番なんだな。」

ちなみにメンバーは、俺、十代、翔、隼人の4人だ。試験前に会って以来、隼人とは仲良くやらせてもらっている。

「ほら、引いてくれよ。」

「そうだったな。俺のターン、ドロ。」

ちなみにルールは、適当に集めたモンスターカードの束から一枚引き、そのカードのレベルに見合った話をするというもの。

「レベルは？いくつつすか？」

「俺が引いたカードは、ストーンドラゴン。レベル7だ。」

んじゃ、いくぜ。

とある山奥、とある村。その村の入口には、頭のない地蔵が並べられていた。

なんでも、その村は昔、戦から逃げてきた落ち武者を匿ったことが

あるんだ。

しかし、その落ち武者の首に懸賞金がかかっていることを知った村人達は、落ち武者を騙してその首を切ってしまった。

それからしばらくして、その村に首のない死体が転がった。

落ち武者の祟りと恐れた村人は、高名な僧に除霊を願った。僧は言う。

- 落ち武者は生け贄を求めろ。

村人は恐慌した。誰も死にたくない。さらに僧は言う。

- 神の写し身たる地蔵の首を切れ。落ち武者は自らの所業が神に裁かれることを恐れている。

村人は地蔵の首を切り、その首を落ち武者を埋めた所に捧げた。

すると、首のない死体は出なくなった。そして三度僧は言う。

- 毎年地蔵の首を切れ。首は墓に、体は村の入口に。落ち武者に生け贄を捧げ続ける。

それからその村では、毎年首のない地蔵が並ぶ。それは落ち武者の霊の通り道。

それから長い年月が流れ、地蔵の首を切る事がただの風習にまでなった頃。

とある若者が村を訪れる。村人達は久しぶりの客人をもてなした。

そのもてなしの中で、若者は地蔵を壊してしまう。村人達はかまらなないと、笑ってもてなし続けていた。

その夜、その村から生きた人はいなくなった。全員その首を無くした状態。

村の入口には地蔵が並ぶ。村人の首を付けられた地蔵が。

今もどこかの山奥に、人の首を付けられた地蔵が並ぶ。

君も知らない所を訪ねるならば気をつけて。何が起きるかわからない。

「ってところか。」

「い、意外とくるな。」

「描写がシニール過ぎるっすよ。」

「しばらく山には行きたくないんだな。」

ふむ。おおむね好評か。

「そんな話しないでクロ兄。」

リンが俺の膝の上で震えている。ヤバイ。可愛い。いじめるのが癖になりそうだ。

「黒兎、どうした？人としていけない顔になってるんだな。」

おっといけない。顔に出してしまった。

「じゃあ次は…」

「何をしてるんですかニヤ？」

いつの間にやら、大徳寺先生が入ってきていた。寛容な先生とはいえ食堂の無断使用だ。原作では参加したとはいえ、何か言われるよな。

「今は皆で怪談大会中だぜ。大徳寺先生。」

「ほづ。どういふルールですかニヤ？」

「この束から一枚引いて、その引いたカードのレベルにあった話を

するんすよ。」

あれ？何もなし？

「なるほど。では、ドロー。」

「何を引いたんだ？」

「こ、これは!？」

先生が引いたカードは、F・G・D。レベルは最高の12。

「おやおや。ではとっておきの話をお披露目なのニヤ。」

そして語られる廃寮の話。

かつてアカデミアの森の奥に、特待生寮が存在した。

そこでは闇のゲームの研究をしていた。

今は立入禁止となつてはいるのだが、かつてその生徒が次々に行方不明になる噂が流れた。

そして、噂は真実だからこそ立入禁止なのだとか。

「その廃寮を見つけても、絶対入っちゃダメなのニヤ。次は君達が行方不明になっちゃうニヤ。」

先生が話し終わるとファラオが欠伸を一つ。

「そろそろ部屋に戻る時間だニヤ。ではおやすみ。」

挨拶をして帰っていく先生。そして鎌首をもたげるのは、やるなと言われればやりたくなくなってしまふ人の性。

「そんな所があるのか！よし、明日の晩に、俺達で行ってみようぜ！」

「え！？やめようよアニキ。」

「うん…怖いけど俺も行きたい！」

十代の宣言に、翔が否を唱える。隼人が行きたいってのは意外だな。

「十代。一応聞くが、休日とかの日が出てる時はダメなのか？」

「それじゃあ意味ねえよ。それに、さっきの噂について調べてみたいしな。」

まあそうなるか。

「じゃあ目付けとして、一緒に行くぜ。」

「黒兎！そうこなくっちゃ！」

「ええ！？黒兎君行くんすか！？」

翔のやつ、まるで裏切り者を見る目だな。

「どうせ十代は止まらない。だったらせめて目の届く所にいるだけだ。」

原作介入のチャンスだしな。

「よし。じゃあ決定！こないなら置いてくぞ！」

「はいはい。」

「そんな〜。」

次の日夜

「お！あれじゃないか。」

森の中を歩くことしばらく。道中話して来たんだが、隼人の意見は驚いたな。デュエルで勝つことだけの授業は嫌、か。

「あれ？アニキ。建物の前に何かあるよ。」

「え？何だこの花は？」

「これは薔薇だな。」

なんでこんな所に？

「十代。それに皆も。どうしてこんな時間にこんな所に？」

「明日香！？」

さっきのセリフはお互い様だ。

「俺達はこの廃寮の探検に来たんだ。」

「悪いことは言わないわ。そんなことはやめて帰りなさい。」

明日香が忠告してくるが。

「えーなんでだよ。俺達はここの噂について調べるんだ。」

そんなことでは十代は止まらない。

「あの噂なら本当よ。ここでは本当に人が消えた。」

「なんでそんなことわかるんだよ。そんな迷信信じないぜ。」

「私の兄もこの寮で行方不明になったからよ。」

知ってはいたが重たい真実。さすがの十代も言葉を失った。

「ここでは本当に人が消える。わかったなら帰りなさい。」

見れば手に薔薇の花が握られている。

「アニキ。明日香さんも言ってることだし。」

「俺も、帰った方がいいと思うんだな。」

翔と隼人は十代に進言している。さすがに噂が真実で被害者がいるのではな。

「クロ兄。ここ何かよくない感じがする。」

リンも嫌な感じがするらしい。地下にはダークネスの名残があるし

な。

「それじゃあ私は戻るわ。あなたたちも見つかる前に帰りなさい。」

明日香は一人森へと入って行った。女一人で行き来するってよく考えたらマズインじゃないか。

「それじゃボク達も。」

「いや。悪いがそんな話を聞いた以上は絶対行くぜ。」

「何を言ってるんすか!?!」

「ここで明日香の兄さんがいなくなったのなら、何か手掛かりがあるかもしれない。」

「その通りだ十代。」

リン達が驚いた顔をしてるが、気持ちは十代と同じだ。

「ただ探検するだけなら立入禁止に入っちゃダメかもしれない。だが、あの話を聞いて手掛かりを探しに入ったら調査だ。学校側がマイナスイメージを無くしたいと思うならわかってもらえるかもしれない。」

「黒兎君まで。」

「それに友達が困ってるんだ。帰るなんてしたくないぜ。」

十代が笑顔で言い切る。男の俺から見てもカッコイイ。

「よし。それじゃ行くぜ。」

「ああ。行こう。」

「もう。行こう、隼人君。」

「しょうがないんだな。」

立入禁止の看板を越えて寮に入る。草はのび蔦は絡み、迫力だけは最高だな。

「結構そのまま残ってるんだな。レッド寮よりいい設備だし、掃除してこつちに住もうぜ！」

「嫌だよアニキ。」

「さすがにダメなんだな。」

まあ立入禁止に住み着いたらダメだよな。

「それにしても、ここの研究。千年アイテムについてだな。」

大徳寺先生の話は本当っぽい感じだな。

「色々残ってるな。」

「気味が悪いっす。」

「案外、ここの研究がばれないために立入禁止にしてるのかもしれない

ないな。」

「黒兎。怖いこと言わないでほしいんだな。」

こんな場所じゃなんでも怖いと思うぞ。

「これ。おい！こっちに来てくれ！」

十代が俺達を呼び寄せる。

「どうしたのアニキ？」

「この写真見てくれよ。」

その写真には一人の男子生徒と、10JOINの文字。

「誰っすか？」

「わかんねえ。けど、ここに人がいたって証拠だ。それに唯一見つけたものだしな。明日香に見せてやるっぜ。」

まあご都合主義よろしく、それが吹雪の写真なわけだが。

「他にもないか探してみようぜ。」

さらに奥に行こうとする十代。全部調べる気か？どこのRPGだよ。しばらく行って、十代が何か見つけたのか突然屈み込む。

「十代。どうしたんだな？」

「このカード、エトワールサイバー。明日香のカードだ。」

「あっちにもカードがあるっす。」

見るとカードが点々と落ちている。

「何かを引きずった跡があっちへ…」

「行ってみよう。」

カードを拾いながら進んで行く。すると、カードの先に、変な穴が開いている。

「なんか怪しい穴っすね。」

「カードはここに続いてたんだ。行くぜ。」

十代が真っ先に入る。翔、隼人と続き、俺は最後に入る。一応背後からの奇襲に注意しよう。

「お。この先なんか広くなってるぜ。」

着いたか。

「ようこそ。遊城十代、そして、天川黒兎。」

原作で指名されたのは十代のみ。やはり俺もクロノスのターゲットか。

「だ、誰だおまえは！明日香に何してんだ！」

広場の奥には仮面を付けた大男。隣には棺に入った明日香。

「我が名はタイタン。闇のデュエリスト。この領域を侵した貴様らに闇のゲームの裁きを下す者。」

わ・か・も・とVOICE!

「タイタン。明日香は無事なんだろうな。」

「もちろんだ。だが貴様らが私に負けるか、闇のゲームを拒否した時は知らないがな。」

と、シリアスな場面だった。ここは冷静に。

「おい。タイタンと言ったな。どうやってここに?」

「私は闇のデュエリスト。この領域を荒らす者がいれば現れる。」

「何故明日香をそんな目にあわせた?明日香はこの寮に入ったわけじゃないぜ。」

「この娘には貴様らを逃がさぬ餌になってもらった。不審な動きをみせればただではおかん。」

ちっクロノスの野郎。自慢の生徒が傷つくのを認めやがった。

「許さねえ。デュエルだ、タイタン!」

十代がこらえきれずにディスクを構える。

「そうだな。友達を狙われて黙ってられるか！」

まあ俺もぼちぼち限界なわけだし、ディスクを構えてにらみつける。

「いいだろう。二人まとめて片付けてやる。」

タイタンも構える。

「ルールは私一人対貴様ら二人だ。私は通常通りに、貴様らはフィールドと墓地を共有だ。順番は私が先攻。そこから貴様らの先手、私、貴様らの後手だ。ライフは互いに8000。いいな。」

(ようはTFルール)

「ああ。明日香…今助けてやるぜ！」

「さっさと始めよう。明日香が心配だ。」

俺と十代の怒りのボルテージはすでに振り切れている。

「アニキ！黒兎君！負けちゃダメっすよ！」

「二人ともキバレー！」

翔と隼人が応援してくれる。心強いぜ。

「ではこれより、闇のゲームを始める。後悔するなよ小僧！」

「よし。いくぜ黒兎。」

「ああ。いこう十代。」

「『デュエル！』」

SIDE 十代

あのタイタンって奴、よくも明日香を！待ってるよ。すぐ助けるからな！

先攻 タイタン

手札6枚

「私のターン、ドロー。」

いったい何のデッキなんだ？

「私は『インフェルノクインデーモン』を攻撃表示で召喚。」

インフェルノクインデーモン ATK900 DEF1500

「デーモンデッキか！」

確かデーモンデッキは下級モンスターに強力なアタッカーが多いデッキだったはず。黒兎との勉強が役に立つなんてな。

「十代。若干失礼なことを考えてないか？」

心を読まれた！？

「確かに強力だが、そのデッキはモンスターの維持のために、スタ

ンバイフェイズにライフを払い続けるって、でっかい代償があるぜ。」

黒兎は俺の動揺に気付いてなかったのか？

「そんなことはわかっている。さらに私はフィールド魔法『万魔殿 - 悪魔の巣窟』発動。」

周りが気味の悪いフィールドになっちまった!?

「なんだここは!?!」

「さしずめ、地獄の1丁目でも言っておこうか。このフィールドでは、デーモンの維持コストは発生しない。さらに、デーモンと名のつくモンスターが戦闘以外で破壊され墓地に送られた時、そのカードのレベル未満のデーモンを手札に加える。」

じゃああいつはライフを払わずに強力なデーモンを使えるのかよ。

「さらにリバースカードを1枚伏せ、ターンエンド。」

手札3枚

後攻 十代

手札6枚

「俺のターン、ドロー。」

インフェルノクインデーモンの攻撃力は900。すぐに倒して…

「スタンバイフェイズにインフェルノクインデーモンの効果を発動。」

へ？

「私の場のデーモン1体の攻撃力を1000ポイントアップする。これはインフェルノクインデーモンも可能だ。よって1000ポイントアップ。」

インフェルノクインデーモン ATK900 1900

「つなら。俺は『E・HEROスパークマン』を攻撃表示で召喚。」

E・HEROスパークマン ATK1600DEF1400

「だが、その攻撃力では私のデーモンに勝てんぞ。」

わかってるさ。見せてやるぜ、HEROの闘いを！

「装備魔法『スパークガン』をスパークマンに装備。スパークガンの効果発動。表側表示モンスター1体の表示形式を変更できる。対象はインフェルノクインデーモンだ。」

守備表示にすればスパークマンで倒せる！

「ならばインフェルノクインデーモンの効果発動。相手のカードの効果対象になった時サイコロを振る。2か5が出た時その効果を無効にし破壊だ。」

確率は、えーっと3分の1だ。

「まあサイコロが無いからな。変わりにこのルーレットで…」

1〜6の数字が書かれた球が浮かんできた。

「ちょっと待った。」

「黒兎？」

どうしたんだ？何かあったか？

「サイコロなら俺が持つてる。そのルーレットはしまってもらえるか？」

黒兎がサイコロを投げ付けてルーレットを撃ち落とした。どんな力だよ！？

「な、何を！？」

「サイコロならあるんだ。それならテキストに従おうぜ。それともルーレットである必要があるのか？」

「むづ。よ、よかるづ。」

なんだったんだいったい？

「ならばダイスロール。出た目は…3だ。」

ラッキー！

「じゃあ守備表示になってもらうぜ。バトル！スパークマンでインフェルノクインデーモンに攻撃。スパークフラッシュ！」

スパークマンがインフェルノクインデーモンの頭上から技を放つ。

「リバーズ発動。『ヘイト・バスター』！自分フィールドの表側表示の悪魔族モンスターが攻撃対象となった時、相手攻撃モンスターと攻撃対象となったモンスターを破壊し、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える。」

インフェルノクインデーモンが、悍ましい叫びをあげると、スパークマンを道連れに爆発した。

「くうう。スパークマン。」

十代&黒兎 ライフ8000 6400

「私のデーモンが戦闘以外で破壊されたことで、万魔殿の効果発動デッキからレベル3の『デスルークデーモン』を手札に加える。」

ダメージに加えて手札補充までやられちゃった。

「すまねえ黒兎。」

「気にするな十代。まだ取り返せる。」

黒兎は全く動じてない。やっぱり頼りになるぜ。

「暢気に会話をしている場合かな？体を見てみる。」

体がどうかしたのか？

「ア、アニキ！？」

「十代と黒兎の体が消えてるんだな！？」

「闇のゲームの敗者に待ち受けるのは永遠の闇だからな。敗北に近づく程闇に飲まれていくぞ。」

「いいや！俺は信じない。聞いたことがあるぜ。闇のゲームには千年アイテムが必要だってな！」

あいつが持つてるもんか！

「ふっ…見る。これこそが、伝説の千年アイテム、千年パズル。これが闇のゲームだという証！」

そんな！？じゃあ本当にこれは闇のゲーム！よくわかんないけどメチャクチャヤバイ気がする。だけど！

「こんなゾクゾクするデュエルは初めてだ！燃えてきたぜ！」

S I D E 〽 黒兎 〽

まったく十代は。俺はインチキだってわかってるけど、あいつにとつては命のかかったデュエルなんだぞ。

「俺はリバーズカードを1枚セット。ターンエンドだ！」

手札3枚

3ターン目 タイタン
手札5枚

「私のターン、ドロー。」

さて相手の場は空。キングはまだだな。

「『シャドウナイトデーモン』を攻撃表示で召喚。」

場に現れるのは騎士を名に持つ、手が剣とかぎ爪のデーモン。

シャドウナイトデーモン ATK2000DEF1600

「ゆくぞ。シャドウナイトデーモンでダイレクトアタック！幻影の剣！」

デーモンは剣を振り上げ十代に襲いかかる。

「リバーズカードオープン『ヒーロー見参』！相手モンスターが攻撃する時、相手は自分の手札を1枚選ぶ。それがモンスターならフィールドに特殊召喚できる。違う場合は墓地だ。さあ、どれにする？」

自分の手札を広げタイタンに突き付ける。まあ十代のことだ。全てモンスターだろう。

「私は左のカードを選択する。」

「よっしゃあ！そいつは俺の手札最強のモンスターだ。現れる『E・HEROエッジマン』！」

E・HEROエッジマン ATK2600DEF1800

「ならば攻撃を中止する。私はリバースカードを2枚伏せターンエンドだ。」

手札2枚

4ターン目 黒兎

手札6枚

やっと俺の番か。タッグフォース思い出すな。

「俺のターン、ドロー。」

いまいちよくない手札だな。ならまずは。

「魔法カード『天使の施し』発動。3枚ドローし、手札から2枚墓地へ。『トーチ・ゴレム』と『ウィンドフレーム』を墓地に送る。」

これでちょっとはマシかな。

「さらに速攻魔法『サイクロン』発動。右のカードを破壊だ。」

稲妻を纏う風がタイタンのリバースカードを襲う。

「残念だったな。リバース発動『デストラクト・ポーション』。自分フィールド上のモンスター1体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のライフを得る。シャドウナイトデーモンを破壊。」

シャドウナイトデーモンからオーラのようなものがタイタンに流れ込む。

タイタン ライフ8000 10000

「さらにデーモンが効果で破壊されたため万魔殿の効果発動。2枚目のデスルークデーモンを手札に加える。」

ありゃ。無駄打ちしちゃった。

「だがお前の場からモンスターがいなくなった。俺は『ハーピー・レディ・SB』を攻撃表示で召喚。」

最初からSBを装備したハーピーが飛んでくる。

ハーピー・レディ・SB ATK1800DEF1300

「いくぜ。まずはハーピーで攻撃。電撃鞭！」

ハーピーが手に持つ鞭をタイタンに叩きつける。

「ぬづう。」

タイタン ライフ10000 8200

「さらにエッジマンで攻撃。パワー・エッジ・アタック！」

エッジマンの両腕のエッジがタイタンを切る。

「ぬおお！」

タイタンの体も消えていく。

タイタン ライフ8200 5600

「あつ！タイタンの右腕が消えてくつす！」

「え？左足なんだな。」

「んなこたどつちでもいいぜ！いいぞ黒兎！」

いいわけないぞ、十代。早く気付いてくれ。

「俺はリバーズカードを1枚セット。ターンエンドだ。」

手札3枚

5ターン目 タイタン

手札4枚

「私のターン、ドロ。これは助かった。魔法カード『トレード・イン』発動。手札のレベル8モンスター『プリズンクインデーモン』を墓地に送り2枚ドロ。」

鎖に繋がれた巨大なデーモンが墓地に入っていく。また嫌なカードを送ったもんだ。

「これはラッキー。さらに魔法カード『強欲な壺』発動。カードを2枚ドロ。」

どんどん手札が整っていく。

「私は『ダークビショップデーモン』を守備表示で召喚。」

ローブを纏った青いデーモンが出て来る。そういえば表側守備表示で召喚はありだったな。

ダークビショップデーモン ATK300 DEF1400

「さらに魔法カード『二重召喚』発動。このターンもう一度通常召喚できる。」

場にはデーモン。マズイ！

「現れる、万魔殿の王『ジェノサイドキングデーモン』！」

ジェノサイドキングデーモン ATK2000 DEF1500

タイタンの場に、今までのデーモンとは違う威圧を誇る、王の名を持つデーモンが現れる。

「さあいくぞ！ジェノサイドキングデーモンでハーピー・レディに攻撃！炸裂五臓六腑！」

その剣飾りかよ！？

「リバースカード発動『聖なるバリア・ミラーフォース』！相手の場の攻撃表示モンスターを全て破壊だ！対象をとらないからデーモンの効果も使えないぜ！」

ジェノサイドキングデーモンが自らの攻撃にやられる。

「おお！やったな黒兎！」

「無駄だ。手札のデスルークデーモンの効果発動。自分フィールド上のジェノサイドキングデーモンが破壊された時、このカードを墓地に送り、ジェノサイドキングデーモンは復活する。」

地面から再び立ち上がるジェノサイドキングデーモン。やっぱり厄介だ。

「さらにデーモンが効果で破壊されたため万魔殿の効果発動。デッキから最後のデスルークデーモンを手札に加える。」

やっぱりミラーフォースやめときゃよかったか？

「バトルフェイズ中の特殊召喚のためまだバトル続行だ。再びジェノサイドキングデーモンで、ハーピー・レディに攻撃。炸裂五臓六腑！」

今度は破壊されてしまうハーピー。

十代&黒兎 ライフ6400 6200

「ちいっ。」

「そしてライフが減ったことで闇が貴様らを飲み込む。」

タイタンがパズルを掲げるとさらに俺達の体が消えていく。

「アニキの右腕が〜！」

「左、だろ？」

「さっきから見えてるもん違くないっすか？」

「どづいうことだ？」

どづもこづもあるか！早く気付け！

「うあっ〜！」

十代が苦しみだした。そうだった！このデュエルマジで1回倒れるんだった！

「十代！大丈夫…！」

がっ！俺もきやがった！

「アニキ！黒兎君！」

「どづした〜！？」

ヤバイ。声が聞こえない。

「どづだ。もう貴様らは全身の力が抜けて、立つことも出来ない。」

駄目だ。堕ちる…

第九話 廃寮探検 (後書き)

続きは今日中にあげます。

今回表側守備表示使ったのですがどうでしょう？

O C G 準拠できている以上ない方がいいですか？

よろしかったら感想にでも下さい。

第十話 新たな物語 (前書き)

タイタン戦後編です。

原作と違うことが多く出てきますが、そういうものだと思って下さい。

第十話〜新たな物語〜

SIDE〜リン〜

あわわわ。どうしよう。クロ兄と十代さんが倒れちゃった!?

「クリクリ〜!」

ハネクリボーが十代さんの周りを飛んで意識を戻そうとしている。よし、私も。

「クロ兄。しっかりして。目を覚まして。」

クロ兄は言った。『このデュエルは本当の闇のデュエルじゃない。トリックがある。』って。だからこれも本当に意識をもっていかなければいけないはず。

「クロ兄起きてよ〜!」

「…ん?リン…どうやらトリックにハマっちゃったか。もう大丈夫だ。」

クロ兄が目を覚ました!わかってたけどホッとしたよ〜。

「…ん?あ…あー!」

十代さんも気がついたみたいです。これで一安心。

「十代。気がついたか。」

「黒兎。なんだか今、息苦しさが消えて、俺も奴も元に戻ってたんだ。」

十代さんがなにかに気づいたのか呟いています。

「隼人！奴の左手は消えてるよな？」

「いや、逆だと思うけど。」

「えっ！？」

「なるほど。そういうことだったのか。」

十代さんは気づいたようです。トリックに。

「バカな！まだデュエルが続けられるとは！？ええい、これを見る！」

再びパズルが掲げられます。

「もうそいつはきかないぜ！」

十代さんがパズル目掛けてカードを飛ばしました。

キンッ！

刺さった！？

「しまった！」

「お。十代、俺達の体が戻ったぞ。」

確かに二人の体がしつかりあります。

「思ったとおりだ！コイツの闇のゲームはインチキだ！」

「「えっ!?!」」

「やっと気づいたか。」

クロ兄が小声でため息をついてる。お疲れ様。

「多分コイツは手品師なんかで、俺達はコイツの催眠術にひっかかったんだ。体が消えたのも嘘。だからちくはぐだったんだ。きつとコートやこの場所、もしかしたら最初のルーレットにも仕掛けるだろうぜ！」

「何をほざく！私は本当に闇のゲームを……」

「なら一つ聞くが、千年アイテムは純金のはずなのになんで一部銀色なんだ？」

「そんな!?!メッキが剥がれて……しまったー！」

クロ兄の質問にあっさり自爆。なんだろうこの人。

「ええい！私の仕掛けが効かない以上、貴様らとデュエルを続けるなど無意味なこと！」

あ。逃げ出しました。偽物確定です。

「やっぱり偽物の千年パズル！待て！」

十代さんが追いかけます。これで解決かな。

「リン。気を抜くな。ここからは本物だ。」

「へ？きゃあ！」

周りの造形物から光があふれ、地面に眼の形の光が走る。

「な、何なんだこれは!？」

「お前！まだ性懲りもなく！」

「違う！私は何もしてない！」

十代さんとタイタンが闇に包まれています。何が起きてるの!？

「十代、タイタン！逃げるんだ！」

クロ兄が二人のもとへ駆け出す。待つて！なんだか危ないよ！

「く…来るな！助け…うぐぐぐ…」

「お、おい!？」

二人は黒いスライムみたいなのに襲われてる。タイタンは口の中に入られた。気持ち悪い。

「クリクリー！」

「ハネクリボー！そうか！さっきも助けてくれたのはお前だったのか！」

「クリクリッ！」

ハネクリボーがスライムみたいな物体を威嚇しています。

「うわ！こっちにも来るか！」

クロ兄！？

「あっちいけー！」

私の声に、クロ兄を囲んでいたスライムが引いていきました。精霊が怖いのか？

「お、おい。大丈夫か！？」

何あれ！？タイタンが何かにとりつかれてます！？

「さあデュエルを続けようか。本当の闇のゲームを！」

「まだ闇のゲームとか言ってるやがる！第一お前逃げるんじゃないのかよ！」

「闇のゲームが発動した以上、勝敗が決するまで逃れることは出来ない！」

「そつちがやる気なら付き合っぜ。行こっぜ黒兎！」

「ああ。負けられない理由が増えちまったぜ！」

いつの間にか、周りを黒い何かが囲んでる。勝敗が決するまで逃げられないってことは、勝てば出られるってこと。

「クロ兄、十代さん負けないで！」

SIDE 十代

なんだっただタイタンの奴。まあいいや。とりあえず負けねえ！

「私のターンの途中だったな。まあこれ以上出来ることもない。ターンエンドだ。」

手札2枚

6ターン目 十代

手札3枚

「俺のターン、ドロー！」

サイコロで無効にされちゃ意味がねえ。戦闘で倒してやる！

「魔法カード『戦士の生還』発動。墓地にいる戦士族モンスター、スパークマンを手札に加えて攻撃表示で召喚。」

さあいくぜ！

「バトル！エッジマンでジェノサイドキングデーモンに攻撃！パワ

「エッジ・アタック！」

エッジマンがジェノサイドキングデーモンをぶった切ってやったぜ！

タイタン ライフ5600 5000

「ぬう。だがジェノサイドキングデーモンが破壊された時、手札のデスルークデーモンを墓地に送り、ジェノサイドキングデーモンは復活する！」

切られた体がくっついてまた立ち上がった！？

「かまうもんか！スパークマンでダークビショップデーモンに攻撃！スパークフラッシュ！」

スパークマンの攻撃にダークビショップデーモンが爆発した。

「どうだ！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

手札1枚

7ターン目 タイタン

手札2枚

「私のターン、ドロ！。スタンバイフェイズ、墓地に眠るプリズンクインデーモンの効果発動。万魔殿がある時、自分フィールド上のレベル4以下悪魔族モンスター1体の攻撃力を1000ポイント上げる。私はジェノサイドキングデーモンを選択。女王の嘆き！」

墓地からプリズンクインデーモンの叫びがあがり、ジェノサイドキ

ングデーモンの威圧感が増していく。

ジェノサイドキングデーモン ATK 2000 3000

エッジマンの攻撃力を超えちゃった!?

「まだまだ。リバーズ発動『デーモンの雄叫び』。ライフを5000ポイント払って発動する。私の墓地からデーモンと名のつくモンスター1体を特殊召喚する。蘇れ『プリズンクインデーモン』!」

墓地から鎖に縛られた悪魔が現れその鎖をちぎってしまう。

タイタン ライフ5000 4500

「これこそ万魔殿に幽閉された女王だ。さあいくぞ。バトル!プリズンクインデーモンでエッジマンに攻撃!クインチェーン!」

「相打ち狙い!?!迎え撃てエッジマン!パワー・エッジ・アタック!」

エッジマンの刃が相手に届くのと鎖に貫かれるのは同時。2体とも爆発しちゃった。

「リバーズカード発動『ヒーロー・シグナル』!自分フィールド上のモンスターが戦闘で破壊された時、手札かデッキからレベル4以下のE・HERO1体を特殊召喚できる。来い!『E・HEROフェザーマン』!」

フェザーマンが舞い降り、自身と俺を守るように両手を組む。

E・HEROフェザーマン ATK1000 DEF1000

「失敗だったな。ジェノサイドキングデーモンでエッジマンを攻撃すれば2体のモンスターは残ったのに。」

「いいやこれでいい。どのみちデーモンの雄叫びで蘇生したモンスターはエンドフェイズに破壊される。そして、自分フィールド上のレベル8以上のモンスターが墓地に送られたことで、手札から速攻魔法『デーモンとの駆け引き』を発動する。」

プリズンクインデーモンの消えた場所に黒い靄みたいなのが出てきた。

「この狂った竜を操るには、高レベルモンスターの魂が必要なのだ。」

その靄のむこうから、巨大な竜が姿を現す。いったい何が出てくるんだ!?

「さあ!全ての敵に死を!蹂躞しろ」バーサーク・デッド・ドラゴン
「...」

バーサーク・デッド・ドラゴン ATK3500 DEF0

「攻撃力3500!?!」

「また厄介な奴出しゃがって!」

「まだバトルフェイズは終わっていない。いけ!バーサーク・デッド・ドラゴン!スパークマンに攻撃!死の息吹!」

スパークマンがあいつの吐き出した息を浴びて腐っちまった!?

「くっそおおお!」

十代&黒兎 ライフ6200 4300

「バーサーク・デッド・ドラゴンは全ての相手モンスターに攻撃できる。続けてフェザーマンに攻撃! 死の息吹!」

フェザーマンまで!

「これで貴様らを守るモンスターはいなくなつた。いけ! ジェノサイドキングデーモンでダイレクトアタック! 炸裂五臓六腑!」

「うわあああああ!」

十代&黒兎 ライフ4300 1300

「十代! 大丈夫か!?!」

「クッ! なんだ? さっきまでと全然違つぞ!」

またスライムみたいなのが来たけど、ハネクリボー達が追い返してくれる。

「クリクリッ!」

「こっちは任せて下さい!」

「フフフ。闇のゲームなのだ。違うのは当たり前だ。私はこれでターンエンド。エンドフェイズにバーサーク・デッド・ドラゴンの攻撃力は500ポイントダウンする。」

バーサーク・デッド・ドラゴン ATK3500 3000

手札1枚

8ターン目 黒兎

手札4枚

バーサーク・デッド・ドラゴンの体から臭気が立ち上って、威圧感が少し減った。けどまだ3000もあるのかよ。

「クリクリッ！」

「絶対勝ってっ？安心しろ。俺達はまだ諦めてないぜ。なあ黒兎！」

「ああ！俺に任しとけ！俺のターン、ドロー！」

黒兎も微塵にも不安になっぢゃいない。こんな場合なのにわくわくするぜ！

「よし！いくぞリン！」

「まっかせて！」

「俺は『召喚師セームベル』を攻撃表示で召喚。」

召喚師セームベル ATK600DEF400

リンがフィールドに飛び出す。ポーズまで決めてる！？今度ハネクリボーにもやってもらおうかな。

「クリ〜。」

「冗談だって相棒！」

「何してるんだ？セームベルの効果。手札からセームベルと同じレベルのモンスターを特殊召喚できる。『シールド・ウイング』を特殊召喚。」

「来て！シールド・ウイング！」

シールド・ウイング ATK0 DEF900

「そんなモンスター達では私のモンスターに勝てんぞ。」

「わかってるよ。だからエースを呼ぶ。場のセームベルとシールド・ウイング、墓地のハーピー・レディを除外。この場を取り囲み制圧しろ！舞い上がれ『Theアトモスファイア』！」

「クオオオオオオ！」

ファイアが咆哮をあげて俺達の場に舞い上がる。

Theアトモスファイア ATK1000 DEF800

「今回も頼むぜファイア。アトモスファイアの効果発動。相手の場のモンスター1体を装備し、その攻守を得る。バーサーク・デッド・ド

ラゴンを装備する。サクリファイススフィア！」

バーサーク・デッド・ドラゴンがフィアのスフィアに閉じ込められた。

Theアトモスフィア ATK1000 4500

「な、なんだとお！？攻撃力4500！？」

「いくぜ！アトモスフィアでジェノサイドキングデーモンを攻撃！テンペストサンクシヨンス！」

バーサーク・デッド・ドラゴンの詰まったスフィアにジェノサイドキングデーモンが潰される。フィアって意外と容赦ないな。

タイタン ライフ4500 2000

やった！一気に大ダメージだ！

「ぬう。だがキングはそう簡単に死なん！手札のデスルークデーモンを墓地に送り、蘇れ！ジェノサイドキングデーモン！」

まだ立ち上がるのかよ！？いい加減しつこいぜ。

「俺はリバースカードを1枚セット。ターンエンドだ。」

手札0枚

9ターン目 タイタン

手札1枚

「まだだ。私のターン、ドロー！」

俺達の間にはファイアがいる。手札1枚で何をしてくるんだ。

「やったぞ！手札から速攻魔法『サイクロン』発動！装備状態のバ
ーサーク・デッド・ドラゴンを破壊だ！」

ファイアを持つファイアが壊されちゃった！？

Theアトモスファイア ATK4500 1000

「これで再び逆転だ！ジェノサイドキングデーモン！あの鳥を殺せ
！炸裂五臓六腑！」

ジェノサイドキングデーモンの攻撃がファイアに迫る！？やられたら
流石にキツイぜ！

「その程度でファイアを倒したつもりか？リバーズカード発動『ゴッ
ドバードアタック』！ファイアを生け贄に相手のカード2枚、ジェノ
サイドキングデーモンと万魔殿を破壊だ！」

ファイアが巨大な火の鳥になって、フィールドごと悪魔を焼き尽くし
ていく。

「ば、馬鹿な。」

「まだ何かあるのか？」

「た、ターンエンドだ。」

手札0枚

10ターン目 十代

手札2枚

「頼んだぜ。十代。」

黒兎は相手のフィールドを空にしてくれた。これで応えなきゃ男じゃないぜ！

「吠えたところでお前の手札はドローしても2枚だけだ。そしてお前のE・HEROは融合しなければたいした攻撃力はない。次のターンで巻き返してやるわ！」

あいつも手札無いのにどうやるつもりだ？ま、ドローしないと始まらないぜ！

「見てろよ。俺のターン、ドロー！」

応えてくれ！

「さあ何が引けたのだ？」

「俺が引いたカードは…魔法カード『強欲な壺』だ！2枚ドロー！」

「なんだと！？」

「よっしゃあ！さすが十代だぜ！」

これで揃った！

「そして魔法カード『融合』を発動！手札の『E・HEROバース
トレディ』と『E・HEROクレイマン』を融合。現れる！『E・
HEROランパートガンナー』！」

E・HEROランパートガンナー ATK2000 DEF2500

「そんなことが…！」

「これでとどめだ！ランパートガンナーでダイレクトアタック！ラ
ンパート・シヨット！」

「ぬわあああああ！」

タイタン ライフ2000 0

WIN 十代&黒兎

SIDE 黒兎

タッグデュエルになっちまったが、なんとか勝てたか。

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ。」

さて、十代の決めゼリフも済んだしここからだ！

「うわー！やめろ！助けてくれー！」

「おっすっげー！どうなってんだあれ？」

タイタンがスライムに飲み込まれた。十代、感心してる場合じゃない！

「リン！タイタンからスライムを引きはがせるか？」

「わかんない。でもあれは精霊を怖がってたから、もしかしたら。」

「か八かか。」

「リン、頼む！」

「わかった。やってみる！」

リンがスライムにむかって力？を放出する。新たにスライムが来なくなったがまだ足りないか？

「クリー！」

「どうした！？ハネクリボー！」

ハネクリボーがリンの横で協力してくれた。タイタンの口からスライムが出てきた！

「よし！もう少し！」

「クリー！」

スライムが出尽くしたのか、タイタンは倒れてしまった。

「いったいなんなんだ？すげえな！」

十代、天然かましてる場合じゃないぞ！

「クリッ！クリクリー！」

「クロ兄、十代さん！こっちから出られる！」

見るとリンとハネクリボーが周りの闇に穴を開けてくれている。

「助かった！行くぞ十代！」

「わかった！あそこが出口なんだな！」

タイタンを抱えて穴に飛び込む。助かった！

「うおっと！」

「アニキー！」

「黒兎も無事なんだな！」

「皆無事だな！早く離れるんだ！」

確かこの塊は…

「その人誘拐犯じゃ！」

「いいから離れ……」

ドンー！

「「「うわー!」「」」

やっぱり爆発しやがった!

「皆無事か?」

「おおー!今度はタネがまるでわからねえ!」

「大丈夫つす。」

「だな。」

十代それどころじゃないだろう。まあ無事ならいいか。

「で、なんでその人を抱えてるんすか?黒兎君。」

「ああ。ちゃんと説明する。今は明日香を連れてここから離れよう。」

移動中

やっと廃寮から出られたぜ。タイタン抱えてだったから疲れた。

「ん…ここは?」

「タイタン。目が覚めたか。」

タイタンも気がついたみたいだ。ちょうどいいタイミングだ。

「大丈夫か？」

「私は…そうか。君があの手から助けしてくれたのか。ありがとう。」
タイタンが礼を言うが、俺はただ少しでも嫌な事件を減らしたかっただけだ。

「それでタイタン。なんでお前はあそこにおいて、明日香を掠ったりしたんだ？」

十代が早速聞いている。すぐすぎる気もするが、友達のピンチだもんな。

「私はある人物に雇われたのだ。遊城十代と天川黒兔をデュエルで倒してくれとな。」

「雇われた？誰に？」

「すまないがそれは言えない。こんなことになった以上、この仕事は終わりだが、せめて依頼人を教えるなんて、プロを名乗った以上はしたくない。」

さすがに名前は明かされないか。知ってるけど。

「それじゃあせめて教えてくれ。お前を雇った奴はこの島にいるのか？」

「ああ。そいつが私をこの島に入れたのだ。」

まあこんなもんかな。

「十代。もういいだろう。黒幕は他にいるらしいし。」

「タイタン。明日香は無事なんだろうな。」

あ。一番大事なことを聞いてなかった。

「大丈夫だ。薬で眠らせたただけだ。時期に目を覚ます。」

「ならいいや。それよりも、楽しいデュエルだったぜ！またやろうな！」

十代は十代か。

「こんな私にはもつたいない言葉だ。ああ。またやろう。」

タイタン泣きだしちゃったよ。

「アニキ！黒兎君！」

「目を覚ましたんだな！」

明日香も無事か。

「うん……」

「気がついたか！」

「十代。あなた達どうしてここに？」

「悪かったな。変な目に合わせて。でも安心しろよ！明日香を襲った奴は捕まえたぜ！」

「！あなたは！よくも！」

さすがに激昂するわな。だけど話を聞いてもらわないと。

「明日香。落ち着いてくれ。もう大丈夫だから。ほら。タイタンも。」

「うむ。すまなかった。手荒な真似をして。怪我などはさせていないが、謝ってすむことではないのはわかっている。私に出来ることならなんでもする。」

「なんで私を掠ったの？」

「ある人物に、遊城十代と天川黒兎を倒してほしいと依頼されてな。おびき寄せる餌にさせてもらった。」

「雇われた。じゃああの寮については何も知らないの？」

「ああ。依頼人が奴らはここにくるはずだからとだけ言っていたの。でな。利用しただけだ。」

「じゃああの噂と関係ないのかよ！」

十代。がっかりするところなのか？調べるって本気だったか。

「そつ。ならいいわ。」

「いいのか？」

「ええ。ただ、もうこんなことはやめてね。」

「わかった。本当にすまなかった。ありがとう。」

そういうとタイタンは立ち去っていく。なんとか救えたか。

「ありがとうな。リン。」

「ハネクリボーも手伝ってくれたからだよ。」

「クリクリ〜。」

「ああ。ありがとう。」

「そうだ！明日香、えっと、これと…これ！」

振り向けば、十代が明日香に見つけた写真とカードを渡している。

「兄さん！間違いない。これは兄さんのサイン。兄さんはいつもシヤレで『天』を数字で書いてたから。」

吹雪さん。自作のサインを妹に見せるってどうなの？

「ごめんな。これしか手掛かりが見つけれなかった。話を聞いて、少しは役にたてるかなって思ったんだけどさ。」

「それじゃ、あなたわざわざそのために？」

驚いてるけど本当だぞ。

コケコッコー！

「やばっ！皆が起き出す前に戻ろっぜ！」

「明日香さん。」

「それじゃあ！」

「お前も気をつけて！」

これで十代の明日香フラグは立ったかな。今回原作を大きく外した。リンが言うにはこの世界は原作と似ているだけらしい。これから些細なことが大きなこと、どちらにしる変化は起きるはず。それでも俺は、自分の選んだ道を進む！

「黒兎ー！急げ！」

「急がないとマズイっす！」

「速く走るんだな！」

「ああ！待ってくれ！」

第十話 新たな物語 (後書き)

初のタツグいかがでしたか？

ちよくちよく感想で改善した方がいいことを教えていただけているので、今後の話作りに反映出来たらいいな。

次回はデュエルに入れるかな？とりあえず例の組織が動きます。それでは。

第十一話 異端審問会登場 (前書き)

ぎりぎり目標日数内でしょうか？

遅くなりすみません。

今回はついにあの組織が動き出します！

タイトルでネタバレは遊戯王の宿命です！

それと今回は、かなりの部分某ラノベのパクリです。
気分を害される方はすみません。

第十一話 異端審問会登場

SIDE〜リン〜

廃寮から帰って、すぐに授業に出ることになったから、今日のクロ兄は寝てばかりです。事情は知ってるけど、もう少し起きようって気はないのかな？

「ZZZ」

気持ちよさそうに寝てる。デュエルしているときと違って無防備な顔は、なんだか可愛いかも。

キーンコーンカーンコーン

あ！チャイム鳴っちゃった。これでクロ兄は今日の授業全てを寝てしまいました。いい加減起こさないと。

「クロ兄。授業終わったよ。寝るなら帰って寝ようよ。」

「ん…ああ。また寝ちゃったか。ふわあああ〜」

大きな欠伸。そんなことばかりしてたら何か言われちゃうよ。

「黒兎。リンちゃんを目覚まし代わりに使っんじゃないわよ。」

「咲夜さん。」

「ヤッホー。リンちゃんも大変ね。こんなマスターで。」

「今日一日ずっと寝てたんじゃないかしら。」

「あゝ。多分ソルの言う通りだわ。」

クロ兄。言う通りだわ。じゃなくて。

「そんな眠いだなんて。昨日は何をしていたの？」

「んゝ。まあ十代達とちよつとな。」

あんまり詳しくは話さない。ほいほい話せることじゃないよね。

「まったく。今日は早く帰って寝た方がよさそうね。あまりリンちゃんに負担かけちゃダメよ。」

「わかってるって。お前は俺の母さんか？」

ああクロ兄。そんなこと口走ったら。

「だ、誰が母さんよ!」

案の定、咲夜さんが壊れた。

「そついうあんたは父さんよ!」

「落ち着け咲夜。意味がわからん。」

「伝わらない咲夜が不憫だわ。」

ソルがため息を一つ。まあ私としては伝わらない方がいいんですけど。

「まあいいや。じゃあな咲夜。また明日。」

「咲夜さん、ソル。またね。」

「まったね〜。」

「え、あ、気をつけて帰りなさいよ。」

クロ兄と手を繋いで帰宅です。一緒にいる時はいつも繋いでくれるから、散歩とか大好きです。

「クロ兄。寮まで頑張つて。寝ちやダメだよ。」

「大丈夫。授業バツチリ寝たからむしろこれから本調子だ。」

「何か間違つてるよ!?!?」

でも本当に元気です。学生として正しいのかな?

その夜

本当にクロ兄元気です。もう日付が変わりそうなのに、なにやら「そごそやってます。さっきまでカードをいじつてて、終わったかと思ったら。」

「ねえ。何してるの?」

「ん〜。内緒。明日の朝にはわかると思うよ。」

教えてくれない。ドアの辺りを色々やってるけど、私にはさっぱりです。」

「よし。こんなもんかな。さすがにもう寝るか。」

終わったみたい。寝るなら私も準備してっと。

「リン。もう寝るよ。」

「はい。」

クロ兄と一緒に布団に入ります。最初は色々言われたけど、最近は何も言われません。やりました。

「じゃ、おやすみ。」

「おやすみなさい。」

クロ兄を抱き枕にするのも日常です。今夜もぐっすり寝れそう。

SIDE 黒兎

「開ける！速やかにここを開けるんだ！」

なにやら外が騒がしい。ってことは倫理委員会が来たか。

「開けないならこのドアを爆破する！」

爆破もなにもあんたらの連打でドアが壊れそうだ。

「あんまりドア叩かないでもらえる？」

「起きてるならさっさと開ける！」

ドン！

ボン！

あーあ。だからあんまり叩くなつて言ったのに。

「本当に爆破する人がいたんですね。」

「まて！今そのドアは内側から爆発したぞ！」

外に出てみると廊下から飛んでいったのだろう倫理委員会の奴が下から叫んでいた。ちつ丈夫な奴め。

「クロ兄。まさか昨日のつてこれ？」

「いやー酷い人だ。本当に爆破されるなんて思いませんでしたよ。」

「白々しい嘘を言うな！」

「ピースを私に向けながら言われても。」

2人からのツッコミ。まあこんなところだろう。そろそろ横からの視線に応えよう。

「んで。」
「ご用件は？」

「天川黒兎。君を彼らと共に査問委員会まで連行する。」

見れば十代と翔も捕まっていやがる。やれやれ。

アカデミアとある部屋

「「「退学!?!?!」」」

「先日未明、遊城十代以下2名は、閉鎖され立入禁止となっている特別寮に入り込み内部を荒らした。調べはついている!」

「全くあなたたちドロップアウトボーイはいつたいたいどれだけ問題を起こせば満足ナノーネ。」

なんて一方的な。

「待ってくれよ!なんでも言う事聞くから...」

「待て十代。委員会とクロノス先生。調べはついていると言ったがこちらの言い分を聞いて下さい。」

「言い訳など聞きたく...」

「いいでしょう。話して下さい。」

「鮫島校長。」

助かった。校長からは色々期待されてるからな。

「まず、皆さんは天上院明日香の兄が行方不明となっているのは存知ですか?」

「もちろんナノーネ。あんな優秀な生徒を事件の被害者にしてしまつて悲しいノーネ。」

「その兄はあの寮で行方不明となつたそうですね。俺達も明日香から聞きました。そこで俺達は何か手掛かりがないかと探しに入つたんです。」

「それはアカデミアも充分やつたノーネ。」

写真残つてたぞ。真面目にやつたのか？

「まあ理由はともかく、俺達は寮に入つたんですが、そこでとある決闘者とデュエルすることになりました。」

「決闘者がいたのかね。」

「はい。そいつはあろうことか明日香を人質に取り、変な細工までして俺と十代を倒しにきました。まあ幸い俺達が勝ち、明日香も無事だつたんですが。」

おーおー。クロノスの奴尋常じゃない汗かいてやがる。

「ふ、ふん。どうせ嘘の話ナノーネ！」

「証拠としてPDAで撮影しました。見てもらえますね？」

タイタンに頼んで話してもらい、撮影してきたんだ。これでどうだ！

『私は、アカデミアにいとある人物に雇われ、遊城十代と天川黒

兎を倒すためにこの島に招かれたタイタンと言う者だ。仕事は失敗に終わり、誰にも被害はなかったが、天上院明日香という女生徒を薬で眠らせ人質とした。アカデミア関係者よ申し訳ない。遊城十代と天川黒兎はこんな私を助け、見逃してくれるという。恥ずかしながら私はこの好意に甘えたい。スマナイが彼らに詮索などはしないでやってほしい。そして、今明かしたのは全て真実である。プロとして、仕事を引き受けた以上依頼人の名は明かさないが、その人物は確かにアカデミアにいる。私が言うのも変な話だが、そちらの調査をした方がいいだろう。以上だ。本当に申し訳なかった。』

それじゃあ攻めさせてもらいましょうか。

「さて、今の映像でわかる通り侵入者がこのアカデミアにいました。そして、それを手引きした者もアカデミアにいる。どうなっているんでしょうね？俺達が侵入したことをすぐに調べあげた倫理委員会が見逃した？学校側も侵入者がわからないようなザルなんですか？俺はいい。だが無関係に人質となった明日香には？」

あーあー。誰も何も言わなくなっちゃった。情けない奴らだね。

「倫理委員会さんや。あんた達は俺達の侵入しかわからなかったのか？」

「あ、ぐ。」

「クロノス先生、鮫島校長。島の外との連絡は誰が管理してるんですか？」

「クロノス先生だ。」

「二ヨ!?」

「ではクロノス先生。あなたは不審な通信ないし連絡を見逃したってことだ。」

「そ、それは。」

「さて、それをふまえたうえで、俺達の判決を。」

おやおや。誰もしゃべれない。一応俺達も不法侵入っていう罪を犯したんだが。

「そうですね。さすがに私達がこんな有様では。どうですかクロノス先生。先程の案は。」

「はっ! そうノーネ。わかりました。あなた達だけが悪かったわけではない。しかし罰は罰として受けてもらうノーネ。」

「おう! 退学にならないならなんでもいいぜ!」

十代。なんでもなんて言うな。

「それは制裁デュエル! 遊城十代、丸藤翔。君達2人にはタッグデュエルを。天川黒兎、君にはシングルデュエルをやってもらうノーネ!」

結局原作通りになるのか。

「タッグデュエルか…面白そうだな!」

「ええ！？そんな、マズイツすよアニキ！」

「俺だけシングルか。まあいいか。」

「校長。彼らも納得したようデスーガ？」

え？翔の納得でいいの！？

「ならばそれでいきましょう。ただし、負けたら退学です。それは学校のルールです。わかって下さい。」

「ええ！？結局退学はありえるのかよ！」

「十代。一応俺達も罰を受ける身だ。それにお前がなんでもやるって言ったんだぞ。」

「日時はおつて伝えるノーネ。それでは今日は帰っていいノーネ。」

放課後

「僕なんかじゃダメだー！絶対負けて退学だー！隼人君、僕と代わってくれよー！」

「そう思ったんだけど、査問委員会で決まった事は変えられないんだな。」

「心配すんな！勝ちやすいんだろ？勝ちやあ！」

「そんな簡単に。タッグデュエルやった事あるんすか？」

「ない。だから面白いんじゃないか!」

「そ、そんな〜!」

原作通り、翔が不安に襲われてやがる。まあこっちはこのまま原作に沿っていくだろう。問題はイレギュラーの俺だよな。

「まずは腕試しにデュエルといこうじゃねえか!」

「え〜。」

「黒兎はどうするんだ?」

あいつらはこれからデュエルか。とりあえずどうするかは置いて見に行くか。

「俺も一緒に行く。なんだったら俺と翔もデュエルだ。」

「え〜。黒兎君とも〜。」

「俺ともやってくれよ!」

十代がやる気になっちまった。とりあえず外に行こう。

移動中

さて、寮の下にある崖下でデュエルすることになったわけだが。

「十代、翔、俺は何もしてやれないけど。」

「きつと大丈夫よ。制裁タッグで落ち込んでるかと思っただけだか楽しそうねあいつ。十代に関わった人間は皆元気になる。きつと翔君も。」

「でも明日香さん。あいつ元気になる前に潰れそうですよ。」

「あんな状態で大丈夫なのでしょう。」

いつの間にかいつものメンバーが揃ってやがる。どこから嗅ぎ付けたんだ？

「ところで黒兎。あんたはいいの？」

「咲夜？いって何がだ？」

何をこいつは不安げな顔してるんだ？

「あんたもシングルとはいえ、退学がかかってるんですよ。デッキの調整とかで、誰か相手にやってみた方がいいんじゃない？」

そういうことか。負ける気がないとはいえ原作にはないこと。何が起きるかはわからん。確かに何かやった方がいいか。

「そうだな。じゃあ咲夜。付き合ってくれ。」

「ふえ！」

「そんな風に俺の事を考えてくれるなんて。咲夜がきつと適任だ。頼む！俺に付き合ってくれ！」

あれ？顔を真っ赤にして固まっちゃった。

「おーい？咲夜ー？」

「クロ兄。またやった。」

「今回は目の前だからね。咲夜帰ってこられるのかしら。」

リンとソルが何やら話してるけど、心あたりがあるならなんとかしてほしい。

「黒兎のあれ。無自覚なのかしら。」

「私はわざとやってるんじゃないかと。」

「どちらにせよ、咲夜さんが可哀相ですわ。」

どうしよう。咲夜も原作にはいなかった。だから咲夜に頼めばそんな変化ないと思ったんだけど。

「咲夜ー。聞こえるかー。」

「……………せて。」

「ん？」

「私を黒兎と付き合わせて！」

「黒兎、歯を食い縛れっ！」

それは、全くの不意打ちだった。目の前には硬く握り締められた大きな拳。突風が走り抜けたような素早い踏み込みと細められた瞳からは明らかな殺意の気配。そして、俺の頬には - 固く暑苦しい三沢の拳の感触が伝わってきた。なんなんだ？何が起きている？どうして三沢やレッド、イエローの皆が得物を構えて囲んでいるんだ？どうして俺の視界はこんなにも揺れているんだ？何もわからないでいると、三沢は弾かれたように俺から離れて、

「そ、その…冗談とかじゃ、ないからな…っ！…っ！…本気でクロス」
手を挙げて周りの皆に合図を出した。

「ま、待て！いつたいなんだって言うん - 」

そこで俺の意識は暗転。闇の中に落ちていった。

『諸君。ここはどこだ？』

『『『最期の審判を下す法廷だ！』』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』』

『宜しい。これより・アカデミア異端審問会を開催する!』

目を覚ますと、そこはサバトの会場だった。

「え?あれ?どういうこと?」

暗幕が引かれていてよくはわからんが、板の感触やだいたいの広さから、ここはレッド寮の食堂だろうか。奥には何やら祭壇のような物を置いて、赤や黄色、少しだが青もいるな。カラフルな覆面集団が騒いでいる。くそ。手足が縛られてる。

「で、いったいこれはなんなんだ?」

とりあえず近くにいた奴に声をかける。

「気がついたか。三沢会長。異端者が目を覚ましました。」

三沢だと?奥から黄色の覆面が1人歩いてきた。手に何か握ってるが、精神衛生上見ない方がいいと脳が警告している。

「気がついたか。黒兎、君は我らが教理に反した疑いがある。よって異端審問会にかけさせてもらう。」

「何を言ってる...」

「罪状を読み上げたまえ。」

ええい。話を聞け!

「はっ。三沢会長。えー、被告、天川黒兎(以下、この者を甲とす

る）は、我がアカデミア第一学年レッド寮の生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。甲の罪状は偽称の強要及び背信行為である。本日午後5時頃、甲がアカデミアブルー女子寮の生徒である種島咲夜（以下、この者をポニーテールとする）に対して偽りの発言を強要していたところを我らが同胞が確保。現在に至る。今後、甲とポニーテールの関係に対して十分な調査を行った後、甲に對してしかるべき対応を。」

「御託はいい。結論だけを述べたまえ。」

「告白されていたので羨ましいであります！」

「うむ。実にわかりやすい報告だ。自分のおかれている立場はわかっただか？」

え？告白？俺がいつそんなものを受けた？

「おい。なんか色々間違ってるぞ。俺はデュエルの相手をしてほしって頼んで、咲夜がOKしただけだろ。」

「そんな言い訳が通用すると思ってるのか？全て見ていたのだ。言い訳は立場を悪くするぞ。」

ダメだ。根本的に話が通じない。いったいどうしたら。

「異端者、天川黒兎。汝は自らの罪を悔い改め、裁きを受け入れるか？」

神妙な声で俺の返事を待つ三沢（？）。これは迂闊に返事も出来ないな。

「返事をする前に質問をいいか？」

「聞いてやるう。」

「裁きつて、何だ？」

尋ねると、三沢（仮）はわずかに目を細めて告げた。

「まず、灯油とライターを用意して……」

「濡れ衣だ！俺ほど教義に順ずる信徒はいない！」

誤解でこんがり美味しく焼かれてたまるか！

「そうか。それならば、告白を強要するまでだ。」

「言った！今いきなり『告白の強要』って言いやがった！？この裁判は無効だ！」

『そつだ！告白を強要しろ！』

『議事録を改竄しろ！』

くそー！こいつらノリだけで動いてやがる！このままじゃ絶対に殺られる！

「リン！実体化して手足の紐を解いてくれ！」

実体化しても奴らには見えん。自由になりさえすれば……

「あれ？リン？おーい！」

おかしい。いつもなら呼べば来てくれるのに。すると、カードホルダーから聞こえてくる声。

「クロ兄は1回焼かれちゃった方がいいんじゃないかな。」

リン！何？なんでご機嫌斜め！？よりによってこのタイミングで！

「リン！何だかわからんが助けてくれ！話は後で聞くから！」

「……………」

「お願いだ！なんでも言う事聞いてやるから！」

「…約束だよ？」

確認すると、リンが紐を解いてくれた。助かった！

「会長！異端者が逃げ出しました！」

「馬鹿な！確かに手足を縛ったはずだ！」

後ろの騒ぎなど気にしない。食堂の扉を開け、外に飛び出し -

「黒兔！大丈夫…キャツ！」

なんで咲夜が目の前に！？とにかくこの状況で余計な誤解が生じないように…

「無理だー！」

とにかく咲夜が怪我をしないように抱え込む。一緒に地面を転がってなんとか止まった。

「咲夜！ゴメン！大丈夫か！？」

声をかけるが真っ赤になったまま動かない。どっか当たっちゃまったか！？

「天川黒兎ー！貴様、脱走を企てた上に、目の前で強制猥褻の現行犯だぞ！そこまでして死にたいかー！」

「ち、違う！これはたまたま。偶然の事故だ！」

「聞く耳持たんわー！」

やはりダメか。今の俺が何を言っても火に油を注ぐだけ。かと言って咲夜をこのままにしておけない。こうなったら。

「おい。」

「か八か、あの世界では100%通る文句を！」

「デュエルしろよ。」

「何？」

「もともと俺はデュエル相手が欲しかったんだ。俺がデュエルに勝

「 っ たら見逃してもらっ っ 。」

「 どうだ! ? 」

「 ふむ。いいだろ っ 。ただし! 負けた時は、貴様は明日の朝日を拝めな っ いと思え。」

「 やった! 本当に通るなんて。でもあいつら目がマジすぎる。負けたら確実に殺られる! 」

「 ここはやはり会長がいかれますか? 」

「 いや。ここはやはり我々の在り方というものを黒兔に見せつけてやらねば。も っ とも我々の教義に忠実である者、須川。行けるな。」

「 はい。天川に異端者の末路を教えてやりますよ。」

「 ふむ。相手は須川というらしい。全員覆面だから違いがわからんが。」

「 よろしく頼むぜ。須川。」

「 異端者には死を。異端者には死を。異端者には死を。異端者には死を。死を。… 」

「 何かぶ っ ぶ っ 咳いているような。いや。き っ と気のせいだ。そうに決ま っ っている! 」

「 ねえねえクロ兄。命がかか っ てるんだし、当然私達だよね。」

「 リンが当然のように聞いてくるが、何だろ っ ? あいつらにリンを見

せてはいけない気がする。

「いや。今回はリン達は使わない。というかあいつら相手には絶対使わない。」

「えー！なんで！？さっきなんでも聞くって言ったじゃん！」

いや言っただけだね。あの本当に命かかっているとところで、拗ねて助けてくれないような子のいうことなんてね。

「嘘つき嘘つきー！クロ兄なんて裁かれちゃえばいいんだ！」

「まあこのデュエルが終わってから判断してくれ。俺は、お前のためにもいつものデッキは使わない。」

さて。あちらさんも準備が整ったみたいだ。今回はやっと組んでやれたこいつらでいくか。

「んじゃ。俺の制裁デュエルトレーニング、付き合ってくれ。」

「これより異端者の審判を開始する。」

「デュエル！」

先攻 黒兎

手札 6枚

「俺のターン、ドロー。」

よし。まずまずの手札だ。まずは様子見で。

「俺はモンスターをセット。リバーカードを1枚セットして、ターンエンドだ。」

手札4枚

後攻 須川

手札6枚

「俺のターン、ドロー。」

さて、俺の予感が正しければあいつらのデッキは。

「俺は『斬首の美女』を攻撃表示で召喚。」

現れるのは、巨大な首切り用の刀を持つ和装の女性。

斬首の美女 ATK1600 DEF800

「和服美女キター！」

「うなじが眩しいぜ！」

「貴女になら切られても構わない！」

そして騒ぎだす敵側ギャラリィ。やはり女モンスター中心のデッキだったか！

「斬首の美女でセットモンスターを攻撃。首切りの刃！」

美女がその手に持つ巨大な刀を振り上げ襲い掛かり、俺のモンスターが姿を現す。すると、鋭い稲妻が走り刀を弾く。

「俺のモンスターは『幻獣サンダーペガス』。守備力はお前のモンスターの攻撃力より上だ。」

幻獣サンダーペガス ATK700 DEF2000

須川 ライフ4000 3600

「幻獣だと！？試験の日に手に入れたカードか。」

あの時あの場にいた三沢が悔しそうに呻く。だがそれよりも周りの連中から殺意の視線が。

「天川貴様！何故いつものデッキを使わない！」

「共にカードを愛する同志だと思っていたのに！」

「セームベルちゃんを隠すとは、やはり貴様は異端者だ！」

「『そうだ！セームベルちゃんを見せろ！』『』」

そうだと思ったから使わなかったんだよ！気の早い奴らはすでに得物を構えだしやがった。場合によってはデュエル関係無しに裁かれるな。

「セームベルたんを使わないとは貴様、我らを愚弄するか！」

「うるせえ須川！俺の仲間を『たん』なんて付けて呼ぶな！」

デュエルと関係ないところで熱くなっていると、リンが話しかけてきた。

「く、クロ兄。使わないでくれてありがとう。後、さっきはごめんなさい。」

「わかってもらえてなによりだ。」

リンの顔が青い。やはりあんな異常な集団に好かれても嫌だろう。しかし、いつもと違うデッキだと相手がキレるのは何故？

「くそ。俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。」

手札4枚

3ターン目 黒兔

手札5枚

「俺のターン、ドロー。『幻獣ワイルドホーン』を攻撃表示で召喚。」

手にサーベルを持った二足歩行の鹿が俺の場に現れる。このデッキのメインアタッカーだ。

幻獣ワイルドホーン ATK1700 DEF0

「ワイルドホーンで斬首の美女に攻撃！」

ワイルドホーンがサーベルで切り掛かると、須川の場のリバースカ

ードが表になる。

「甘いぞ天川！リバーズ発動『ジャステイブレイク』！表側攻撃表示の通常モンスター以外のモンスターを全て破壊する。見るがいい！我ら異端審問会の正義の雷を！」

青白い電撃は、フィールドを駆け巡り、俺の幻獣のみを焼き捨てていく。

「しまったな。俺はリバーズカードを1枚伏せてターンエンドだ。場が空いちまった。けどリバーズは今は無意味。少しは悩んでくれ。」

手札3枚

4ターン目 須川

手札5枚

「俺のターン、ドロ。天川。今貴様の場にモンスターはいない。そのリバーズカードが頼みの綱だな。」

「まあそうだな。」

「ならばその1つをどうにかさせてもらおう。魔法カード『おとり人形』発動。」

場に呪いの藁人形みたいなのとトンカチが出現した。向こうに俺の写真を貼った藁人形が置かれた魔法陣が出現した。

「エロイムエツサム」

「エロイムエツサム」

「エロイムエツサム」

「エロイの大好き。」

「怖いわ！しかも1人だけただのアピールだろうが！」

いつの間に準備したんだよ！？

「まあ落ち着け。おとり人形の効果。裏側表示の罠カード1枚を強制発動させる。発動タイミングが正しくなかった時、その効果は無効にして破壊だ。先のターンに伏せたカードを選択する。」

俺のリバースカードの上に藁人形が置かれ、もろともトンカチで殴られた。

「ちつ。俺の伏せていたのは『幻獣の角』。タイミングが正しくないから破壊だ。」

「おとり人形は墓地に行かず、デッキに戻しシャッフルする。そして俺は『女剣士カナン』を攻撃表示で召喚する。」

女剣士カナン ATK1400 DEF1400

続いて場に現れたのは、剣と盾を手にした女剣士。そして沸き上がるギャラリィ。

「女戦士もいいね！」

「鎧よりも剣よりも、君の美貌が眩しいよ！」

カナンに喚起されてか剣を振り回す審問会員。どっから用意したんだよ！？

「そして美しい彼女達は力を合わせて異端者を切る。そう。異端審問会の団結のように！永続魔法『連合軍』発動！」

ばらばらに立っていた2体は合流し、互いの死角を補うように並ぶ。

「俺のフィールド上の戦士族モンスターは、自分フィールドの戦士・魔法使い族モンスター1体につき、攻撃力が200ポイントアップする。俺のフィールドはどちらも戦士族。よって400ずつアップだ！」

斬首の美女 ATK1600 2000

女剣士カナン ATK1400 1800

「さあいくぞ！彼女達で天川にダイレクトアタック！」

見事な連携で力の増した2本の刃が俺を切っていく。

黒兔 ライフ4000 2000 200

「ぐあっ！しまった！」

「どうだ天川！異端者に相応しくなってきたではないか！」

「皆！裁きの準備を始めろ！」

三沢が手を挙げて号令をかけると、灯油が入っているのだろう。大量のポリタンクと、燃え盛る松明が幾本も用意される。

「えっ！ちよつと本気か！？」

「異端審問会は他人の幸せを逃がさない。ターンエンド。」

手札2枚

5ターン目 黒兎

手札4枚

「俺のターン、ドロー！」

マズイマズイマズイ。あいつらそこまでやるとは思わなかった。まさか本当に燃やされないだろうが何かしら燃やされる！

「どうした？裁きの時を前に怖じけづいたか？」

「あんな状況みたら誰だって引くわ！俺は『幻獣クロスウイング』を攻撃表示で召喚。」

俺の場に現れるのは金色の体に翼を持つ幻獣。

幻獣クロスウイング ATK1300 DEF1300

「血迷ったか天川！その程度のカードで彼女達に敵うと思っている

のか！」

「さらにリバースカード『連鎖破壊』発動！攻撃力2000以下のモンスターが召喚された時、そのコントローラーの手札とデッキから同名カードを全て破壊する。俺のデッキからクロスウイング2枚を破壊する！」

デッキから2枚のクロスウイングを墓地に送る。

「自分のカードを破壊するとは。いよいよ勝負を捨てたか。」

「そつだと思うか？よく見てみるよ。」

クロスウイングの金色の輝きが増している。

幻獣クロスウイング ATK1300 1900

「な！？攻撃力が増している！？」

「クロスウイングは死してなお、その力を仲間にも与える。墓地にあるクロスウイング1体につき、俺の場の幻獣は300ポイント攻撃力が上がるのさ。」

連合軍は増えれば増えるほど力を増す。少しでも削らせてもらうか。

「クロスウイングでカナンを攻撃！クロスウインド！」

羽ばたいた翼から発生した風の刃がカナンを切り裂く。

須川 ライフ3600 3500

「天川！教義に逆らうに飽き足らず、女性に手をあげるとは！」

「……そうだそうだ！」「……」

ギャラリーから一斉のブーイング。命がかかってるんだ。かまっ
てられるか！

「好きに言ってる。俺はリバーズカードを1枚伏せてターンエンド。

」

手札2枚

6ターン目 須川

手札3枚

「このターンで最後だ！俺のターン、ドロー！」

最後と言っからは決めにくるわな。

「手札から魔法カード『融合』を発動！フィールドの斬首の美女と
手札の『音女』を融合。『戦場の死装束』を融合召喚！」

斬首の美女が着替えたと思えない女が、より大きな刀を持って
現れる。

戦場の死装束 ATK1900 DEF1700

「その衣装も似合ってるよ！」

「お願いだ！切ってくれ！」

「和服美女万歳！」もう慣れてきたな。でも得物を持って騒ぐもんだから危険極まりない。

「1体でも連合軍は有効だ。よって2000ポイントアップ。」

戦場の死装束 ATK1900 2100

「クロスウィングとの差は200。貴様のライフと同じ。これで終わりだ！死装束でクロスウィングに攻撃。戦場の一輪の華！」

「着火用意！」

焼かれてたまるか！

「その前にリバースカード発動だ！『威嚇する咆哮』！このターン、相手は攻撃宣言できない！」

「『ちいつ！』」

もうやだ。あいつら本気で怖いんですけど。

「ならば俺はターンエンドだ。次で終わりだ！」

手札1枚

7ターン目 黒兎

手札3枚

今の俺の手札には突破出来るカードがない。このままじゃ…焼かれる！

「俺は…俺は、死にたくないいいいい！俺のターン、ドロー！」
生きれるのなら、ヘル化だつてしてやるさ！

「よし。このデュエル、お前に託す。クロスウィングを生け贄に『幻獣ロックリザード』を召喚！」

俺の場に巨大な岩が現れ、そこから岩の鱗を持つ上半身と四足の足尻尾が生える。これこそ最強の幻獣、ロックリザード！

幻獣ロックリザード ATK2200 DEF2000

「7星のモンスターを生け贄1体で召喚だと!?!」

「ロックリザードは幻獣を生け贄にすれば1体で召喚出来るのさ。そして墓地のクロスウィングの数だけ攻撃力アップ！」

幻獣ロックリザード ATK2200 3100

どうだ！今なら社長の嫁すら粉碎出来るぞ！

「バトル！ロックリザードで死装束を攻撃。ロックブラスト！」

ロックリザードは咆哮一発、死装束を殴り飛ばした。

須川 ライフ3500 2500

「一度ならず二度までも！」

「須川！しっかりしろ！あいつは絶対焼く！」

「焼かれてたまるかってんだ！ロックリザードの効果。戦闘でモンスターを破壊した時、相手に500ダメージ与える！」

振りぬいたロックリザードの腕からいくつか岩が飛び散り須川に当たる。

「いだだだだ！」

須川 ライフ2500 2000

「俺は2枚カードを伏せてターンエンドだ。」

どっちも意味ないけどないよりマシだ！

手札0枚

8ターン目 須川

手札2枚

「俺のターン、ドロ！天川！貴様の切り札には早々退場してもら
うぞ！」

そんな！？ロックリザードがやられたら後がない！

「魔法カード発動！『ハンマーシュート』！フィールド上に表側表示で存在する攻撃力が1番高いモンスター、ロックリザードを破壊

する！」

へ？

「ロツクリザードよ。光になれー！」

「光になれー！」

異端審問会の想いを乗せて、巨大なハンマーがロツクリザードを潰しにかかる。

「えっ」と、ロツクリザードの効果発動。相手のカードの効果で破壊され墓地に送られた時、相手ライフに2000のダメージを与える。ロツクエクスプロージョン！」

叩き潰される直前、ロツクリザードの全身から、岩が飛び散り、先の比でない量の岩が、須川を打ち抜く。

「そんな！？ギヤアアアアア！」

須川 ライフ2000 0

WIN 黒兎

倒れ伏せる須川に、肩を落とす異端審問会。落ち込みながらも灯油と松明、得物を片付けてくれて一安心だ。

「じゃあこれで裁きとやらはチャラだな。」

「ああ。異端審問会は約束を守る組織だ。」

裁判は偽装しようとしたくせによく言っぜ。

「ところで黒兎。異端審問会に入らないか？セームベルを愛する君とはわかりあえるはずだ。」

三沢が熱く勧誘してくるが、命を狙われた組織に入りたい訳はない。

「悪いがお断りだ。あいつは確かに特別な存在だが、守りたいだけだ。その思いを他人に突き付ける気はない。」

「そうか。残念だ。」

まあ楽しそうだからたまに参加する分にはいいかもしれんな。

「んじゃもう行くぜ。片付けちゃんとやれよ。」

「わかっているさ。咲夜君によろしくな。」

三沢と手を振り別れる。さて、咲夜を介抱しますか。

「クロ兄お疲れ様。」

「ああ。リンに何もなくてよかったよ。」

「エヘッ。私はクロ兄の特別な存在なんだよね。」

「当たり前だろ。」

さて、咲夜の様子は…おっ、気がついたか。

「……黒兎の胸、以外と硬かったな。それに暖かった。」

へ！？

「クロ兄！聞いてちゃダメ！」

「咲夜！しっかりして！本人に聞かれてるわよ！」

「ソル？本人って…く、黒兎！？いつの間に!？」

「い、いや。デュエルが終わったから迎えに来ただけ…」

「そ、そう。じ、じゃあ十代達も終わってるだろうし行きましょ
うか。」

「お、おう。」

「ああ、クロ兄絶対意識しちゃってるよ。」

なんだよさっきのセリフと顔は！あんな幸せそうな顔見たことない
ぜ！それに…可愛かったな。

「あっ！そういえばさっきの付き合ってくれって話。付き合わせて
くれるの？」

付き合わせて？ああ。デュエルの事か。

「それならもういいぜ。試したかったデッキはさっき試せたしな。」

「へ？デツキ？付き合って…って、そういうことなの！？」

なんだ突然慌てだして。そんなに心配なのか？

「心配しなくても退学なんかしないって。ちゃんと帰ってくるから安心しろよ。」

「心配はするわよ。何かあるかわからないんだもの。」

「信じてろよ。この天川黒兎を！」

胸を張り、指を指し、自信満々に宣言してやる。俺はいなくならな
いさ。

「……………そうね。やっぱりそうよね。」

「ん？」

「わかった。信じる。だから、ちゃんと帰ってきてね。終わったら、
大事な話があるから。」

それは何か覚悟を固めた、綺麗な笑顔だった。まるで、これから戦
地に向かう戦乙女のような。

「わかった。絶対帰ってくる。その話とやらを、噛まないようにち
ゃんと練習しとけ。」

だから、その笑顔を汚さぬように。俺も笑顔で返事をするのだった。

「やったわ！咲夜、よく言ってたわ！」

「そんな！？クロ兄に退学してほしくないけど、でも！」

後ろで騒いでなけりや綺麗に終わったのにな。

第十一話 異端審問会登場 (後書き)

いかがでしたか？

人間関係も動き出しましたが、どんな結末にしましょうかね。

次回はデュエル無し回になる予定です。

デュエルが楽しみなのに！という方すみません。

後、長くなるでしょうが、今作の異端審問会についての説明を。

- ・メンバーはレッドとイエロー中心。ブルーは少しです。
 - ・他の男が幸せになることを許しません。
 - ・全員がアイドルカードを持っており、愛しています。
 - ・フードとマントは本家を各寮のカラーにしてると思って下さい。こんなところでしょうか。
- いずれまとめて設定に追加します。
それでは。

第十二話 帝王との邂逅 (前書き)

目標日数滑り込み！

お待たせしました！

今回はカイザー登場回で、主役は十代です。

デュエルは原作デュエルになりますので描写はカットされています。

第十二話　帝王との邂逅

SIDE　十代

さつき、なんかよくわかんねえけど黒兔が連れてかれちゃった。追いつけようかと思っただけ、翔の様子も気になるし、咲夜が追い掛けたから大丈夫だろ。とりあえず翔だ。

「やっぱり僕じゃダメなんだ。タッグデュエルに勝つなんて無理だよ。」

「何言ってるんだ。最後は見事な散りっぷりだったけど、それまではいいデュエルだったぜ。」

「でも…」

うーん。何を言っても落ち込んでいくな。ちょっと話題を変えるか。

「ところで翔。さつきドロした時、変な顔してただろ？手札見せてくれよ。」

「あつ。ちょっとアニキ。」

なんだこの手札！？

「どうして『パワー・ボンド』を使わなかったんだ？もし使っていれば攻撃力2倍。『スチームジャイロイド』が強力モンスターになつてたじゃないか！」

「使っちゃダメなんだ！それはお兄さんから封印されてるカードな

んだ！」

翔は俺からカードを奪い返すと背を向けて震え出した。

「やっぱり、僕なんかじゃアニキとタッグを組むなんて…無理なんだよ！」

翔！突然走りだしたあいつは、あっという間に見えなくなってしまった。お兄さんから封印ってどういう事だよ。

「どうしたの？いつもは楽しそうにデュエルするのに。なんだか冴えない顔よ。」

考え込んでたら明日香が近づいてた。

「だってさ、デュエルって楽しいもんだろ。なのに翔のやつ、なんだか辛そうなんだよな。『パワー・ボンド』なんてキラカード持ってるのに、お兄さんとか封印とか。」

明日香のやつ、何か知ってるのかな？思うところがあるみたいだけど。

「十代。翔君には本当のお兄さんがいるの。しかも、この学園にね。」

「そうだったのか。」

「知らなかったの？3年のオベリススクブルートップ、丸藤亮。生徒は彼の事を、アカデミアの帝王『カイザー』と呼んでるわ。」

「カイザー…一体翔とその兄貴の間で何があつたんだ？」

それがわかれば、翔ももっと、デュエルが楽しくなるんじゃないかな。

「おーい！十代！隼人！明日香！」

「皆どうしたの？翔君が凄い勢いで走っていったと思ったら、ももえ達も追い掛けていくし。」

黒兎と咲夜だ。二人とも戻ってきたのか。

「あれ？ももえ達つたらいつの間にな？」

「翔が走っていったら『私達が追い掛けますわ。こちらはよろしく。』って追い掛けていったんだな。」

2人が翔を追って。少しは助けになるといいんだけど。

「それで。翔とのデュエルはどうなったんだ十代。何か、あつたんだろ？」

「黒兎。ああ。翔のやつ、楽しそうなデュエルじゃなくて、事情を聞いてもお兄さんがとか、封印がとか、よくわかんねえ。」

「ふーん。じゃあさっきまで海を眺めて考えて、どうするか決めたのか？」

「ああ！その兄貴とデュエルしてみりゃわかるってもんさ！」

黒鬼のやつ、呆れたような顔して笑って頷いてくれた。

「十代！あなた聞いてたの！？丸藤亮は3年の…」

「オベリスクブルートップでカイザーってあだ名があるんだろ？や
つと面白くなってきたぜ！」

明日香が驚いてるけどこれしかない！デュエルすればきっとわかる！

「おもしろすぎる…」

「多分何を言っても無駄ね。」

「せめて無茶苦茶しないようにサポートするか。」

「十代らしいんだな。」

「カイザー！待ってるよ！俺とデュエルしようぜ…」

よっしゃー！じゃあ早速…

「オベリスクブルーに突撃…」

「ちょっとまで十代。いきなりそんな面白い…げぶんげぶん。非常
識なことをするな。まずはデュエル許可願いを書いて頼んでみるん
だ。」

「クロ兄。今面白いことって言おうとしたよね。絶対後でやるよね。」

いきなり黒兎に止められちゃった。でもそうか。そんなのあったんだ。

「じゃあ明日すぐに書きに行こう！な。黒兎。隼人。」

「また何かやられても困るからな。一緒に行つてやる。」

「悪いんだけど、俺は行けないんだな。」

黒兎はすぐにOKをくれたけど隼人はダメだった？

「どうしてだよ隼人？」

「皆を見てたら考えることがあつてな。明日はそのためになんてと……」

「いいだろ十代。隼人にも事情があるんだ。隼人。頑張れ。」

「黒兎。ありがとう。」

「わかったよ。じゃあ黒兎。明日はよろしくな。」

さて、いい時間だし今日は帰るか。

「明日香。今日はありがとうな。そろそろ帰ろうぜ。」

「なら私もレッド寮まで行くわ。2人ともそっちにいるかもしれない。」

「咲夜はどうする？」

「せっかくだし、私も一緒に行くわ。翔君の様子も気になるから。」
というわけで、皆でレッド寮まで帰ることになった。帰ってきたら
たくさんの生徒が何か片付けをしていた。

「まだ終わってなかったのか。いったいどんな準備を…」

黒兎は何か知ってるのか？とりあえず気にせず部屋に向かうと、も
もえとジユンコが扉の前に座っていた。

「2人ともありがとう。翔君の様子は？」

「明日香さん。これはダメですね。鍵かけてて、呼びかけても返事
もないです。」

「翔さん大丈夫でしょうか。」

翔のやつ完全にふさぎ込んでるのか。ん？鍵をかけてて？

「あーっ！翔！開けろ！俺と隼人は今日どこで寝るんだ！？」

ドンドンドンドン！

畜生！全く反応がない。さてはあいつ寝たな！？

「仕方ない。落ち着け十代。2人とも今日は俺の部屋で寝ればいい。
もともと3人部屋なんだ。ベッドはある。」

「黒兎。助かったぜ。」

「翔は今日、そつとしいてやるう。1人で解決しなきゃならないこともある。」

翔。絶対立ち直れよ。お前は俺の弟分なんだ。タッグはお前と組むんだからな！

「じゃあ皆、今日はこれで。」

黒兎が解散を宣言する。明日香達は足早にレッド寮を後にした。

「なんであいつらあんなに慌ててたんだ？」

「周りを見てみる十代。」

周り？見渡してみるとそこには…

「「「これより、異端審問会を開催する。」」」

カラフルなフードを被った男子生徒が得物を持って俺達を囲んでいた。

「ひ、ひどい目にあつたんだな。」

「十本連続デュエル、負けたら始めからとか馬鹿か。」

「えー。楽しかったじゃんか。それにしても色んな女の子がデュエルモンスターズにはいたんだな。」

あの後困まれた俺達は異端審問会とか名乗る連中にデュエルを挑まれた。俺は十連勝ですぐ終わったけど、黒兎は3回かかって、隼人は10回もかかってた。俺のところにだけ青色がいたな。

「まあいい。さ、今日は寝るぞ。」

黒兎が立ち上がり寢床の準備を始める。ちよつと待てよ。

「せつかくの泊まりなんだ。なんかやるうぜー！」

「十代。俺と隼人はくたくたなんだ。寝させてくれ。」

「それじゃあつまんねえよ。なあ、なんかやるうぜ。」

「黒兎。1回だけ付き合つてやろう。」

「隼人まで。仕方がない。1回だけだぞ。」

やったぜ！せつかくの泊まりだからな。いつも通りはつまんねえぜ！

「んじゃこれ位しか持つてないが。」

そう言つと黒兎が何か取り出してきた。よし。負けないぜ！

「俺のターン、ドロー！よっしゃ！ロン！四暗刻字一色上がりだ！」

「な！？ダブル役満だと！？」

「俺はこれでハコテンなんだな。」

「えーい！次はコレだ！」

「来た！これが俺の手札だ！ロイヤルストレートフラッシュ！」

「なんで出るんだよ！？」

「俺の点数は空なんだな。」

「次だ次！」

「こい！揃った五光だ！」

「ありえない！」

「もう点数がないんだな。」

……

「なあ黒兎。もうやめねえ？」

「勝ち逃げか十代！」

「ZZZZ」

なんかゲームやればやるほど黒兎がヒートアップしちまった。隼人のやつ途中で倒れたけど1人だけ寝れて羨ましいぜ。ああー。言い出すんじゃないかなかつたぜ。

「さあ次は……」

「クロ兄。もう寝ようよ。」

「リン！まだ起きてたのか!？」

気付いてなかったのか？黒兎の膝の上ですつとつとつとしてたのに。

「十代なにしてる!？さっさと寝る準備をしろ。リンに夜更かしさせるだなんて…」

なんか腑に落ちないけど寝れるならいいや。1番下は黒兎で1番上は隼人だから真ん中に。おやすみ。

「リン。今日位はカードに戻ってくれないか？さすがに十代がいる時だし。」

「クロ兄のせいだよ。今日だからこそ一緒なの。」

なんか真下から黒兎とリンの会話が聞こえるけどまだ寝ないのか？

翌日

「ふあゝあ。よく寝たな。黒兎。隼人。起きろ！今日はカイザーとデュエルだ!」

いつもなら起きない俺も、カイザーとのデュエルが待ち遠しくて起きちまったぜ！

「珍しいんだな十代。お前が自分で起きるだなんて。」

「へへ。ほら、黒兎もリンも起きろよ。」

黒兎達はまだ布団から起き上がらねえ。翔も毎日こうやって起こしてくれてたのかな。

「ん…もう朝か。って十代!？」

「ふあ…おはようクロ兄。十代さんもおはようございます。」

「おう。それにしても2人とも仲良しだよな。一緒の布団で寝てるなんて。」

あれ?リンは笑顔なのに、黒兎の顔が青くなった。

「はい。私達とっても仲良しなんです。いつとも一緒に寝てるんですよ。」

「じ、十代。この事は誰にも言わないでくれるか?頼む。」

「えー。なんでだよ。別に悪いことじゃ…わかった。言わない。言わないから怖い顔して肩を握り潰すのはやめてくれ。」

こいつ本当に黒兎か!?人として見せちゃいけない顔だぜ。

「よし。隼人は今日やりたい事があったんだよな?飯食ったら別行動か?」

「ああ。今日は1人で考えてみる。もう少し纏まったらお前達の力を借りたいんだな。」

「任しとけ！んじゃまずは朝飯だ。行こうぜ2人とも。」

食堂に行っても翔の姿はなかった。朝飯も食べないなんて大丈夫なのか？後でまた行ってみよう。

「おーい！翔！起きてるか！？飯くらい食べるよ！」

「反応ないな。どうする？」

「今日は俺達と一緒に嫌なのか？しょうがない。今日1日そつとしよう。」

翔。待ってるよ。お前の兄貴とデュエルして、お前の悩みを無くしてやるからな！

「じゃあ許可願いを書きに行くか。」

「おう！どこで書けばいいんだ？案内頼むぜ黒兎。」

黒兎とリンと一緒にアカデミアを歩いて行く。それにしても2人も本当に仲良しだな。道中ずっと手を繋いで歩いている。

「ハネクリボー。俺達も仲はいいけど、あの2人には負けそうだな。」

「クリクリ〜」

「着いたぞ十代。たいていの書類はここで書くんだ。えーっとデュエル許可願いは…これか。」

黒兎が柵から1枚取り出して手渡ししてくれる。これに書けばいいんだな。

「えっと…所属オシリスレッド、氏名遊城十代つと。」

あいつが土壇場で『パワー・ボンド』を使わなかったのはきつと兄貴との間に何かあったからだ。人を知るにはまずデュエルってね。その兄貴とデュエルすればきつとわかるさ。

「ん!？」

「あー!」

誰だよ許可願い取り上げたの!?

「ん〜デュエル許可願い…相手は?ん?ゴルゴンゾーラチーズ!」

「クロノス先生!?!返してくれよ!まだ全部書いてないんだから!」

「その必要はありませんーノ。何故なら、デュエルアカデミアNo.1のあの丸藤亮にドロップアウトボーイ〜が、デュエルを申し込むなど、100万年早いからデスーノ。」

「あーっ!」

びりびりに破かれちゃった!そこまでするか!?

「許可願いを出すにしても、身の程を弁えて出すノーネ。」

そう行って立ち去るクロノス先生。あゝあ。どうすりゃいいんだよ

）。

「待ってくれよ、クロノス先生。」

「天川黒兎。何か文句でもあるノーネ？」

黒兎？いきなり先生を呼び止めてどうするつもりだ？

「丸藤亮が今アカデミアで最強なのは認める。だが、何故あんに対戦相手を選ぶ権利がある？」

「先程も言ったノーネ。ドロップアウトボーイがカイザーに挑もうなどと、臍が茶を沸かすノーネ。」

「だが、カイザー自身が拒んだ訳じゃない。許可願いが通らないなら、直接行くぞ？」

「相手にするはずないノーネ。好きにするノーネ。」

黒兎がクロノス先生と言い合いになっちまった。どうなるんだこれ。

「よし。行くぞ十代。好きにしていいいみだいだからな。当初の予定通りブルー寮に突撃だ。」

「え？なんでそんなことになってんだ？て言うか、それお前が止めなかつたか？」

「事情が変わったんだ。行くぞ。クロノス先生、それじゃ。」

先生に挨拶だけして黒兎が立ち去る。

「待つてくれよ黒兎！クロノス先生、次は破かないでくれよ。それじゃー！」

ああもう。1人で行くなー！

「どうせドロップアウトボーイではブルー寮に入ることすら出来ないノーネー！」

移動中

「ったく、クロノス先生め！目の前で破る事ねえじゃねえか！」

「こつなつた以上は直接申し込むしかない。カイザーを名乗る以上は挑戦者を選ばないだろう。」

黒兎は冷静に言うけど、やっぱりあれはひどいぜ！

「くっそ〜。うっ…な、何だあ？」

いきなりカードが降ってきた!?

「あーっ！ああー！」

「こ、コアラ？隼人じゃねえか。」

「何やってんだ？そんなところで？」

「お、おう。」

木の上に隼人がいて、上からカードが降ってきたってことは…

「お前まさか…デュエルをやる気に!?!」

「何!?! 本当か隼人!」

「ち、違うんだな。カード占いをちょっと…」

慌ててカードを片付けてるけど占いの結果見たのか?

「おっこうしちゃいられねえ。じゃあな!」

「隼人。今度俺も占ってくれ。」

「2人とも、どこ行くんだ?」

「オベリスクブルーへ乗り込むんだよ!」

「カイザーに直接挑戦状たたき付けてやるんだ!」

「な、なん…ああ! うわっ!」

隼人落ちた!?! 何やってるんだよあいつ。

「大丈夫か?」

「あ、ああ。俺も一緒に行くんだな。」

「なんだ。やっぱりデュエルに興味出たのか?」

「く、黒兎。違うんだな。ただカイザーを生でみたいだけで…」

黒兎が隼人をからかっているけど、早くブルー寮に行こうぜ！

さらに移動中

「さて十代。着いたわけだが。」

「すいませーん！カイザー！デュエルしようぜー！」

「いきなりすぎるんだな。」

「カイザー！デュエルー！」

お！誰か来たみたいだ。これでデュエル出来る！

「って、うわっ！何しやがる！？」

「身の程を知れ！オシリスレッドのドロップアウトめ！お前のような奴がカイザーに近づく事など許されると思っているのか！？」

「何だと…うわっ！」

いきなり押した上に水をかけてくるか！？…あれ？冷たくないしそんな濡れてねえ。

「なんで…って、黒兎！お前、俺をかばって！？」

「く、クロ兄！？」

目の前にはずぶ濡れになった黒兎がいた。

「十代、大丈夫か？」

「あ、ああ。でもお前が…」

「いいんだよ。リンも、心配かけてゴメンな。それより帰ろう。こんなカスどもを遣すとは、カイザーもたいしたことないな。」

「貴様！ドロップアウトごときがカイザーを侮辱するな！」

「クロ兄。大丈夫だよな？」

「ああ。」

後ろでまだ叫んでるけど、黒兎達はどんどん行っちまう。

「行こうぜ隼人！」

「あ、ああ！」

黒兎に追い付いたけど、なんて声をかけたら…

「しかし困ったな十代。カイザーにデュエル挑むにはもう直接会っ
しか。」

「えっ、あ、そうだな。チクショー！あいつらめ。諦めないからな
！絶対カイザーとデュエルしてみせるぜ！」

「2人とも無茶しすぎなんだな。」

「そつだぜ黒兎。あれくらい平気だぜ。でも、ありがとつな。」

「目の前で親友がやられてたんだ。気にするな。それより一旦部屋に帰ろう。寒くなつてきた。」

「マジかよ!?!とりあえず俺の上着着ろ!」

笑つてるけど、やっぱり無茶だつたんだ!

またまた移動中

「んじゃ俺は着替えてくるから、2人は翔の様子でも見てきてくれ。」

黒兎は自分の部屋に入っていった。翔のやつ、結局出て来なかったのか。

「つたく翔、いつまでも閉じこもつてると隼人みたいになつちまうぞ!」

「失礼なこと言つな!」

翔の布団から毛布を引つpegす。つて、あれ?!

「翔は?」

「な、なんだこりゃ!?!」

「どつした?」

そこには置き手紙があった。翔のやつなんかメッセージでも…

『一筆啓上。翔は島を出ます。止めてくれるなアニキ。さよならだ
けが人生だ。』

「あいつ逃げやがった!」

思わず手紙をくしゃくしゃに握り潰す。

「でもここからどうやって?」

「探そう!」

「え!もうすぐ晩御飯なのに!」

「いいから来いよ!黒兎!」

飛び出して黒兎の部屋に向かうと、準備万端の黒兎がいた。

「あんだけ叫べば聞こえるよ。急いで捜しに行こう。」

さすが黒兎!3人で翔を捜しに走り出す。翔。逃げちゃダメなんだよ!

「翔!どこだ〜!」

「翔!出て来るんだな〜!」

「翔!戻ってこ〜い!」

とにかく走って呼んでみるけど、これじゃあ何もわかんねえ。いったいどこにいるんだよ!?

「あつ!」

いきなりデッキが光った!?

「クリクリッ!」

相棒!何だ?ついてこいつてか?まさか!翔の居場所が!?

「こつちだ!」

「ま、待てよ十代!」

ハネクリボーが示す方とにかく走る。しばらく走ると何か見えてきた。あれはいかだか?その上にいるのは…

「翔!」

「あつ!アニキ!」

行かせるもんか!俺もいかだに乗っちゃまえば!

ダンッ!

バキバキッ!

「助けて!僕泳げない!」

「こら！しがみつくな！沈むー！」

泳げないならもっと丈夫に作っとけよ！

「翔！十代！」

「落ち着け隼人。こころへんは…浅瀬だ。」

あつ。普通に足つくじゃん。

「このまま行かせてくれよアニキ。僕のことはいいから、黒兎君とタッグを組んでおくれよ。」

「つべこべ言うんじゃねえ！俺は決めたんだ！パートナーはお前だ！」

「でも、今の僕じゃ勝てっこないよ。」

まだ言うのかよ！

「不甲斐ないな。翔。」

「お、お兄さん！」

崖の上には明日香と、もう一人。お兄さんってことは…

「あれがカイザー亮！」

「逃げ出すのか？」

「ぼ、僕は……」

「それもいいだろう。」

「うっ、うっ……」

翔の奴。言われっぱなしで悔しくないのかよ!? くそ。なんとか……

「行っちまうってよ! あんたの弟!」

「仕方ないな……」

「だったらよお、せめて餞別でもあげてやらねえか? 俺とカイザー、あんたのデュエルで!」

「あ、アニキ!??」

「君とデュエルを? いいだろう。上がってきたまえ。遊城十代!」

そこなくなっちゃ!

「アニキ……!」

「よく見てるよ!」

俺達のデュエルで何か気付いてくれよ!

「話を折ってすまないが、あんたがカイザーだな?」

「君は確か…天川黒兎だな？」

「俺を知ってるのか。てつきりレッドなんて知らないと…」

「君の入学試験は見させてもらった。ブルーでの噂も知っている。君ともデュエルしたいものだ。」

「ブルーだからって、嫌な奴だけじゃないんだな。」

「嫌な奴が多いのは事実だがな。」

黒兎とカイザーが話しだしちまった。早くデュエルだー！

「ありがとうカイザー。あんたはカイザーに相応しいな。」

「そうか。では、遊城十代。場所を変えよう。ついてこい。」

そう言うとカイザーは歩きだした。やっとデュエルできるぜ！

「結局直接申し込むはめになったな。」

「デュエル出来るならなんでもいいぜ。」

そして連れて来られたのは灯台の下。ここでデュエルか！

「僕のせいでこんな事に！いくらアニキでもお兄さんにかかったら…」

「翔。十代達のデュエルから目を離すな。自分のせいだと言っなら見届けるんだ。」

黒兎もなんとなくわかってきてくれるっばい。なら俺は思いっきりデュエルするだけだ！

「いくぜカイザー！」

「来い。」

「デュエル！」

俺のHERO達で攻め込むけど、返しのターンですぐに対策される。こんなワクワクするデュエルは初めてだぜ！

「おもしれえ！おもしれえよカイザー！このデュエル！」

「ああ。俺もだ。」

カイザーもわかってるんだ。今、翔に伝えなくちゃいけないこと。だったらもつとやってやるぜ！

「十代。いよいよ大詰めかな？」

「ああ！どうなるかワクワクするぜ！」

「そうだろう。君は持てる力を存分に出し切っている。そんな君に対して俺も全力を出すことができた。君のデュエルに敬意を表する。」

カイザー。その言葉、翔に言ってるように聞こえるけどな。

「いくぞ十代！」

「こい！」

そして『パワー・ボンド』から現れるのは『サイバーエンドドラゴン』。これがカイザー。

「エターナルエボリューションバースト！」

負けちゃった。けど…

「楽しいデュエルだったぜ。」

「フン。」

カイザーは帰ろうとするけど、翔の方を振り返った。大丈夫。きつと翔に届いてるぞ。

「いいアニキを持ったな…翔は。」

次は負けねえからな！

「すげえ兄さんだな！」

「うん！アニキもね！」

「あははは！」

翔と2人で笑い合う。これなら大丈夫だな。

「さてと、帰ってデッキでも組むか？」

「うん！」

「今度は『パワー・ボンド』が使えるように考えて組むんだぜ。翔。

」

「わかった！必ず封印を解いてみせる！」

「でも寮の食堂は封印されてしまったんだな……」

あー！そうだった！

「しょうがない。今日は翔の復活祝いだ。俺が飯を作ってやるよ。」

「本当か黒兎！？今日は御馳走だー！」

「ありがとう黒兎君！」

「楽しみなんだな！」

「ただし、全員退学しないこと。いいな？」

「「おうー！」「」

第十二話〈帝王との邂逅〉（後書き）

カイザー戦って特にオリカとかなかったなので、書こうと思えば可能だったのですが、少し違ったので。

今回は原作では隼人の父ちゃん登場回なのですが…あの人才リカ満載なんですよね。

ここで読んで下さってる方にアンケートです！次の話に隼人の父ちゃんを登場させるか

- 1・今回のようにデュエル描写無しで話を書く
- 2・作者の独断で組んだデッキで隼人とデュエル
- 3・もう飛ばして制裁デュエルに
いずれか選んで感想にでもお願いします。

作者は今週末試験ですので、日曜までをお願いします。月曜から執筆予定です。

後、2を希望する人は使わせたらいいと思うカードがあれば、ついでをお願いします。

それでは。

第十三話〜ぶつかる壁の名は親父〜（前書き）

お待たせいたしました！

約3週間ぶりとなる投稿です。遅くなりすぎたことお詫び申し上げます。

さて、今回は隼人父が登場しますが、リクエストして下さいウィンさんの要望でオリジナルデッキを用意しました！何のデッキかはお楽しみに。

それでは遅くなった十三話どうぞ！

第十三話 ぶつかる壁の名は親父

SIDE 黒兎

この前の、十代とカイザーのデュエルから、翔のデュエルに対する姿勢が変わってきた。積極的にデュエルをするようになったし、最近は十代と夜遅くまでタッグのための相談をしている。これで大丈夫だろう。

「黒兎？ぼーっとしてどうしたの？あなたのターンよ。」

おっと。他人の心配ばかりもしてられないか。今は部屋で咲夜とデュエルの真っ最中。あれから調整のために何度か付き合ってもらっている。

「悪い悪い。つい考え事を。」

「そんな状態で大丈夫なの？制裁デュエルはもうすぐなんでしょ。他の事に気をとられてたら退学しちゃうわよ。」

「大丈夫だって。咲夜との約束もあるからな。絶対勝ってくるぞ。」

「っ！も、もちろんよ！破ったら承知しないからね！」

顔を赤くしてどうしたんだ？閉めきってるから暑くなったか？換気がてら窓を開けるか。

「ちよっと窓開けるぞ。」

「うん。」

ガラガラ

「天川コロス。天川コロス。天川コロス…」

ピシヤン！

「あれ？どうしたの？換気するんじゃないの？」

おいおい、ここは2階だぞ。そうさ。気のせいだ。よし、今度こそ換気だ。

ガラガラ

「天川コロス」

「天川コロス」

「天川コロス」

…

ピシヤン！

「だからさっきから何がしたいのよ。って黒兎。顔色が悪いわよ。」

そうか。人間梯か。とりあえずまだ包囲は完了していなかった。今ならまだ逃げられる。

「咲夜。気分転換に場所を変えよう。ディスクとデッキを持ってく

れ。」

「ねえ。いったいどうしたのよ？」

くっ。外の指示が慌ただしくなった。急がないとヤラレル！

「いいから。持ったな。行くぞ！」

「だから説明を…キヤツ！」

咲夜を抱え上げて部屋を飛び出し、目の前の手摺りを足場に大ジャンプ。一気に包囲網を飛び越え森に入る。

「三沢会長！異端者が飛び出しました！」

「くそ！間に合わなかったか！A班は直接追跡！B班C班は両翼を塞ぐように展開！D班は連絡を回せ！」

「天川め！咲夜君と2人きりになるだけでなく、お姫様抱っこで逃避行だと！」

「ヤツちやうよ。首と胴体が離婚だよ。」

「クケケケケケ！」

「ち、ちよつと黒兔！事情はわかったけど待って！おろして！」

「ゴメン咲夜！今はムリ！」

追跡班には炎上らしき奴や、明らかに捕まったら命がないやつがい

た。さっきのジャンプで稼いだ距離と、森の中のアドバンテージを活かしなんとしても撒く！

…

「…かわー！何処だー！」

なんとか撒いたかな。やっと一息つける。そういえば咲夜をずっと抱えたままだった。

「悪かったな咲夜。あいつらに時間与えたくなかったから無理矢理連れてきたけど、よく考えたら俺一人で逃げればよかったな。スマン。」

「…」

あれ？返事がない。とりあえずその辺の木にもたれさせる。

「おーい咲夜。スマンかった。返事をしてくれ。」

「クロ兄。咲夜さんは返事出来ないと思うよ。」

「リン。どういうことだ？」

「自分の胸に聞けばいいよ。」

理由がわかるのかリンが出てきたけど、ご機嫌斜めで教えてくれない。最近のリンはよく機嫌が悪い。色んな意味でどうしたらいいんだ？

「ここに置いとくわけにいかないしな。しょうがない。女子寮まで送るか。咲夜。歩けるか？」

問い掛けると頷いて立ち上がってくれた。少しふらついてるが大丈夫か？

「よし。行こう。」

心配なので咲夜の手を引いて送ることにした。咲夜は大人しくついてきてくれる。

「絶対わかってないよ。」

リンは何故がっかりしてるんだろっ？2人で森を歩いてしばらく。向こうから走って来る奴らがいる。

「追っ手か!？」

身構えいつでも走りだせるよう準備するが、現れたのは見慣れた2人。

「黒兎!咲夜!」

「2人ともこんなところで何してるんすか？」

「十代と翔か。何してるはこっちのセリフでもあるわけだが。そんな急いで何かあったのか？」

さっきの走り方を見るに結構な事が起こってるとみた。

「そうだった！黒兎、大変なんだ！このままじゃ隼人が退学させられちまう！」

「何！？いったい何があったんだ！？」

「さつきレッド寮に隼人君のお父さんが来て、大徳寺先生と話してたんだよ。」

俺が飛び出した後か。一般の方の迷惑にならなくてよかった。

「とにかく俺達はこんな突然の退学は認めたくない。隼人は大事な友達だからな。」

今にも走りだそうとする十代。だが気持ちは同じだ。俺だって、原作とか関係なく隼人は友達だ。

「十代。俺も行く。咲夜。悪いけど一人で女子寮に帰ってくれるか？」

「待つて。それなら私も行く。私だって、隼人君とはそれなりの付き合いなんだもの。それに、人数は多い方が伝わることもあるわよ。」

いつの間にか普段の咲夜に戻っていた。隼人の問題を聞いて冷静になっただけかな。

「なら早く行こう。どこを目指してるんだ十代？」

「翔が言うにはレッド寮で大徳寺先生と話してるらしい。まずは隼人の気持ちを確かめる。」

「じゃあとりあえずはそこだな。」

「そうと決まれば急ごうよ。もしかしたら話が進んでしまってるかもしれないっすよ。」

「ああ。待ってるよ隼人！」

十代を先頭に森の中をアカデミアに向けて走り出す。レッド寮からなら森を突っ切る方が早い。今は一刻も早く行かないとな。

移動中

レッド寮に到着すると大徳寺先生の部屋から声が聞こえてきた。隼人の父さんの声だろうか。ここじゃはっきり聞こえない。部屋の扉に近づくと隙間が空いてる。俺達はそこから内部をのぞき見る。

「…という訳で、本日今日限りで隼人を国に連れて帰るでござす。」

「誰だあのおっさん？」

「あれが隼人君のお父さんだよ。」

「でかいな。てか『ごわす』ってどこの西郷だよ。」

「しかも国につて、随分古めかしいお父様ね。」

隼人はまさにコアラだけだあの親父は熊だな。

「どつしよつアニキ。」

「どうするって決まってるじゃんか。隼人の気持ちを確かめるんだよー！」

部屋に戻る十代と翔。俺と咲夜も後を追う。部屋には荷物をまとめる隼人の姿があった。

「隼人！お前、本当に学校辞めるのか？」

「ああ…そういう訳だから、短い間だったけど元気だな。」

「そう簡単に、決闘者の夢諦めちまってるのかよ！隼人！」

十代が隼人の肩をつかみ振り向かせる。隼人は…泣いていた。

「え？隼人！？」

「泣いてるの？」

「俺、正直今まで真剣に決闘者になりたいって思ってたんだなあ。まあ、なれたらいつか。位な感じでな。でも今は違うんだな。俺、初めて本気で頑張ってみようと思ったところだったんだな。」

確か原作だと精霊の声が聞こえたんだっただか。きっかけはともかく頑張ってもらわないと。

「それが遅い気もするが、何はともあれその気持ち、親父さんにぶつけてやるっぜ。」

「そうだな黒兎。行くぞ隼人！来い！」

「えっ？」

十代が隼人を連れて駆け出す。考えてる事が一緒な俺は当然ついていくが、

「待つてよアニキ！」

「次はなんなのよ黒兎！」

2人ほど遅れて慌てるはめになってしまった。

移動中

「そういう事ですので、隼人を退学させるのは思いとどまってもらえませんか？」

「隼人は今、自分の力と意志で頑張ろうとしています。その結果を見てから判断してもらえませんか？」

やってきました突撃隣の校長室。本日のお相手は鮫島校長と隼人の親父さんです。しかし十代の敬語は違和感があるな。

「おはんら、一体何者でござす？」

「俺は隼人の同室の者で遊城十代といいます。」

「俺は隣室の天川黒兎です。」

「ぼ、僕は丸藤翔です。」

「私はブルー女子寮の種島咲夜です。」

俺達が一通り自己紹介すると親父さんは何か考え込んでしまった。

「遊城君。天川君。君達の気持ちはわかりますが、これは前田さんの家族の問題です。部外者が口を挟むのは……」

「いや、よか。ただし条件がある。おいとデュエルばしろ。隼人お前がおいに勝ったらこの話はなかった事にしちやる。だが、おいが勝ったら今すぐ国に帰る。どうだ？受けるか!？」

親父さんからの条件。仁王立ちする姿から発する威圧感まさに武人のそれ。前の隼人なら逃げ出したかもな。でも、

「…受ける！俺は勝って、皆と一緒にもう一度頑張りたい！」

「ではデュエルは明朝8時。そういう事でよろしいか？校長はん。」

「まさにデュエルアカデミアに相応しい解決法だと思います。」

校長凄い笑顔だな。顔にデュエルが楽しみって書いてあるぞ。

「よし。じゃあ今からレッド寮に帰って調整だ！今日はとことん付き合っぜ隼人！」

「俺も協力させてもらっぜ。友達が遠くに行くのは嫌だからな。隼人。絶対勝つぞ。」

「僕も手伝っよ。あんまり役に立つと思えないけど。」

「「うづいづのは思いの問題よ、翔君。当然私も手伝うわ。」

「では我がレッド寮の生徒ですし、私も付かせてもらいますにゃー。」

「皆、ありがとうなんだな！」

隼人を中心に、十代、翔、俺、咲夜、大徳寺先生が集まりレッド寮に戻る。

「にしてもあんなあっさりOKするとは思ってなかったぜ。なあ？」

「別にまだOKした訳じゃ…デュエルに勝ったらって条件付きですよ。」

「ハッ！絶対勝つさ！相手は素人の親父だぜ。」

少し楽観的すぎる気もするが、これくらいの余裕は隼人にもほしいかな。

「コホン…参考までに1つ教えてあげますにゃ。隼人君のお父様は薩摩示現流の使い手として世界中に名を轟かせた伝説の決闘者。薩摩示現流は打突を得意とする一撃必殺の剣。その極意を応用した一撃必殺のデュエルで相手を瞬殺するという恐るべき手だれ。という噂なのにな。」

「ええ！？そんな強い人なんすか！？」

「隼人はそれを知ってて…だったらなおさら力になるぜ！早速デッ

キ構築だ！」

「ありがとうなんだな。」

レッド寮に着くとすぐに調整を始める。まずは今のデッキ構築だけど…

「なんだよ。隼人のカード、コアラばかりだな。」

「コアラデッキって…こんなんじゃ勝てるのかよ。」

十代。思っても言葉を選んでやれ。隼人が元に戻りそうだと。

「じゃあこれあげるよ。こないだ買ったパックに入ってたけど、僕使わないし。」

「翔。俺にくれるのか？」

「ほら、コアラにカンガルーが加わればオーストラリアデッキになるじゃない？」

そう言っただけカードを手渡す翔。俺もいくつか余ってたな。こうなりや徹底的にやってやる。

「よし！それじゃあちょっと待ってる。」

十代も探しはじめた。俺も一旦部屋に戻るか。

「俺も何かないか見てくる。咲夜も頼めるか？」

「そうね。カード探しがてら色々済ませてくるわ。夜にもう一度集合でいい？」

「ああ。それじゃお前ら。また後でな。」

「ああ！」

「では先生は敵情視察にでも行ってくるのにやー。」

大徳寺先生も部屋に戻っていく。親父さんの相手でもするのだろうか。さて、久しぶりにカードを全てチェックするか。転生してきた時、全てのカードが入っていたケースを再び取り出す。

「オーストラリアデッキか。関連しそうなカードは…」

「クロ兄。なんだか大変な事になったね。」

カードのチェックを始めるとリンが出てきた。

「リン。そうでもないぞ。今回は勝ち負けが条件だけど、隼人の思いを伝えるのも大事だ。その点は今の隼人なら大丈夫だしな。」

「そういえばあの人、精霊を感じてるみたい。まだはつきり見えないりしてるわけじゃないけど。」

「それがきっかけになったみたいだしな。デュエルモンスターズをもっと身近に感じたんじゃないか？」

これで隼人もカードを大事にしてくれたら万々歳だ。泣くカードがまた減っていく。

「リン。そっちの束取ってくれるか？」

「これだね。はい、クロ兄。」

リンに手伝ってもらいながら作業を進める。いくつか隼人に合いそうなカードも見つけた。

「隼人。絶対勝てるからな。お前にはこんなに味方がいるんだから。」

夜

やっとチェックと片付けまで終わった。隣でリンがへにやっている。

「リンも手伝ってくれてありがとうな。」

お礼もこめて頭ナデナデ。あっ、少し元気になった。

「うん。さ、持って行ってあげようよ。」

「そうだな。すっかり暗くなっちまったしな。」

出したカードを持って部屋を出る。すると、ちょうど階段を上ってきた咲夜と出くわした。

「咲夜。もう来たのか？」

「ええ。やっておきたいことは済ませてきたわ。」

「もっとゆっくりしてきたらどうですか？咲夜さん。ここは男子寮ですし。」

「なんだかリンちゃんが怖いわね。なんでかしらね咲夜。」

「うるさいわねソル。知らないわよ。」

「自覚あるくせに。」

「？リン。咲夜に玩具にされるからってそこまで怒らなくてもいいだろ。」

「『ハーツ。』」

「トリプルため息!？」

「なんで？どうしてこんな呆れられてるの？」

「まあいいわ。さ、入りましょ。」

「釈然としないがそうだな。十代達、入るぞ。」

部屋に入ると顔を突き合わせてカードを睨む3人。俺達に気付くと顔を上げて出迎えてくれた。

「遅かったな。まあ入れよ。」

「悪かったな。その分色々持ってきたぜ。」

「本当ですか！ちょっと行き詰まりだったから助かるっすよ。」

「ついでにブルーの食堂から夜食になりそうなの持ってきたわ。後で食べましょ。」

「そんなことまで。本当にありがとうなんだな。」

さて、準備万端。やりますか！

デッキ構築中

「とりあえず切り札や全体のデッキコンセプトは決まったんだけどな。」

「切り札は…こいつか。能力は充分だな。」

「でもやっぱりコアラだらけなのね。」

「隼人君のデッキだからね。でもその分デッキの広がりだね。」

「コアラは俺の相棒なんだな。俺はこいつと闘いたいんだな。」

「その気持ちは大事だぜ。思われたカードは絶対応えてくれるんだな？」

「うん！」

「俺のHEROや相棒みたいなもんだしな。だからこそこれで勝たしてやりたいんだ。」

「それなら俺のところこんなのが…」

「こんなにもらっていいのか!? 凄い数なんだな!」

「使ってくれる持ち主がいた方がカードも喜ぶしな。ただし、大切にやってくれ。」

「ああ! 絶対大切にするんだな!」

「ああ! いいなあ! 黒兎君! 制裁デュエルのために僕も欲しいですよ!」

「俺も俺も! 何かないか!?!」

「じゃあ私も何かもらえないかしら?」

「落ち着け! 今は隼人のデッキ構築だ!」

.....

翌朝。昨日のメンバーは道場みたいなところに集合していた。

「では僭越ながら、このデュエルは私大徳寺が立会人を務めさせてもらうにや。前田熊蔵さん。もしこのデュエルに負けたら隼人君がこの学校に残る事を許していただけますかにや?」

「よか! 男に二言は無いでござす。」

男らしい。関係ないけど名前『熊蔵』なんだ。

「隼人君。もしこのデュエルに負けたら、潔く退学して、実家の造

り酒屋を継ぐ事。いいですかにゃ？」

「構わないんだな。」

「よろしい。では、悔いのないよう思う存分闘うのにゃ！」

「いけ！隼人！」

「落ち着いてやるんすよ！」

「お前なら大丈夫だ！」

「お父様を越えてきなさい！」

「皆……」

「よい友を持ったな、隼人。」

「え？」

「デュエル！」

「あ！？デ、デュエル！」

先攻 隼人

手札 6枚

「俺の先攻、ドロー！俺は『デス・コアラ』を攻撃表示で召喚なんだな。」

デス・コアラ ATK1100/DEF1800

攻撃体制で現れるは隼人の相棒デス・コアラ。って攻撃表示だった!?

「な、なんだ!? デス・コアラを攻撃表示だあ!？」

「いきなり何やってるんだあいつは。」

「え? どうしたのアニキ。黒兎君も。」

そして隣に理解できてないのが1人。翔。人は簡単には変わらないんだな。

「どうもこうもあるかよ! デス・コアラはリバーズ効果モンスターだぜ!」

「あつ!」

「しかも隼人君は先攻1ターン目。相手の手札が6枚から始まる今は大ダメージのチャンスだったのに。」

咲夜の言う通りだ。もともと不利は覚悟してたのに、いきなりチャンスを削っちまった。

「隼人。やはりお前は変わっていないでござるか。」

「し、しまった。なら、永続魔法『神聖なる森』を発動。このカードがある限り俺の場の、獣・獣戦士・植物族モンスターの戦闘破壊を1度だけ無効に出来るんだな。」

隼人のフィールドが、不思議な光に包まれた森となり、その中にあ
る木の1本にデス・コアラが上つていく。意外と速いな。

「そして、リバーズカードを1枚伏せて、ターンエンドなんだな。」

手札3枚

後攻 熊蔵

手札6枚

「皆さん、匠の技をしかと見ておくのにゃ。」

「薩摩示現流の極意を応用したっていう一撃必殺のデュエル、見せ
てもらっぜ！」

「おいのターン、ドロー！うむ。『モンク・ファイター』を攻撃表
示で召喚。」

モンク・ファイター ATK1300/DEF1000

フィールドに飛び出すのは、強さを求めて自らを鍛える若き拳闘家。

「さらにフィールド魔法『ガイアパワー』発動。このフィールドは
地属性モンスターの攻撃力は500上げ、守備力を400下げる。」

地面から、神聖なる森を覆うようなサイズで生えてくる巨大な1本
の木。そこから発する力を得て、モンク・ファイターの気迫が増し
ていく。

モnk・ファイター ATK1300 1800/DEF1000
600

「ゆけ！モnk・ファイターで、デス・コアラに攻撃！薩摩示現流突きの型、正眼の構え！」

モnk・ファイターの繰り出す突きが、正面からデス・コアラを捉え、森の奥へ突き飛ばす。

「コアラがボールのように！」

「神聖なる森の効果でデス・コアラは破壊されないんだな！」

「だが、ダメージは通るでござす。」

隼人 ライフ4000 3300

森の奥から光に包まれたデス・コアラが、再び姿をみせる。

「おいはリバースカードを2枚伏せてターンエンドでござす。」

手札2枚

3ターン目 隼人

手札4枚

「落ち着いていけ隼人！きばれ！」

「きばれっす！隼人君！」

「まだ始まったばかりだ！取り戻せる！」

「十代、翔、黒兎…俺のターン、ドロー！このカードは…」
ん？何を引いたんだ？

「黒兎！お前の力を借りるんだな！『ラッコアラ』を攻撃表示で召喚！」

ラッコアラ ATK1200/DEF100

木の上に新たに上ってきたのは、コアラのように木の上に棲息するラッコ。

「お。早速使ってくれたか。」

「でもまた攻撃表示すよ！」

「いや。今回はこれでいいのさ。見てる。」

「ラッコアラの効果を発動。俺の場に他の獣族モンスターがいる時、エンドフェイズまで、獣族モンスター1体の攻撃力を1000上げるんだな。俺はデス・コアラを選択。」

ラッコアラは葉っぱをいくつかちぎり、デス・コアラに渡した。それを食べたデス・コアラが…立った。

「二足歩行だって!？」

「立った！コアラが立った！」

「いくぞ！デス・コアラでモンク・ファイターを攻撃！」

デス・コアラが面影を残さぬアスリート走りて相手との距離を詰めると、先の仕返しとばかりにボディーブローを叩きこんだ。

「モンク・ファイターが行った戦闘ダメージは0になるのでこわす。」

「でも壁モンスターはいなくなったんだな。ラッコアラでダイレクトアタック！」

ラッコアラは木からジャンプすると、体を丸めて熊蔵さんに突っ込んでいった。

「ぬうつうう。」

熊蔵 ライフ4000 2800

「いいぞ隼人！」

「その調子っすよ！」

「俺はリバーズカードを1枚伏せて、ターンエンドなんだな。」

手札2枚

4ターン目 熊蔵

手札3枚

「おいのターン、ドロ。魔法カード『強欲な壺』を発動。2枚ド

ローするでござす。」

さて、さっきのターンは上手くいったがラッコアラの効果は切れる。しのげるか？

「隼人。さっきのカードは、あそこにいる、友達からもらったカードか？」

「ああ。このデッキには、皆が俺のためにつて、譲ってくれたカードが詰まってるんだな。」

「そうか。ならば…その全てをもって、おいに勝ってみる！魔法カード『死者蘇生』を発動。モンク・ファイターを蘇生し、生け贄に捧げる。薩摩示現流を体現する、おいのデッキの切り札『マスターモンク』を特殊召喚！」

マスターモンク ATK1900/DEF1000

モンク・ファイターが光に包まれ、その光が晴れた場所に立っていたのは、極限まで鍛え抜かれた体を持つ、歴戦の拳闘士だった。

「マスターモンクも地属性。よってガイアパワーの効果を受けるでござす。」

マスターモンク ATK1900 2400/DEF1000 600

「ゆくぞ隼人。マスターモンクでデス・コアラに攻撃！薩摩示現流 吉の奥義、虎王咆哮！」

マスターモンクの足が空を切り、虎の鳴き声のような音をたて、デス・コアラを蹴り飛ばす。

隼人 ライフ3300 2000

「ぐうっ。それでも、神聖なる森の効果で破壊されない！」

「甘い！極めし武人は限界を超え、1度のバトルフェイズに2度攻撃出来る！続けてラッコアラに攻撃！薩摩示現流式の奥義、青龍旋風脚！」

デス・コアラを蹴り飛ばした足を、そのまま横のラッコアラに向けて振り抜く。その足の軌跡は龍の如く。

「うあああああ！」

隼人 ライフ2000 800

「隼人！？！」

「隼人君！？！」

「まずいわね。ラッコアラがいれば攻撃力を上回れたかもしれないのに。」

「ああ。隼人のデッキに、単体で覆せるカードはない。」

覆せるとしたら、翔と十代の渡したカード達だが。

「おいはこれでターンエンドだ。さあ隼人。お前の心をおいにぶつ

けてみせる!!」

手札2枚

5ターン目 隼人

手札3枚

「お、俺は、やっぱり…」

ダメだ。さっきの攻撃で心が折れかけてる。そんな状態じゃ、ダメなんだ!

「隼人!」

「黒兎…」

「何を諦めてやがる! 見ろ! お前と一緒に勝とうって、諦めてない仲間がこんなにいるんだぜ!」

「そうだけ隼人! そのデッキには俺達の思いが詰まってるんだ! 絶対に勝てる!」

「隼人君! 僕だって、変わるきっかけを掴んだんだ! 隼人君も変われるはずっす!」

「十代。翔。」

「それに、お前と一緒に闘ってる仲間を信じるよ! お前のために、まだ闘うつもりだぜ!」

目の錯覚か、デス・コアラが頷いたような。いや。錯覚じゃないはずだ。

「そうだ。俺も、十代や黒兎達みたいにデュエルするって決めただ！諦めたくないんだな！俺のターン、ドロー！」

隼人はさっきまでが嘘のように、カードをドローする。その目は、ただ勝利を見据えて。

「やはり変わっていないかと思ったが、少しはいい顔になったぞわすな。」

「皆のおかげなんだな。だから、皆と一緒にここで頑張りたいたんだな。十代！翔！力を貸してくれ！」

「当然だぜ隼人！」

「いくらでも使ってくれっす！」

見ろよ。俺達の思いに、カードは応えてくれるだろ。

「魔法カード『融合』を発動！手札の『ビッグ・コアラ』と『デス・カンガルー』を融合！父ちゃん。これが、俺の本気だ！現れる！」
マスター・オブ・OZ「！」

マスター・オブ・OZ ATK4200/DEF3700

姿をみせるのは、隼人の最強モンスター。翔が繋げ、十代が託した、想いの結晶。

「マスター・オブ・OZは地属性。よって、ガイアパワーの効果を受けるんだな！」

マスター・オブ・OZ ATK4200 4700/DEF3700
0 3300

「攻撃力4700!?!」

「すげえ隼人！」

「まだなんだな！リバースカード発動『エンジェル・リフト』！墓地からレベル2以下のモンスター『ラッコアラ』を攻撃表示で特殊召喚！」

ラッコアラ ATK1200/DEF100

「そして効果発動！マスター・オブ・OZの攻撃力を1000上げる！」

マスター・オブ・OZ ATK4700 5700/DEF3300

おいおい。今なら神にも勝ちそうだが、あのコアラ。

「父ちゃん！これが皆からもらった力なんだな！そして、これで終わりだ！マスター・オブ・OZでマスターモンクを攻撃！エアーズ・ロッキー!!!」

巨大な拳が相手を潰せと振り下ろされる。

「この攻撃で隼人君の勝ちっす！」

「まだでござす！リバーカードオープン『孤高の格闘家』！自分の場がマスターモンク1体のみのため発動可能。このモンスター1体は戦闘破壊されず、相手モンスターの効果も受けなくなるでござす！」

「それでもダメージは通る！俺の勝ちなんだな！」

確かに破壊耐性を付けただけで耐えられるダメージじゃないぞ。

「ダメージステップにリバーカードオープン『体力増強剤スーパーズ』！相手から2000ポイント以上のダメージを受ける時、ダメージ前に4000ポイントライフを回復するでござす！」

いきなり現れたドリンクを飲み干す熊蔵さん。あれってソリッドビジョンじゃないの？

熊蔵 ライフ2800 6800 3500

「そんな！？これでもダメだなんて…俺は、デス・コアラを、守備表示にして、ターン、エンドなんだな…」

手札0枚

6ターン目 熊蔵

手札3枚

このターン、マスターモンクでラッコアラを攻撃されたら隼人のライフは0。もう手立てはない。

「おいのターン、ドロー。隼人。何をしとるでござすか。」

「何って…」

「確かに、このターンでお前は負ける。だが、ここまで闘えたのは友達のおかげだろう。その友達に見せるのが、そんな姿でいいと思うでござすか？」

「父ちゃん…」

「男なら、最後まで胸を張って立つんでござす！」

「…うん！」

隼人は、今一度親父さんを見つすぐに見て、立ち続けた。

「最後に、薩摩示現流奥義の極みを見せてやるでござす。魔法カード『ゴッドハンド・スマッシュ』！」

最後に出てきたカードは、マスターモnkの、いやおそらく、彼らの必殺技。

「このカードこそ、薩摩示現流一撃必殺の権化。マスターモnkと戦闘したモンスターを、ダメージステップ終了時に、破壊する。たとえば、攻撃力が上回っていても。」

「それじゃあ…」

「さあ。おいの拳を受け止めてみせろ！マスターモnkで、マスター・オブ・OZを攻撃！薩摩示現流奥義の極み！神拳一閃！」

「迎え撃て！マスター・オブ・OZ！エアーズ・ロッキー！」

2体の拳がぶつかり合い、衝撃波を生んだ。その波が走り抜くと辺りは静けさに包まれた。

「マスターモンクは、孤高の格闘家の効果で戦闘破壊されない。そして、ゴッドハンド・スマッシュの効果により、マスター・オブ・OZを破壊するぞわす。」

拳が離れ、地に倒れたのは、攻撃力が勝っていたはずの、オーストラリアのチャンピオン。

熊蔵 ライフ3500 1200

「そして、マスターモンクで、ラッコアラを攻撃ぞわす。」

隼人 ライフ800 0

WIN 熊蔵

「うっ、うっ、うっ…」

「隼人。おいは橋のたもとにむかう。友達と話したら来るぞわす。」

熊蔵さんは1人この場を離れた。俺達は隼人のもとへむかう。

「隼人君。次会った時は私とももっと仲良くなってね。」

「咲夜さん。こんな俺のために色々ありがとう。次会う時は、もう少しマシになってるんだな。」

「本当に行っちゃうの!？」

「約束だから、仕方ないんだな。でも最後に、最高のデュエルが出来たんだな!」

「ああ! いいデュエルだったぜ! 向こうに行っても元気でやれよ!」

「お前達もな!」

「また、いつか会おう。」

「ああ! 絶対、また会おう!」

4人でひとしきり話した。それでも、長くはいられない。

「じゃあ、そろそろ行かないと。父ちゃんが橋のたもとで待ってるんだな。」

「橋まで送っていくよ。」

皆で橋へとむかうと、人影が1つ。

「って大徳寺先生!？」

「あのう、父ちゃんは?」

「お父様なら1人でお帰りになられたにや。で、これを渡してくれ

と頼まりました。」

隼人に渡されたのは一通の手紙。そこには…

『今回はお前の友達に免じて許してやる。友達は大切にするべし。』

「つまり？」

「退学は無くなったのにや。」

意味を理解するまで少しの時。理解した時俺達は…

「「「「「やったー！！」「」「」

友達が変わらずそこにいることを、心から喜んだのだった。

第十三話 ぶつかる壁の名は親父 (後書き)

隼人父のデッキはいかがでしたか？

何やら前田家が拳で語る家族となりましたね。

さて次回は制裁デュエル十代&翔編予定です。

次回もオリジナルレシピを予定しております。

次はもっと早い投稿を目指して。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0646y/>

遊戯王GX-並行世界決闘録-

2011年12月3日23時52分発行